

Novel

館山 緑



ZONE

輝く季節へ

“There is such a thing as forever. . .”

Those words, I wondered who said them.

The words I happened to remember as I looked up at the sky.

They seemed to be the start of something.

Yeah, they were definitely the beginning. The beginning of the end.

There's voices calling me from opposite directions.

Novel

館山

緑



→輝く季節へ→

"There is such a thing as forever. . . "

Those words, I wondered who said them.

The words I happened to remember as I looked up at the sky.

They seemed to be the start of something.

Yeah, they were definitely the beginning. The beginning of the end.

There's voices calling me from opposite directions.

ONE ～輝く季節へ～

エピソード 2

◆原作・タクティクス ◆文・館山 緑



カバーイラスト タクティクス
本文イラスト SEI

プロローグ

中学校時代の恩師、南条紗江子の死因は居眠り運転のトラックにはねられたという、ごく当たり前に転がっているような原因だった。

曇り空がひどく重く感じるような晩秋の日曜日、中学三年のクラスの有志数人に混ざつて紗江子の家まで焼香に行つた里村茜は、壁にかけられたかつての担任の遺影を黙つて見上げていた。

紗江子が死んでから一年がたつていた。茜は葬儀の時にも数人の生徒達と一緒に参列していた。

まだ24歳だった紗江子は、写真の中でこやかに笑んでいる。

その写真を見ながら茜は別のことを考えていた。

紗江子の葬儀で茫然と、それこそ電柱のように立っていた幼なじみ。

城島司。

中学三年の時にはクラスメートだった司は、紗江子の死に大きなショックを受けていたようだつた。涙をこぼす女生徒よりもずっと動搖していた。

本来なら率先して焼香に来ようとするだろう司の姿は、卒業生有志の中にはない。もう、いないのだ。

それを誰も不思議とは思わない。

クラスメート達は誰も司のことを口にしない。

そのことにも茜は半ば馴れてしまっていたはずだった。
線香の匂いを体にまとわりつかせながら、茜は他の生徒達と一緒に南条家を辞し、途中で別れた。

『南条先生、まだ若かつたのにね……』

ひとりで曇り空の下を歩きながら、茜は昨夜の詩子との電話を思い出した。別の高校に通うようになつてから逢う機会は減つたが、明るくてお喋り好きな幼なじみは頻繁に電話をかけてくれる。

『あたし、結構南条先生つて好きだったな。授業、面白かつたし』

当時別のクラスだった柚木詩子ゆずきしづこも、紗江子に歴史の授業を受け持つてもらっていたので話は通じた。

『私もです』

綺麗で優しかった紗江子。彼女の歴史の授業は解りやすくて生徒の興味を引いたし、進路指導も的確だった。少なくとも茜にとつては望ましい担任だったと言えるだろう。

紗江子にまつわる記憶の中に、必ず登場する少年の横顔が浮かぶ。

普段は穏やかな少年が、むきになつているようにも見える真剣さで授業を受けている姿を思い出す。

『……司は、先生に突つかかつてばかりだつたように見えましたが』
質問を山ほど用意して、紗江子が困惑するまでぶつけた司。彼が紗江子の死でそんなにショックを受けたということが、茜にとつては一層ショックだつたのだ。

しかし茜は司の回想に浸つていることはできなかつた。
しばらく黙つた後に詩子がおずおずと切り出してきたのだ。

『……ねえ、茜。司つて、誰？ クラスメートの子？』

まだだ。

いつも三人で騒いでいた幼なじみ。その詩子でさえ司を忘れている。

そのことにとつくに馴れていたはずなのに、その時茜はひどく悲しかつた。

今になつてこんな気持ちになるのは紗江子の死が全ての始まりだつたからだろうか。

肌が湿つてくる。

いつの間にか霧雨が降つていた。霧雨は何となく空を見上げているうちにとても霧雨と呼べる代物ではなくなつてきていた。

茜は傘を差すと、もう一度ゆっくりと歩き始めた。

最後に見た少年の笑顔は、茜の方を向いてはいなかつたのに。
茜の足はあの日と同じようにそこへ向かっていた。

第1章 | 隠れんばの鬼

今年は、何故か雨が多い。

最近雨の音で目醒めるたびに、茜はいつもそう思う。

カーテンを開けて憂鬱な眼を向けると、くすんだ灰色が家や樹々を重く染めている。茜は黙つて庭を見下ろした。

(また、雨)

雨は好きではなかった。冬の濁つた空から落ちてくる雨粒は、どの季節より冷たく悲しい。それでも、最近は雨に見入つてしまつていて。

雨が降ると、どうしてもあの時のことを思い出してしまう。

階下から母の呼ぶ声が聴こえ、茜は我に返つた。

このまま無意味に雨が降るのを見続けている訳にもいかない。一応夜に多少下ごしらえをしてあるにせよ、学校で食べる弁当を作らねばならなかつた。やや偏食気味の茜は、なるべく自分の弁当は自分で作ることにしているのだ。

ゆつたりと眠つてはいたいが、おいしくないものを吃るのは嫌だつた。

(……カリフラワー、どうしよう)

昨日下ごしらえした分だけではややスペースが余るランチボックスの中身をシミュレートしながら、茜は一階に降りて行つた。

この一ヶ月、雨の日になると茜の足は登校途中にある空き地に向かっていた。

住宅街の間にぽつんと忘れ去られたように残っているやや広いスペースは、大きな家ばかり建っているその道沿いで、かなり異様な存在だった。今時枯れた草がぼうぼう生え放題の場所など、中崎町には数少ないに違いない。

もちろん、そんな所に入り込む物好きなどめったにいなかつた。せいぜい晴れた時に外で遊ぶ子供がいるくらいだ。子供達も雨が降れば濡れた草が絡みつくような場所にわざわざ足を踏み入れたりはしない。

茜以外にその場所にいた人間は今まで見たことがなかつた。

ただの忘れられた場所に過ぎない。気にさえしなければ全くどうでもいいような場所なのかもしれない。

しかし、その場所は茜にとつては特別の場所だった。

ただ、待ち続ける。

その為に茜は雨が降るたびにやつてくる。

永遠に同じ事を繰り返してゆくのかもしれない、そう思っていた。

「里村、こんなところで何やつてるんだ？」

背後からいきなり声がかかり、そこで茜の思考は中断されてしまう。

聴き憶えのある人物の声だ。ただし、茜が待ち望んだ相手ではなかつた。ゆつくりと振り返ると、そこには一応知つた顔があつた。

「誰？」

そう言いながら、彼がクラスメートの一人であるのを思い出していた。同じクラスの長なが森瑞佳もりみずかといつも一緒に登校してくる少年だ。喋つたこともなかつた。クラスの悪ガキ連中のひとりで、どんな人物なのかはよく知らなかつた。何故一人でいるのかは知らないが、特に歓迎すべき相手でもない。

冷淡な茜の口調に、クラスメートはがつくりきたようだつた。

「憶えてないのか……もう12月だぞ。俺つて印象薄いんだな。同じクラスの折原だ」
折原。そうだ、そんな名前だつた。茜はクラスの男子が彼を呼んでいた名前を思い出す。
そう、折原浩平おりはらこうへいだ。

「それで？」

茜の返事で浩平はますますがつくりしたようだつた。
「……まあ、偶然こんなどこで出逢つたんだし、挨拶でもしとこうと思つて……それだけ



なんだけどな

「私に用があるの？」

「全然ないけど

「私もです」

あまりにも愛想のなさすぎる返事のせいで、二人の間に居心地の悪い空気が流れる。その重苦しい沈黙に耐えられなくなり、浩平が口を開く。さすがに自分がこの場に全く歓迎されない存在であることくらいは理解できたのだ。

「じゃ、お互い用もないことだし俺、行くから」

いつも幼なじみと喧嘩をしながら登校してくる少年。

かつての自分といなくなつた幼なじみの姿とをオーバーラップし、一瞬だけ、ひどく悲しくなつた。

「待つて」

背を向けた浩平に茜は思わず呼びかけていた。

普段と変わらない感情が表に出ない声だったせいか、浩平の方は茜の方を何の気なしに振り向いたようだつた。

少しいぶかしげに茜を見ている。

去つてゆく浩平の後ろ姿に、城島司の姿が重なつてしまつたのだ。

浩平は、不思議そうにしながらも、決して眼をそらさずに見返してくる。

(司は……こんな風に私を見たことはなかつた)

普段は穏やかで優しい眼で見てくれた司。浩平は司ではない。似てきえいなかつた。それなのに、何故司のことを思い出したのだろう。

茜はふつゝと眼をそらした。

「ごめんなさい。やつぱりいいです」

浩平のことを見ないように空を仰いだ。微妙に不均一な灰色の空を睨んでいる茜のことを見つめるよりはいいはずだ。

それでも浩平は心配そうに声をかける。

「そんな雨の中で突つ立つてると、風邪ひくぞ」

「大丈夫です」

「……そうか」

その言葉を最後に、浩平は空き地から去つて行つた。学校へ向かうのだろう。浩平が消えてしまつてから小さな咳が出る。本当に風邪をひいてしまつたかもしれない。

それでも茜はしばらくの間、空を眺めていた。

何とか、ぎりぎり間に合う程度の時間に、茜は学校へ向かつた。

下駄箱のところでとっくに教室の中にいるだろうと思つていた浩平の姿を見つけ、一瞬間の悪い気分になつた。すぐ側に瑞佳がいてぶんぶん怒つてゐる。

どうやら迎えにきてくれる瑞佳を待たずに家を出たらしい。

なるべく彼らの視界に入らないよう静かに通り過ぎようとした。

「よお、また逢つたな」

そのまま廊下に出られると思つた時、浩平が声をかけてくる。

仕方なく茜は振り返つた。

「あんな所で何してたんだ？」

茜のことを不思議そうに見やる浩平。

確かに浩平からすれば、雨の中何もない空き地で突つ立つてゐるクラスメートは奇異以外の何者でもないだろう。問い合わせたくなつても不思議ではないかも知れない。

しかし、それに対し答えるべき言葉を茜は持つていなかつた。

彼には決して解りはしない、いなくなつた少年の話。正確には茜以外の全ての人間の記

憶の網からこぼれ出てゆく物語。

「まさかラジオ体操なんてのじゃないだろうな？」

冗談なのか本気なのか解らない言葉に苛立ち、無言で立ち去ろうとする。

「教えてくれたっていいじゃないか」

それでもねばる浩平に茜は告げた。

「ラジオ体操です」

どうやら茜の言動は浩平的好奇心を刺激してしまったようだ。

よほど気になるのか授業中も興味深そうに茜のことを見ている。視線が合ってしまうと冷たい視線だけで軽く非難の意志を見せる。声を出す訳にもいかなかつた。

（……何か用なんですか？）

その意図を理解したのか浩平は微妙に肩をすくめてみせる。もちろん、特に用がないまま茜を見ていただけなのは一目瞭然だ。

そのまま視線を教科書に戻した。

無意味に見つめ合っているのも馬鹿らしかつた。

しかし授業中に觀察するだけでは飽き足らず、浩平は昼休みになると菓子パンの袋をぶ

ら下げる、ランチボックスを広げて箸を付け始めたばかりの茜の席の近くまでやつて来たのだった。

茜の前の席にいる男子生徒、南明義みなみあきよしが食堂へ行こうと席を立つたところに、強引に席を貸せと交渉していた。

うんざりした顔で南が浩平を見る。

「また妙なことに使うんじゃないだろうな。机を何段積み上げるか挑戦する、なんでもうごめんだぜ？」

浩平はそういう子供じみた悪戯をする生徒でもあった。茜はまたか、と食事に戻る。しかし浩平はとんでもないことを続けた。

「单にお前の席で昼飯を食べようと思つただけだ」

言い返そうとする南のことを、一緒に食堂へ行こうとする男子生徒が呼んでいた。そのままなしくずしに南は教室から出て行ってしまう。

案の定浩平は何事もなかつたように茜の前の席に後ろ向きに座った。

「よお、奇遇だな。一緒に飯でも食おうぜ」

（どこが奇遇なんですか……）

心の中でそう呟くと、茜はおもむろにランチボックスの蓋を閉じ、小花模様が散つてビ

ンクの霧めいて見える布で手際よく包んでしまう。

「ごちそうさま」

「まだ全然食べてなかつただろ」

ろくに箸もつけずに茜が昼食を中断したことで、さすがに浩平もうろたえる。

「おなかいっぱいですから」

もちろん嘘だ。

「それでも残すのはよくないつ。お米にはたくさんの神様が宿つていて、残すと罰が当たるぞ」

「今日はサンドウイッチです」

「それでも半分くらいはいるかもしねりないだろ」

「いません」

茜は浩平を黙殺し、そのまま席を立つた。

とりあえず学生食堂へ行つて、少し何か食べよう。小食な茜には学生食堂は量が多すぎて辛いが、サイドメニューのおにぎりセツトくらいなら大丈夫だろう。小さなおにぎりがふたつだけなのだから。

(今日のサンドウイッチはおいしくできてたのに)

歩きながら、茜は溜息をついた。

茜としても相当すげなくしたつもりだつた。

しかし、浩平の根性の方がそれを上回つていたらしい。

今度こそはひとりでゆつくり食事をしようと思い、寒いのをこらえて中庭で弁当を食べ始めた茜の許に、昨日と同じように菓子パンの袋を持った浩平が歩いてきたのだった。

今日は空も久しぶりに澄んで、気持ちのいい青だった。しかし風は冷たく骨に染みるよ

うな寒さが体をさいなみ、茜の体はすっかり冷えきつっていた。

しかも昨日雨の中で立っていた時に、風邪をひきかけてしまつたらしい。時々くしゃみが出てしまう。それを使慢してまでこんな場所に避難してきたのに、何故わざわざ追いかけてくるのだろう。そう思うと茜の視線はどうしても険しくなる。

「……何か用？」

「一緒に昼飯でも食おうと思つてな」

につと笑いかけてくる。

愛想がいいとはお世辞にも言えない茜にも、時々ナンパ目的で話しかけてくる男達はいた。三つ編みにした淡い栗色の長い髪や、人形めいた整った容貌にひかれる男子は多かつ

たのだ。そんな少年達は茜の冷たい態度ですぐに退散してしまう。しかし、そういう類の少年とは浩平は一線を画していた。

表面上に現れているのは下心ではなく好奇心なのだ。

どこがそんなに好奇心を刺激するのかは全く推察できないが、どうやら浩平は好奇心がちゃんと満たされるまでは茜につきまとう気でいるらしい。茜にとつて折原浩平という少年は、迷惑極まりなかつた。

茜は視線をそらして呟いた。

「迷惑です」

浩平は苦笑いしながらも退散する様子がない。茜は浩平を無視して食事を再開した。どのみちこんなところで長時間座ついたら、風邪が悪化してしまう。早めに食べて教室に戻った方がいいだろう。

しかし、茜の食事スピードは女子の中でもかなり遅い。小学校の給食はいつも最後まで残つて食べていた。今は弁当だから量で調整できるが、遅いことは全く変わりがない。

小さなランチボックスからおかずはちびちびとしか減つてゆかない。
浩平はやはり一緒に食べることに決めたらしく、茜から二メートルほど離れた場所に座ると、菓子パンの袋をがさがさ開けた。

「……う、うまいぞ今日のジャムパンは」

浩平が声を上げる。

さつき見た袋には大手製パンメーカーのマークが入っていた。もちろん日にちごとに味にばらつきなどある訳がない。

「懐かしい中にもふくよかで上品な甘さが口に……」

料理番組のタレントのようなオーバーアクション。茜はじっと浩平の芸を見物することにした。

そのせいでかえってばつが悪くなつたらしい。浩平は途端に口ごもる。

「……広がつて」

そこで台詞は止まってしまい、浩平は大きな溜息をついた。

「……続きは？」

「いや、もういい」

次のパンはどうやら台詞なしで食べるようだつた。

これで静かになるかもしれない、と思つたが、茜の予想は外れた。

今度は茜のランチボックスを覗き込んでくる。

「女の子らしい弁当だな」

誰の弁当と較べているのだろう。

浩平は弁当を持つてこないタイプの生徒だから、この場合は母親などが作る自分の弁当とではないのは想像がつく。

(やっぱり、長森さんのお弁当ね)

親切で明るいクラスメートの表情を思い浮かべる。時々瑞佳のランチボックスから浩平がおかずをかすめて行つたりしていたのを見た記憶がある。弁当の中身はよく知らないが、調理実習でも瑞佳は確かに手際がよかつた。おいしくできているのだろう。

「……似合わない？」

「そんなこと言つてないって。うまそだな、つて思つただけで。俺、ここんとこずっとコンビニの弁当しかまともに食つたことないからな」

「……そう」

茜はうつむいて食事の続きを専念した。

風は段々強くなつてくる。

白い息を吐きながらおかずをつまむが、寒さのあまり指が小刻みに震えて効率は全く上がらなかつた。

自分は早々に食べ終わつてしまい、茜が食べるのを横目で見ていた浩平が、やや心配そ

うに話しかけてくる。

「里村……寒くないか？」

寒いに決まっている。

それでも茜は普段と変わらない口調で否定した。

「寒くないです」

「俺は凄く寒いと思うんだが」

「それでもないです」

唇の端から感覚が失せてきている。

浩平は疑わしそうに茜を見やつた。

「……無理してるように見えるんだが」

「気のせいです」

こんなに寒いのにそんなことを訊かないでほしかった。寒いか、と訊かれるとなりますます寒くなつてくるではないか。

「それに里村、お前体が震えてないか？　俺は絶対寒いと思うぞ」

「……そんなこと、ないです」

こんな気候の話題で意固地になつてゐる自分の姿はかなり馬鹿らしかつた。

しかし寒い、と言つてしまえば流れからすると、必ずこれから中で一緒に食べよう、という話になつてしまふ気がするのだ。

放つておいてほしかつた。この寒さの中での、浩平が早く根負けして校舎に戻つてくれればいい。そう思いながらも昼休みの終わりまでこんなことを繰り返す羽目になつてしまつたのだった。

翌日の昼休み。

「今日も、中庭で食うのか?」

浩平が来ないうちにさつさと中庭へ移動しようと思つた矢先、後ろから浩平に声をかけられてしまう。

誰もいない下駄箱のところで、浩平に追いつかれてしまつたのだ。

茜の脚は遅い方だから男の子の脚力相手では少しくらい早く出ても意味がなかつたのだ。溜息をついてしまう。

何故、ひとりにしておいてくれないのでだろう。

茜は浩平のことを見上げた。

「……今日は、学食にしないか? そっちの方が寒くない」

特に浩平が長身だという訳ではなかつたが、平均より小柄な茜と較べるとかなり身長差がある。

「中庭の方がいいです。人がいないから」
できればあなたもいてほしくない、という意味を十二分に込めた視線を向けた後、黙つて歩き出した。

しかし浩平はそんなことでめげて退散するような、やわな神経を持ち合わせていなかつたらしい。何事もなかつたようについてくる。

仕方なく昨日と同じ場所に座つてランチボックスを包む布を外した。

浩平の方も昨日と同じように茜から少し離れた場所に座つてパンを食べ始めた。
「あのさ、里村。何でこんな場所で食べてるんだ？」

「誰もいらないところで食べたかったからです」

「なるほどな。確かにこの季節なら普通は誰も来ないからな」

本来だつたら茜自身も来たくはないのだ。

茜はじいつ、と浩平を見てやつた。

「……普通は」

浩平は少しだけ溜息をつくと、口を開いた。

「どうして、あんな場所にいたんだ……？」

あの、雨の空き地。

何か作業をしているならともかく、ただ黙つて立ち尽くすだけでは不審に思われても仕方がないのは事実だった。

茜は眼を伏せた。

「好きなんです、あの場所が」

自分の声がひどく嘘っぽく響く。

浩平が自分を見ている視線を感じる。

どことなくぶつきらぼうにも聽こえる声で、浩平が呟いた。

「その割には悲しそうだった」

何も知らない人間から見ても悲しそうに見えることに、茜は傷付いた。

彼らには悲しみの中身は決して解らない。司が消えてしまってから、茜は他人に悲しみを解つてもらうことを半ば放棄していた。

それなのに、茜が悲しんでいることだけは解るのだ。

茜はうつむいてしまった。

樹々の間で多少は風が入り辛くなっているが、それも程度の問題だ。すっかり乾ききつ

た木の葉が樹から吹き飛ばされてゆく。空気の冷たさも昨日よりもひどくなっている。

「……里村、昨日の夕飯何だった？」

やはり茜のことを気遣っているのだろう。浩平は努めて明るい声で話しかけてくる。茜は少しだけ悪いと思い、少しだけ穏やかな表情で口を開いた。

「オムライス」

「そうか。俺は炒飯だつたな」

单品で夕食に出されるものでもないだろうと思い、茜は訊き返す。

「……自分で、作つたんですか？」

「……え？」

茜が話しかけてきたのを見て浩平は眼を丸くしている。

「炒飯、自分で作つたんですか？」

「あ、ああ。ま、そのくらいは自分でしないとな。一人暮らししたいなもんだから」

「一人暮らし？」

コンビニにお世話になつていると昨日言つていたのを思い出す。

茜の対応に多少戸惑いながらも浩平は笑つてみせた。

「一応は叔母さんと住んでるんだけど、仕事が忙しいみたいで家事はほつたらかしだから

な。時々発作的に家事しまくつてゐる時もあるけど」

「……そう」

茜の家は両親と弟の四人暮らしだ。小さな時には親戚の家に泊まりに行つたこともあるが、親でない人間と一緒に住んでいる感じがあまりぴんとこない。

「しかも朝早くて夜遅いから、ここ一ヶ月くらい顔を合わせてないな。案外道で逢つても解らないかも知れないな」

最後は冗談で締めくくつた。

「道で逢つても解らない」という言葉が今の茜には痛かつた。当然浩平の意図したものではないが、どうしても司のことを思い出してしまう。

「まあ、そんな訳で炒飯くらいは自分で作れるようになつたんだよ。里村は料理とかするのか?」

「私は、料理は好きです」

いろんな食べ物を作ること自体が好きだし、調理する時の何かを考え込んだりしないような時間が好きだ。いい匂いも、綺麗にできあがつてゆく過程も。おいしいね、と人に喜んでもらえることも。

「弁当とかも自分で作つてるのか?」

「はい、その方が好きなものを入れられますから」

運動部に入っている弟に母が作る、スタミナを付けましょう的なラージサイズの弁当では、茜は絶対に食べきれないし、弟と一緒にものだとどうしてもこつたりしたものが多くなる。

「そうだな。里村の弁当は確かにうますうだ」

昼休みの終了を知らせるチャイムが鳴る。

何とか食べ終わり空になつたランチボックスを布で包み、茜は立ち上がつた。
浩平もパンの入っていたビニール袋をいい加減にポケットに突っ込みながら立ち上がるところだつた。

「また、ここで食べるのか？」

「……はい」

「だつたら俺もまたつきあつてもいいか？」

嫌です。

その一言で済むはずだつた。そうすればこんな寒い思いをしながら食事をする必要は全くなくなるのだ。

しかし茜の口からは拒否の言葉は出なかつた。

(この人、ちょっと詩子に似てる……)

今世界に残っているたつたひとりの幼なじみ。マイペースではあるが、茜を気遣つてくれる詩子の空氣と似たものを、浩平も持つていた。そのせいか、今まで喋つたことのない浩平の存在が何故か不快に感じなくなつてきていたし、側で彼が話すのを聴いているのもさほど悪い気分はしなかつた。

それでも『いいですよ』とうなずいてしまうのも何となくそぐわない気がした。

茜はどちらの方法も選ばなかつた。

先に歩き出しながら浩平に振り返る。

「遅れますよ」

ただ、そう促しただけだつた。

● ● ●

理想のトライアングルのはずだつた。

あんまり人の意見を聞いてないところはあるけど、元気でいい奴の詩子。

おとなしいけど頑固で、冷たさだけが優しい茜。

僕は性格的に開きのある二人のクツションのような役割だった。幼稚園の頃から今までの間、それは全然変わりはしなかった。

『いつも仲がいいのね』

飽きるほどそんなことを言われたものだった。

仲がいいって言つてもいつもいつも大喧嘩だ。

それでもずうっと側にいる。

それが自然だつただけだ。

ずっと三人で騒いでいられたらよかつたのかもしれない。

そうしていれば僕は幸せだったはずだ。

あの時までは。



「……また逢ったな。ピンクの傘が見えたから里村だろうな、とは思つたんだ」

雨の朝、やはり浩平は茜のことを見つけて近付いてきた。

茜は浩平がこうして声をかけてくるのを何となく予想していたせいか、さほど困惑することなく応対することができた。

とは言つても、相変わらず表情を表に出さないままそちらを向いただけだが。

「毎日逢つてます」

「この場所で逢つたのは2回目だろ?」

人気のない空き地。司を待つてゐる為の場所に踏み込んでくる闖入者ちんにゅうしゃは、あまり有り難くない存在だった。もちろん茜がこの空き地の持ち主だという訳でもなく、持ち主にとつては茜も浩平も同じくただの闖入者でしかないのだが、茜としてはやはり誰かにここに踏み入つてほしくはなかつた。

冷たい声で問いかける。

「……用があるの?」

「一緒に行かないか? もうそろそろのんびりとはできない時間だぞ」

茜は腕時計をちら、と見る。8時24分。確かにそろそろ学校に向かわないとまずい時間ではあった。

しかし、この空き地から離れ難かった。

できれば雨の間、ずっとここに立っていたかった。

あの日の、雨に打たれて立つ司の姿が頭に再生される。その後、司の口から漏れた言葉が再現されようとしたところで、茜はきつく瞼を閉じた。

思い出したくなかった。

「本当に遅れるぞ」

「大丈夫……走るから」

浩平が大きな溜息をつくのが聴こえた。

「なあ、里村。ここに何があるんだ?」

説明をしても、所詮は解つてもらえない。

親しい人達の中から共通知識としての司の情報が消え去ってしまった後、どれだけ空しい語り合いをしただろう。しかも、そもそも司のことを知らない人物に何を言えばいいのか。

茜が口を開く様子がないのを見て、浩平は諦めたようだった。

雨が止んだ。

まだ厚い雲がゆるゆると風で動いてゆく。

ぱちん、と傘を畳んで道の方へ歩き出す。

「……遅れますよ」

茜が後ろに回っていたことを気付かなかつた浩平が大げさに驚く。茜は小走りで浩平が空き地から出てくるのを確認すると、そのまま歩き出した。

第2章 | スウィーツ＆スウィーツ

茜の眼の前で、浩平が茜の弁当を一心不乱に食べている。

その様子を茜はじつと見ていた。

もちろん、浩平の為にわざわざ弁当を作ってきた訳ではなかつた。本来ならば茜が自分で食べているはずの弁当だ。

今日の三時間目にあつた調理実習で作つた、炊き込みご飯とあさりの味噌汁を食べてしまつたら、とても弁当までお腹に入らなかつただけなのだ。

(お弁当、作つて来ない方がよかつたかも知れない)

しかし調理実習があるからと言つて弁当を用意してこない、というのは一種の賭けである。何割かの確率で、とても食用とは思えない代物ができるのだ。

グループ分けされた中にどれだけ料理馴れしている生徒がいるか、というのが重要な要素だつた。しかもそれを自分で選ぶ訳にはいかない。先生によつて出席簿順に班が分けられているからだ。

今までの調理実習でも、とても人間業で作れるとは思えない謎の物体を制作する女生徒は案外多かつた。そういう場合、作った当人も含めて一口食べて全員が箸を置く。持ち帰つても比較的平気な菓子類ならば、につこり笑つて男子生徒に押し付ける、という荒業で処理する女子もいるが、ご飯ものはそういう訳にもいかないので、当然自分の弁当で口直

しをすることになるのだ。

今年の調理実習で分けられたグループでは、そのあたりの確率は5割強といったところだつた。

しかし今回はそういういた致命的な被害を被ることもなく、結構おいしくできた。

何となくお馴染みになってしまった浩平との昼休み。ランチボックスを広げたまま、何も食べないで座つていたら、菓子パンだけでは食べ足りなさそうな浩平に弁当をくれと頼まれたのだ。

「……嫌です」

当然、そう答えた。

「残すのももつたいないと思うけどな。せつかくうまそうにできるのに」

浩平は照れてしまふほどストレートに料理を誉めてくれる。

弁当をあげるような間柄では決してないが、誰かに自分の作ったものを喜んで食べてもらえることは好きだ。それに、おいしくできた弁当を残して帰るのは確かにもつたいなかつた。

茜はためらいながら問いかげた。

「嫌いな食べ物はありますか？」

浩平が軽く考え込んだ。

「そうだな、納豆くらいかな」

納豆は茜も嫌いだつたから、弁当どころか時折母親の代わりに作る家の食事でも、未だかつてメニューに入れたことはなかつた。

(でも、あんまり納豆つてお弁当には入らないと思うけど)

そんなことを考えながらも、茜は少しだけ穏やかな表情になつた。かすかに伏せ眼がちのままで、浩平にはその表情を気取られないよう努めする。

「納豆は入つていません。私も嫌いですから」

そう言い添えて、浩平に弁当を渡してやる。

「ありがとう」

につ、と浩平が笑つた。

真面目な声で冗談を言うような印象の少年は、笑うと実際の年齢よりもやや子供っぽく見える。時折からかわれているのか、と軽い苛立ちを感じる言動と較べるとアンバランスな感じさえもする。

さすがに調理パンを食べてもまだ足りない、というだけはある。浩平は見ていて気持ちがいいくらい、おいしそうに弁当をたいらげていつた。

「ごちそうさま、ありがとうございます」

にこにこ笑いながら、浩平はランチボックスを茜に返して立ち上がった。

もうそろそろ昼休みは残り少なくなっている。茜も本来なら黙つて教室へ戻るべきだったのかも知れなかつた。

しかし、茜は座つたまま浩平を見上げて言つた。

「こんな時、普通は感想を言うものです」

浩平は振り向くとすぐに口を開いた。

「10点」

「何点満点ですか？」

「10点。文句なくうまかった」

子供のような微笑みをうかべると、浩平は校舎に向かつて歩き出した。

茜も黙つてその後からついてゆく。

下駄箱のところでふと、思い出したように浩平が言つた。

「なあ、里村」

「……はい」

「あの場所には、何があるんだ？」

茜は靴を脱ぐ手を一瞬止めた。

今朝も浩平と逢つたあの場所。

「……空き地のこと？」

「ああ」

そのまま黙殺してもよかつた。

茜にとつて浩平はただの、空き地で待つ時間へ入り込んでくる闖入者でしかないはずだ。浩平に対して説明する必要は特になかつた。どのみち、解つてなどもらえないのだから。それは充分身に染みていたはずなのに、茜は口を開いていた。

「思い出の場所です」

一番大切な幼なじみの、悲しい思い出。

そう、確かに思い出の場所だつた。

浩平はしばらく考え込んでから、遠慮がちに訊いた。

「……それで？」

「それだけです」

靴をはき終わると、茜はそのまま教室へ向かつた。

どうしてなんだろう。

毎度毎度押しかけてこられる、というのに、浩平との昼食を何となく心待ちにしている自分が不思議でならなかつた。

「パンを買つたらすぐ行くから、中庭で待つててくれるか」

そう言われて、どうして来る必要はないと告げられなかつたのか、と思う。しかし茜がしたことは、そのまま中庭に直行することだつた。

(多分、彼がおいしそうにお弁当を食べる人だから……きっと、それだけ)

茜はうつむいた。

どれだけそうしていたらうか。

「よつ、茜。待たせたな」

浩平の声で我に返り、茜は顔を上げた。

「……あかね？」

いつの間にか浩平は自分のことを茜、と呼び付けにしている。思わず驚いて浩平を見上げてしまつたが、当の本人の方は全く気にしていない。

「あれ、違つたか。だとすると……何だっけ」

「……茜で合つてます」

ほっとして浩平が笑んだ。

「最初このクラスになつた時に自己紹介で聞いたきりだつたから、自信はなかつたんだけどな」

出席の時に担任が呼ぶだらう、と思つたが、あえて言わなかつた。
それにしても、これまでろくに喋つていなかつた茜のファーストネームを、浩平がちやんと憶えていたことが意外だつた。

クラスでは茜はどちらかと言うと目立たない少女だ。女子を含めクラスの生徒は、みんな『里村さん』や『里村』としか呼ばない。

茜と呼ぶのは両親と、喧嘩をする時の弟。そして二人の幼なじみ。幼なじみのうち一人はもう既にいないので、世界中に茜を名前で呼ぶ人間はもう三人しかいないのだ。
もちろん、弟は普段は名前を呼び捨てなどしないので数には入つていない。

「……よく、憶えてますね」

「何がだ？」

「私の名前です」

かすかにうつむいて茜は話し続ける。

「でもさ、普通はクラスメートの名前くらい憶えとくもんだろ？　名前を忘れられたら悲しいしな」

「……はい」

「本当だ。」

名前を忘れ去られてしまうのはひどく悲しいことだ。その当人にも、周囲で見ている人間にとつても。まるでその人間がいないように感じてしまうのだ。

茜は林檎のコンポートにフォークを突き刺した。

よく煮えた甘い林檎に、する、とフォークが沈み込んでいった。

「どうしたんだ茜……じゃなかつた里村」

「茜でいいです」

今はほとんどの人がそうは呼ばないが、本当は茜と呼ばれる方が好きなのだ。

ほんの少し、ちょっぴりではあるけれども気を許したくなる浩平に、今まで通り里村と

事務的に呼ばれ直すのは何となく寂しかった。

「……私は苗字より名前の方が好きですから」

「解った。そういうことなら」

浩平はうなずいた。

その後何を話していいのか解らず、茜はうつむいたままランチボックスの中身をつついていた。浩平の方も調理パンを食べてしまつた後は、手持ち無沙汰に茜が食べ終わるのを待つてゐる。

朝は雨が降つていたせいか、昼に晴れた後でもかなり冷え込んでいる。湿氣が温度を吸つてしまつているのだろうか。

「……寒いです」

「じゃ、明日からは教室でいいだろ?」

「私は、最初は教室で食べてました」

「そう言えばそうだよな」

茜はうなずいた。

「じゃあ何でこんな寒いところで……まさか、俺のせいか?」

「……はい」

茜がそう言うと、浩平は眼に見えてしゅんとした。

「冗談です」

たつた一言そう告げるだけでも、普段そういうことに馴れていない茜にとつては大仕事だった。それだけのことなのに少し顔が熱い。

(詩子だつたらこんな簡単なのに)

元気で明るい幼なじみの詩子。

そう言えばしばらく詩子に連絡していなかつた、と思い出す。
そんなことを考へてゐるうちに、チャイムが鳴り出した。

「……えつと、じゃあ……戻ろうか」

どことなく浩平の方も間が悪そうだ。

何となく照れたように視線をそらしながら茜も上履きに足を突つ込んでいた。

「……浩平」

「……ん?」

「合つてますか」

ほんの少しうろたえた表情を浮かべた浩平は、すぐに立ち直つて軽くうなづいた。

「ああ、正解だ。今度から俺のことも浩平でいいぞ」

「……はい」

茜は浩平に見えない角度で微笑んだ。

あ……かね……

後ろから、誰かに呼びかけられたような気がして、茜は振り返った。

しかし一緒にいる浩平は、昼からの授業に間に合おうとして早足で前を走っている。他の誰かというのも考えられなくはないが、そんな時間帯に誰かが呑気に茜の名を呼ぶ訳がなかつた。

そもそも、この学校で茜の名を呼ぶ人間は浩平しかいないのだ。

「茜、遅れるぞ」

やはり浩平の声とは違う。

茜は首をかしげながらも浩平を追いかけた。

放課後、一緒に帰ろうという浩平の誘いを当然のように断わり、茜は雲が多いせいで紫ががつて見える夕焼けの中をひとりで歩いていた。

茜の歩みは遅い。

もともとそれほど脚は速くないので、目的もなく歩いていると大抵の人間が茜のことを追い越してゆく。

しかし、茜の数メートル後ろについたまま、同じスピードで歩いてくる人間がいる。

浩平以外にそんな物好きはない。

最初は無視していたが、後ろに感じる視線にどうにも耐えられなくなつた茜は、とうとう振り向いた。

「……迷惑です」

きよとんとした顔の浩平が、ちょうど五メートルほど先に立っていた。

「もしかして俺のことか？」

「……はい」

もしかしなくとも、ここで立っているのは浩平と茜だけだ。

茜はじいっ、と浩平の顔を見た。

「どうして、後をつけるの」

「いや、何となく」

「何となくで後をつけないで下さい」

茜の非難の眼付きに、浩平は頭をかいてみせた。

「でも、俺もこっちの方角だからな。ほら、あそこコンビニの先の道で右に曲がるんだよ」

遠くに見えるコンビニを浩平は指差した。茜の家に向かう道は、それより一本前を右に曲がるT字路だ。

「……解りました。……一緒に帰りましょう」

「ほんとか？」

「後をつけられるよりはいいです」

苦笑した浩平は、茜の隣を歩き始める。

薄紫の雲から差してくる夕陽が浩平の髪を照らしている。自分の、三つ編みにした髪もいつもより赤っぽく見えた。

「いつもひとりで帰ってるのか？」

高校では特に親しくしている生徒はいなかつた。

「……はい」

「そう言えば茜、部活とかは入ってるのか？」

「帰宅部です」

「そうか、俺もそんなもんだ」

何気ないことを訊いてくる浩平に、今度は茜が質問を放つた。

「長森さんとは、幼なじみなんですか？」

「腐れ縁ってやつだ。あいつとは小学校の頃からのつきあいだけど、まさか高校まで一緒になるとは思わなかつた。いつまで俺の側にいるつもりなんだろうな」

同じようなことを中学の時に自分も思つたことがある。

「嫌ですか？」

「別に嫌つて訳でもないけど、時々うつとうしいと思うこともあるな。でも、時々感謝もしてゐるんだ。何て言うか……そうだな、側にいることが当たり前すぎて、当然みたいで。いい加減俺のことは放つておいてほしいのに、いなくなつたら文句を言つてしまふのかもしれない。茜、そういうのつて変か？」

茜はわずかに首を振つてみせた。

「合つてますよ。幼なじみつて、そういうものです」

「茜にもいるのか、幼なじみ」

「……はい」

今は別の高校に通つてゐる詩子。

そして、いなくなつた司。

「その幼なじみもやつぱり……」

「私はこつちですから」

ちょうど茜が曲がるところまで来て、言葉を遮つた。軽く右へ曲がる道を指差してみせると、浩平はうなづいた。

「じゃあ、ここまでだな」

「はい」

「また一緒に帰ろうな」

そう言つて浩平が手を振つてくれる。

茜は会釈すると道を曲がつた。

次の日の夕方は気持ち良く晴れていた。

「なあ茜、少し寄り道していこうか」

放課後。一緒に帰り道を歩く浩平が思いついたようにそう言つた。

「寄り道?」

「この近くにうまい鯛焼き屋があるんだ」

「……鯛焼き」

茜の脚はぴた、と止まつた。

もともと茜は甘い物が大好きで、料理に手を染めたきつかけもお菓子作りだ。今の季節にコンビニへ行くと食べたくなる中華まん系は、自宅で生地から作ることもままあるのだが、さすがに鯛焼きまでは自宅で作ることはできなかつた。

何よりもまず型が売っていないし、料理の本を探しても鰯焼きの作り方は載っていないのだ。母が時々買っててくれるスーパーの鰯焼きは、どうしてもぱりぱり加減が今ひとつだつた。

だからこそ、ある意味で鰯焼きという食べ物は少しだけ特別だ。

そんな茜の思いをよそに、浩平が鰯焼きの説明をしてゆく。

「安くてうまいし、しつぽまでの餡はお約束だ。こんな寒い日に頬張る鰯焼きはさぞうまいことだろう……と俺は思うんだけど、どうする？」

答えなど決まっている。

「行きます」

「よし、決まった。こっちが近道だ」

浩平は嬉しそうに笑うと、あそこの道を曲がるんだと付け加えた。

しかし、數十分後。

「頑張れ茜っ、もう少しだつ」

浩平はあの後、道とも思えないコースに入り込むと、さんざん迷ったのだ。行き方について心もとない発言をしている時に、引き返すべきだったのかもしれない。

もう少し、という言葉も優に15回は聴いた。そのたびにどこにも出られずひたすら歩く

ことを繰り返していた。

「……あ、抜けられそうだぞ。よ、よかつた」

もう茜は言葉もなかつた。

鯛焼き鯛焼き、と頭の中で唱えながら頑張ってきたようなものだ。
しかし。

「……あれ？」

眼の前には毎日お馴染みの学校がそびえ立っていた。まだ部活にいそしんでいる生徒達
もいるようだつた。かすかにクラシック音楽の演奏が聴こえる。

「鯛焼き屋さんには見えません」

「俺も見えない。いや、偶然とはいえ学校への近道を発見するとはついてるな」
全然近くなかつた。普段歩いている道の方が平坦な分、まだずつとまつた。

浩平のことを非難を込めてじつと見上げる。

思い切り間の悪そうな表情で、浩平は呟いた。

「……悪かった」

「……はい」

もう夕焼けも半ば濃い紫に呑み込まれていた。

「どうする茜。今日はもう遅いし、鯛焼きはまた今度にするか？」
「嫌です」

ただ歩き回る徒労を抱えて家へ帰るのはまっぴらだ。

「でもなあ、今の道引き返すのか？」

「近道以外にはないんですか？」

「あるけど、普段通らないから自信がない」

「行きましょう」

茜は歩き出して いた。

結局のところ、鯛焼き屋に辿り着くことはできなかつた。

二人が辿り着いた場所は、見晴らしのいい公園だつたのだ。

「うおおっ、こんなはずではっ！」

さつきまで意気揚々と道案内をしてきた浩平が頭を抱えている。

「……鯛焼き」

ひどく空腹になってきた。

「鯛焼き以前に家に帰れるか心配になってきた」

「……鰯焼き」

「また今度な。そのうち埋め合わせするから」

「はい」

空腹をこらえて茜はうなずいた。

そこで初めて公園の中を見回す。植え込みの感じといい、いくつかあるベンチの配置と
いい、ゆつくりするには申し分なさそうな場所だった。

「……でも、ここはいい場所です」

「近くにこんな場所があるなんて俺も知らなかつたな。ほら、そろそろ帰らないと真っ暗
になるぞ」

浩平に促されて、茜も歩き出した。浩平と別れた後、自宅に着く頃には、もうすっかり
夜になっていた。

「茜、詩子ちゃんから電話があつたわよ。連絡下さいって」

家へ帰ると母がキッチンからそう伝えた。ビーフシチューの匂いが玄関までたち込めて
いる。

玄関にある留守番電話が点滅している。再生ボタンを押した。

『あつ、もしもし柚木です。えっと、茜に伝言です。最近どうしてるかな、って思つて電話しました。電話下さい。それじゃ』

（詩子……）

電話口だと普段よりずっと緊張して聴こえる詩子の声を最後まで聴いてしまうと、茜はメッセージを消去した。

一度受話器を持つたが、そのまま下ろしてしまう。

この前電話してからもう一ヶ月になる。南条先生の一周年忌の前だ。あの後からどうしても詩子に電話し辛くなつてしまつてしている。

『……ねえ、茜。司つて、誰？ クラスマートの子？』

あの言葉を聴いたのは二回目だ。

痛々しい事実を思い知らされる言葉をもう一度訊くのは耐えられなかつた。

詩子のせいではない。それは解つていて。それでも茜は詩子にどうしても電話をする気になれなかつた。

茜は溜息をついて二階へ上がつていった。

何となく浩平という少年に茜は馴れてきていた。

いたずら坊主で子供っぽいところがあつて、ぶつきらぼうな声を出して真顔で冗談を言う。それでも居心地のいい空間がそこにはあつた。

だから浩平が茜に、まずいと評判のジュースを飲ませて反応を見よう、などという馬鹿ないたずらをしても、結局許してしまうのだ。

もちろん茜は浩平の幼なじみの長森瑞佳とは違うから、簡単に『いいよ』と許してはしまえない。

山葉堂のワッフルで許してあげます、と浩平に笑いかけたのだ。

それが昨日のことだ。

焼きっぱなしのお菓子の中では、どちらかというとぱりぱりとした触感のものが好きな茜は、商店街に去年できたワッフル専門店『山葉堂』のワッフルが大好物だ。一応自宅にもワッフルメーカーがあるので自分でも焼いてみたりもするが、やはり山葉堂のワッフルには及ばなかつた。

ちょうど昨日からテスト期間に入つていて、午前中だけで学校は終わる。

暇なら一緒に食べに行こう、と言われた茜は、浩平と一緒に下駄箱のところまで向かつたのだった。

茜と浩平が靴をはき替えていると、後ろからぱたぱたと走つてくる音が聴こえた。

大きなリボンを頭に結んだ、茜よりもずっと小柄な女の子だった。高校ともなると学年での身長差はほとんどない。だとしたら多分この子はクラスで一番か二番の小ささのはずだった。

校章の色が違う。一年生だ。その子が浩平の袖をぐいぐいと引っ張る。

「おいおい澪、袖が伸びるって」

澪と呼ばれた女の子は慌てて浩平の袖を離した。

にこにこと、楽しそうに笑っている澪が、茜にぺこり、と頭を下げた。茜も何となくつられてお辞儀を返した。

「あれ、二人とも初対面だったか？」

「はい」

茜が返事をすると同時に、うんつ、と澪がうなづく。

「ええとこっちが上月澪、一年生。こっちが里村茜、俺のクラスメート」

浩平はおおざつぱ極まる紹介をする。それでは足りないとと思ったのか、澪が手に持ったスケッチブックを開いて、さらさら何かを書き付ける。

澪が話せないのだ、ということにその時気付いた。

今まで気付かなかつたのは多分、澪が元気で表情豊かな女の子だからだろう。

「私は里村茜。よろしく」

「うんつうんつ、と澪は大きく二回うなずいた。

「澪もこれから帰りか……おい、澪？」

澪は茜を感心したように見入つていていた。さすがにこんなにまじまじと他人に見られた経験は茜にはなかつたので、ひどく間の悪い表情になつてしまふ。

「おい、どうした澪」

澪はそこでやつと我に返り、もう一度スケッチブックに何かを書いた。

長いの

多分髪のことだらう。茜はかすかに笑んで、澪に話しかけた。

「髪、長いの珍しい？」

うんつ、と大きくうなづいた。確かに茜の髪は優に腰まで伸びている。このくらい長い

髪は珍しいかもしれない。

「だったら澪も伸ばしてみたらどうだ？」

澪は軽く考え込んだ。髪を伸ばした自分をシミュレートしているらしい。

似合わないの

浩平もロングヘアの澪を想像してみたらしい。頭を重そうに振った。
「……確かに」

澪が悲しそうにうつむいてしまう。茜は澪の頭に手を置いて言った。
「短い髪、似合ってます」

やはり心が慰められたのか、澪はうん、とうなずいた。

「で、澪はこれから帰るのか？」

うんつ。大きくうなずいて浩平と茜を見る。

「俺達か？ 俺達は商店街に寄つて帰るところだ。山葉堂のワッフルを食べに行こうかな、
と思つてな」

商店街、ワッフルと聞いた澪の表情が輝いた。

浩平の袖を小刻みに引っ張っている。行きたくてたまらないのだろう。

「澪も行きたいのか？」

うんつうんつ。

眼がきらきらしている。

「一緒に行く？」

茜がそう言うと、澪はスケッチブックを持った手を挙げて嬉しそうに飛び跳ねた。

「……浩平」

「解ったよ、三人で行こうな」

浩平は笑って歩き出した。

まだ真昼だというのに既に行列ができる山葉堂へ浩平が並びに行っている間、茜と

澪は道の隅で待っていることになった。

(どうしよう)

もともと茜はそれほど人と話すのが得意な方ではない。まして初対面の相手に対して、

ちゃんと嫌な気持ちを与えないように話題を振る自信はなかった。

澪は喋れないのだから、間を持たせる為には茜が話題を見繕つていかねばならないだろ

う。そう思って話題を探していた時、澪がスケッチブックを差し出した。

どうやって編むの？

もしかしたら学校にいる時から気になつて仕方がなかつたのだろう。うずうずと/orする様子がよく解る。

「三つ編みだけど……やつてみたいの？」

うんつ。

澪が大きくうなづくと、茜は左の三つ編みを丁寧にほどいてみせた。

「髪をね、大体同じくらいの三つの房に分けて……こうやつて、順繰りに後ろから前へ持つてくるの」

一度澪に見えるようにゆつくり編んでみせると、もう一度ほどいた。

「……やつてみる？」

うんつ、と嬉しそうにうなづいて、茜の髪にじやれつくように寄つてきた。
まず髪を三つの房に分けるところからつまづいている。同じ程度の量に分ける、という
のが案外難しいらしい。澪は四苦八苦しながら茜の髪をくちやくちやにしていた。

「最初は馴れないかもしれないけど、頭の中でこのくらい、つて分けた分だけ取るようにするといいです」

そこを何とかクリアして髪を編むところまで辿り着く。もう片方の綺麗な三つ編みを手本にしながら、おぼつかない手つきで編んでゆく。

その途中で浩平が戻つて来た。手に持つてある山葉堂のマークが入った紙袋から、温かい湯気が立つていた。甘いチョコレートソースの匂いがする。

「何やつてんだ？」

「編み方を教えています」

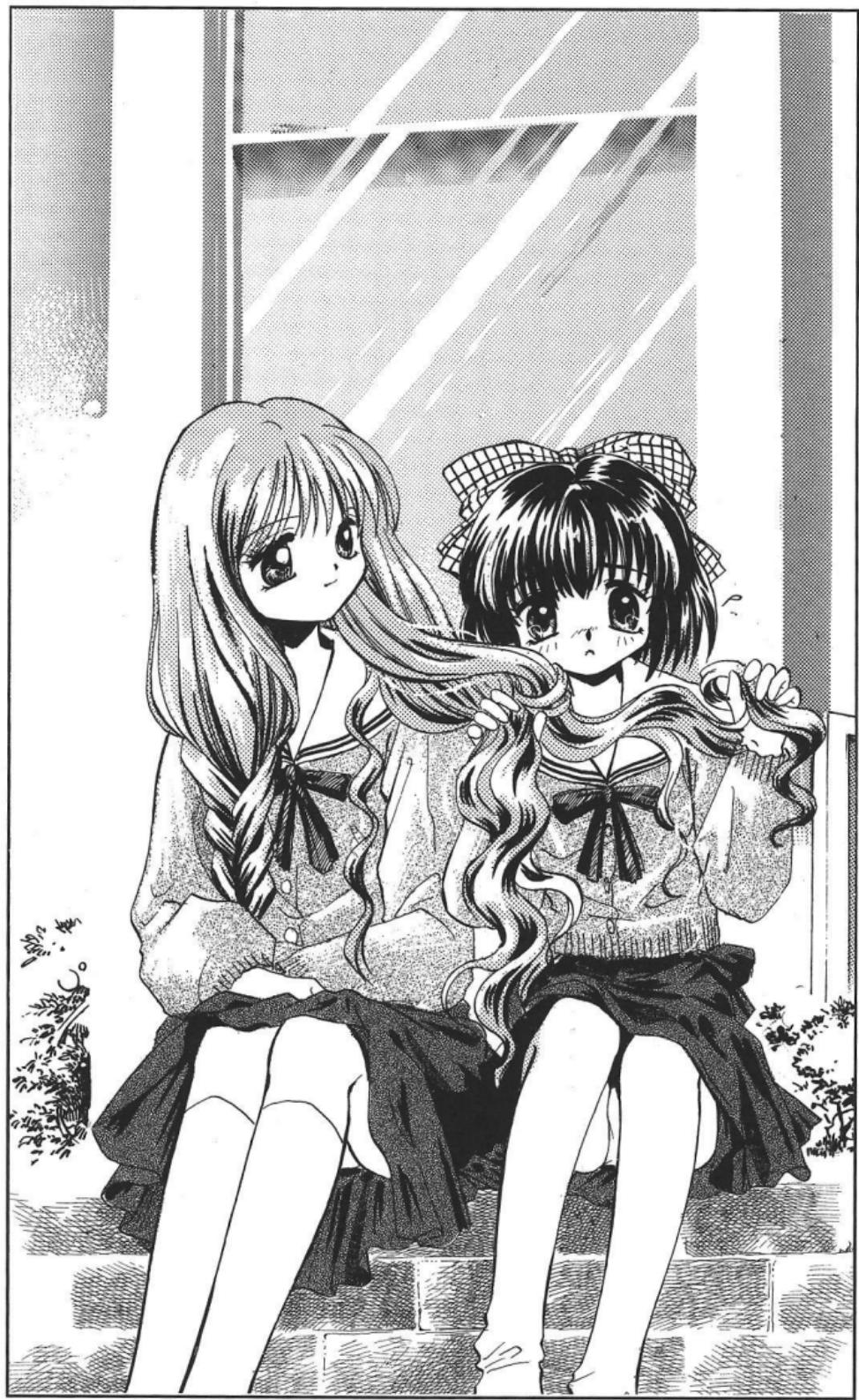
集中しているせいか浩平が戻ってきたのにも気付かない澪は、必死で三つ編みを完成させようとしている。それを茜は黙つて見守つていた。

どうやら完成したらしく、澪は手を挙げてみせる。

それを浩平が覗き込んで見ていた。

「左右の大きさが全然違うぞ」

馴れない澪にとっては、腰まである長い髪は手に余ったかもしれない。均一に編み目の並ぶ右の三つ編みに較べて、澪が編んだ方は編み目のひとつひとつが約3倍くらいの大きさがあり、おまけに形も歪んでいた。



遠くからその三つ編みを見て、澪がしゅんとした様子になる。

澪が編んでいる方の三つ編みを見て触発されたらしい浩平が、ぜひ編ませてくれとせがんだが、断固却下した。

斬新な編み方を考案してみせるという恐ろしい保証をしたからだ。
しかし、澪はまだやる気だった。

やり直す

スケッチブックでそう宣言すると、澪はもう一度茜の髪に取り組んだ。一生懸命形を揃えて編もうと努力する澪をもう一度見守る。

今度は遠目で見ればそれほど変わらないだろう、というくらいまで編み目が整ってきていた。茜の言葉通り、丁寧に編んだのだろう。

「じゃあ、そろそろワッフル食べないか？　どこで食べる？」

「……公園」

前に見つけた公園のベンチに座って食べたかった。
「そうだな、あそこなら近いし。じゃ、行こうか」

澪が嬉しそうに商店街の出口に向かって走り出した。

「転びますよ」

大丈夫、と言いたげに澪が大きく手を振る。

小さくて元気な妹みたいだ、と茜は思った。

浩平は歩きながら澪が編んだ方の三つ編みを指差す。

「やつぱりちよつと変だぞ。編み直した方がよくないか？」

茜はかすかに笑みを浮かべながら首を振った。あまり微かすぎて浩平には解らなかつたかもしぬれない。

「このままでいいです」

そして、澪の後を追つて走り出す。

「今日の茜はいつもと違うな」

そう呟くと浩平も茜達の後を追つた。

浩平がまだまだ熱いワッフルを取り出して、待ちきれなさそうな澪にまず渡してやる。それを受け取つた澪はまず一口ワッフルをかじると、スケッチブックにさらさらと字を書き付けた。その間にもうひとつワッフルが茜に手渡される。

おいしいの

「解ったから、食べてから書け」

うんつ、と大きくうなずいて澪は食べることに専念した。

茜も湯気を立てているワッフルをかじった。チヨコレートソースの甘い匂い。自分で焼く時には難しい、ほどよいぱりぱり加減。

「……おいしい」

幸せだった。

何気ないことを話しながらおいしいものを食べること。

元気でかわいい新しい友達、澪。

側でおどけたことを話して和ませてくれる浩平。

ささやかな日常とひとくりにされるものが、茜にとつて一番そのまま続いてほしいものだつた。

浩平達と別れた後も、茜は何となく考え込んでいた。

茜が望んでいること、望んでいたこと。

それは側にいる親しい人達とただ幸せにずっと暮らせることだった。あの時は司がいた。

彼もまた同じように、このささやかな日々が続いてほしいと思っているのだと信じていた。でも司は、茜と詩子の三人で幸せだった日々から、この世界からまるで剥がれ落ちるように消えてしまったのだ。

『……あかね』

後ろから、誰かに呼ばれた気がした。

「……はい？」

茜はゆっくりと振り向いた。

そこには誰もいなかつた。

(……司)

すぐ側にいるような気がしたのに。今もまだ濃密な気配を感じるのに。当然のように誰もいない道を見つめ、茜はただ、立ち尽くすことになつた。

第3章 | パーティの終わりは

雨の空き地で佇んでいると、浩平は茜を迎えるようにやつてくる。そんなことにも茜は何となく馴染んでいた。

ここにいちゃいけないよ、と手を引くように、浩平は現れる。
そのことが不愉快でなくなっていた。

「おはようございます」

「おはよう。今日のテストって現国と歴史で合つてたよな」

ここにいや駄目だ、そんなことを司の件を知らない浩平が言うはずもなかつた。知つていてもそんなことを言う浩平ではない気がした。

それでもそう言つてほしかつた、というのはわがままなのだろう。
ひどく悲しくなるのは浩平のせいではないのに。

「そんなことを訊きたかったのか？」

「ああ、テスト勉強をするつもりで寝ちまつたんだ」

浩平は頭をかいてみせた。

(どうして、この人に解つてほしいなんて思うんだろう)

司のことを茜を除く全ての人が忘れてしまつてから、彼の両親でさえ息子を忘れてしまつてから、茜は解つてほしい、などという気持ちは捨てたはずだった。

なのに。

「……司のことを話しても信じてもらえないから」

「どうした茜？」

聴こえなかつたのだ。

もちろん聴こえないように言つたのだから、浩平に非があるはずもない。

「何でもないです。行きましょう」

この空き地の土は水はけが悪く、ある程度以上に雨が降るとぬかるんで脚を取られてしまう。滑らないように気を付けて、浩平の側まで近寄る。

「今日のテストはどうだ？」

「私は現国と歴史は得意な方です」

「そうか、それは良かった。俺なんかすっかり熟睡してしまったからな、もう絶対駄目だろう」

「……頑張つて下さい」

運が良ければ暗記したばかりの内容がテストに出るかもしれない。浩平は言うほど悩んではないようだった。

「まあ、何とかなるだろ」

「……諦めはいい方ですか？」

「そうかもしれない」

「私は、諦めは悪い方です」

まだ司が戻つてくることを、もう一度幸せな幼なじみの三人に戻れることを、茜はまだ諦めていなかつた。茜の言葉の意味に気付かず、浩平は呑気にうなづく。

「そうだよなあ、じゃあ俺も諦めないで歩きながら年表でも暗記するとするか」

二人で試験範囲の知識をいろいろ確認しあいながら学校へ向かつた。

翌日。何とか期末テストも終わり、やつと羽根を伸ばせる余裕ができた。

浩平に誘われて、商店街へ繰り出すことにした茜は、さすがにクリスマス一色になつた店をいろいろ冷やかして歩いた。

どの店もクリスマスっぽい飾り付けになつてゐる。茜は浩平と一緒に入つた店のひとつで、雪だるまのクッキー型を買った。これで冬休みにはクッキーを焼こう。そんなことを考えるだけでも少し心が浮かれる。

浩平の方は特に何かを買った訳ではなかつたが、やはりクリスマス近くになると販売している丸ごとのローストチキンに眼がいつたようだつた。昼はファストフードでハンバーグ

ガーを食べたというのにもう空腹らしい。

茜の眼は突然、あるものに釘付けになつた。ファンシーショップのショーウィンドウに一体だけ置いてある、大きなぬいぐるみだつた。くりくりとした丸い瞳と、愛敬のある表情が思わず眼をひいたのだ。

「どうしたんだ？」

すぐ側で浩平の声がしたような気がする。

「……はい」

「はい、と言われても困るんだが」

「……はい」

「もしかして、俺の声届いてないだろう」

「……はい」

「今日はいい天気だな」

「……はい」

浩平がショーウィンドウを覗き込んでくる。その時やつと茜は浩平が側にいることを認

識したのだつた。

「……茜、その物体が気に入つてゐのか？」

「はい」

「で、これは一体何なんだ？俺には何だか見当がつかないんだが」「私も解りません。でも、気にしません。表情が可愛いですから」

「……可愛い？」

疑わしそうな声で浩平が訊いた。その後に俺としては怪獣に似ていると思うんだが、可愛いというより怖くないか、などとぶつぶつ呟いていたが、茜は気にしなかつた。

「欲しいのか？」

「はい」

「でも、こんなのが部屋にあつたら怖くないか？」

「どうして？」

「……いや、いい」

頭を抱えながらも浩平が値札を覗いた。その一瞬後、げっと声を立てる。

「茜、諦めろ。50万は高すぎだ」

「……はい」

よく見ると値札には50万と記されている。確かに茜に手の届く値段ではなかつた。しかし、その表情の愛らしさに茜はショーウィンドウから立ち去り難かつた。しか



「大丈夫だつて。絶対売れ残つて値下がりするから」

「……売り切れたりしませんか？」

「それは絶対にない。俺が保証する」

何故か浩平が力強くうなずいた。

仕方なく茜はショーウィンドウから離れる。それでも後ろに見える愛らしいぬいぐるみを何度も振り返った。

(あんなに可愛いから、50万でもクリスマスに買ってゆく人がいるかもしね)

それが心配でならなかつた。

別れ際、茜は浩平に礼を言つた。

「浩平、今日は楽しかつたです」

そうして、ぺこりと頭を下げる。

茜が浮かべた晴れやかな笑顔が珍しいのか、浩平は一瞬うろたえたような表情を浮かべた。それでも浩平の眼は優しかつた。

テスト明けの授業は採点したテストの返却で費やされることになる。
やはりテストでの正答率の低い場所を重点的に説明してゆくので、ちゃんと聞いている

と昼休みになる頃にはすっかり空腹になつていた。

今日は弁当を作つてこなかつたので、学食で食べなければならない。

茜はいつもよりは慌ただしく席を立つた。

廊下に出ようとするとそれ違いに廊下から戻つて来た浩平が、何故か苦虫を噛み潰したような表情で茜の側にやってくる。

「茜の知り合いが訪ねてきてるんだ。ちょっとだけつきあつてくれ」

うなずきはしたが、茜には誰が訪ねてきたのか見当がつかなかつた。

浩平の後ろについて廊下に出る。

「あっ、茜！ 久しぶりだね」

茜の側に見憶えのある少女が駆け寄つてくる。肩まで伸ばしたまっすぐの髪がさらさらと揺れる。紺をベースにしたブレザーとチェックのスカート。

「詩子……」

何故今頃詩子がこの学校の中にいるのだろう。

平日なのだから当然詩子の学校でも授業はあるはずだ。

詩子はそんなことはお構いなしでにこやかに笑つた。

「相変わらず髪の毛伸ばしてたんだあ。最近電話もかけてくれないから心配してたんだよ。

よかつたあ、元気そうで

「はい。それで、詩子……今日はどうしたんですか？」

詩子と逢う心の準備ができていなかつた。しかしまさか逃げ出す訳にもいかない。

「茜がずっと元気がなかつたみたいだから、心配で来てみたんだよ。でも、すこし元気になつたみたいだね、よかつた」

訳が解らないまま立つてゐる浩平が茜に横から訊いた。

「前に逢つたのはどのくらい前だ？」

「……一ヶ月です」

そう、ちょうど南条先生の焼香に行く前に逢つたきりなのだから。

詩子がうん、とうなずく。

「そのくらいだねえ」

茜もうなずき返した。

廊下で楽しそうに他校の生徒が立ち話しているのは、嫌でも人目につく。居心地悪そくな浩平が詩子を追い立てた。

「さて、じゃあそろそろ出て行つてくれな」「出てけつて言われてるよ、茜」

「茜じゃない。お前だつ。ここはお前の学校じゃないだろう？ 先生に見つかつたら事だぞ」

詩子が口を尖らせた。

「そんなの、黙つてたら解らないよ」

「絶対に解る！ 大体お前なあ、他校の制服なんか着て目立たない訳ないだろう」
浩平と詩子が言い合いをしているうちに、周囲には人だかりができてきた。

「……余計に目立つてます」

「ぐあつ、しまつた！ まづい、場所を変えよう」

「……食堂」

今日は本当に空腹だつた。

「あ、あたしもちよどおなかが空いてたんだ」

詩子が茜について歩き始めると、浩平が後ろから大きな溜息をつきながらもついてきた
のだった。

食堂は相変わらず盛況だつた。

「大きい学食だねえ」

珍しそうに見回す詩子の後ろで、浩平が呪いの言葉を吐いている。多分茜を呼び出す前にもさんざん詩子に引っ張り回されたのだろう。容易に想像がついた。

茜が何を食べようか考えている間に、浩平は忍び足でどこかに去つて行こうとしていた。しかし、天は浩平に味方しなかつた。

ぐいぐい、と横から浩平の袖を引っ張るものがあつたのだ。

「ずわあっ！ み、澪！？」

浩平を見つけて寄つてきたのだろう澪が、にこにこと微笑んでいた。そして浩平の叫びを聴きつけて、当然詩子が振り返る。

「ああっ、この子可愛いね！」

詩子が澪の側に寄つてきて頭を撫でていた。いきなりそんなことをされて照れているのか、澪は真っ赤になつている。

浩平は世にも不機嫌な表情で口を開いた。

「柚木、澪が死ぬほど嫌だからやめてくれって言つてるぞ」

澪はふるふる、と頭を振つた。

「言つてないじゃない」

「いや、口には出していないが心の中ではそう思つてはいるはずだ。俺には澪の気持ちがよ

うく解る。全く同じ気持ちだからな」

ぶんぶん、と激しく頭を横に振った。

「澪、嫌だつたら遠慮なくスケッチブックで叩いてやれ
おろおろしている澪に、茜は助け船を出した。

「……澪が困つてます」

茜の声を聴くと、澪はにこつと笑つて茜に駆け寄つて三つ編みにぶらさがつた。茜の蜂蜜を思わせる淡い色の髪は澪のお気に入りらしい。

「茜、この子知つてるの？」

「はい」

「そ、うなんだ。あたしは柚木詩子よ」

澪は『上月澪』と書いてあるページを差し出した。

「そつか、澪ちゃんね。よろしく」

その日は周囲の視線が刺さる中で、四人で昼食を食べたのだった。
食事を終えた後、下駄箱のところまで詩子を全員で送つてゆく。

「また近いうちに遊びに来るからね」

「もう二度と来なくていい」

手をぶんぶん振つてゐる澪に、詩子は手を振り返した。

「じゃあね」

「……詩子」

茜は思わず呼びかけてしまう。

「ん？ どうしたの、茜」

詩子が軽く笑つて振り返る。

呼びかけてから茜は口ごもつてしまつた。

何を言うつもりだつたのか。

今まで連絡しなくてごめんね。心配してくれてありがとう。授業をさぼっちゃ駄目です。

その全ての言葉を詩子はもう受け止めてくれてゐるような気がするのだ。

でも問い合わせたいのは別のことだ。ふたりの一一番好きだつた幼なじみのこと。

それなのに、いつも二人の間にいた司のことだけ詩子は解らない。

「……いえ、何でもないです」

「よく知らないけど、じゃあ帰るね」

もう一度全員に大きく手を振つて、詩子は帰つて行つた。

(司……)

帰宅した後、自分の部屋で考え込む。

茜のことを心配して、一度も来たことがない高校までやつてきてくれた詩子。自分のことを見たことは、とても嬉しかったのに、茜の心は晴れなかつた。今まで通りの屈託のない笑みは、司がいた頃と全く変わらない。それだからこそ、司の不在が余計に胸に染みた。

(……どうして、どうして……っ！)

茜はどうしても受け入れられなかつた。

今一緒にいさえすれば、浩平と交わしている会話の何割かは司と交わすことになるだろう。いや、あの雨の空き地に立ち尽くしているのを見られた日まで、浩平とは喋ったこともないのだから、あの、ささやかな幸せは全て司との間に築かれたはずなのだ。

ここ数日が、司が消えてからかつてなかつたほどに心地いい日々だからこそ、尚更茜はそう思う。

穏やかな司の表情を思い出す。



端整な横顔には滅多に激しい感情は浮かばない。喧嘩しながらも決して茜や詩子を本気で傷付けることがなかつた司。

少し線の細い顔。茜はすぐ横で司の顔を見ていることが好きだつた。

子供じみたいたずらをする浩平とは逆のタイプだつた。

全く違うタイプの浩平が居心地のいい空間を作り出してゆくのに、茜は馴れてゆきつつあつた。そのことを詩子に指摘されることを、茜のどこかが恐れていた。

『あたしが司を忘れてることをどうこう言える立場？ 茜だつて新しい男の子と楽しくやつてるじゃない』

そう言われてしまうような気がするのだ。

もちろん、司の記憶がない詩子にそんなことが言えるはずもないし、第一そんなことを言つて弾劾するような少女ではない。

今、茜から司の記憶が消えてしまつたら、この世の誰も司を憶えていないことになつてしまふ。それは、ある意味で茜が自分で司の存在にとどめを刺すようなものだ。

(……そんなの)

だんだん頭が辛い考えを拒否してゆく。

深い夜がカーテンの隙間から見える。

『……茜、あかね……』

その窓の向こうから司が呼んでいるような気がした。

翌日、ほとんど上の空で終業式を終えて、茜はそのまま帰宅しようとすると、昇降口の方から聞き憶えのある声が聞こえてきた。詩子と浩平が何やら話し合っているらしい。

正確には話し合いというより大騒ぎと言った方がいいだろう。階段を降りる途中の茜にもその喧噪ははつきり聽こえたのだから。

「やっぱりこういう国民的行事は、みんなで賑やかに楽しまないとね」

「だからってな、普通当日に他人のところに押しかけてくるか？ 大体みんなって誰だよおい。まさか俺のことまで入つてないだろうな」

にこにこ笑う詩子と頭を抱える浩平は、どうやらクリスマスの話をしてるらしかった。詩子はしつれつと言い返す。

「もちろん、あたしと茜」

「……茜が、賑やか？ 想像つかん」

「毎年恒例だからね。茜とクリスマスパーティ開くのは」

「お前と茜と二人でか？ 人数的に賑やかつて感じがしないんだが」

「そう、二人……え、二人？」

詩子の声が止まつた。

その時、ちょうど下駄箱のところまで来た茜と眼が合つた。

「茜っ、こつちこつち」

浮かれた様子で手招きをする。

何を話したいのか見当がつくだけに、茜は沈んだ表情になつた。

「今年のパーティのことなんだけどね。折原君のところですることになつたから。もちろん茜も来るよね？」

クリスマスパーティ。

去年までは互いにプレゼントを交換して、茜の焼いたケーキを食べながら楽しく過ごして いたものだった。ただし詩子と二人ではなく、三人でだ。

その思い出までが詩子の中では別の形に書き換えられてしまつて いる。
そのことがひどく悲しかつた。

「……私は行かないから」

「どうしたのよ、茜。毎年楽しそうにはしゃいでたじゃない」「はしゃいでたのは詩子です」

もちろんお祭り屋の詩子には思い当たる節は大ありだ。

「ま、そうだけど。でも、毎年楽しみにしてたのは本当でしょ？」

茜はうつむいた。

確かに、毎年クリスマスが楽しみだった。司や詩子と過ごせるパーティ。プレゼントをどうしようかと悩んだり、クリスマスケーキを焼く予行演習をたっぷりしたせいで、当日のクリスマスケーキに半ば食傷しているのに、それでも楽しく食べた思い出。全てが幸せな記憶だった。

茜の表情を見て、詩子が呟いた。

「何か、あつたんだ」

心配そうな詩子に茜は消えそうな声で返事をした。

「ごめんなさい。もう、クリスマスパーティには参加しないことにしたから」

「それなら無理にとは言わないけどね」

「……ごめんなさい」

優しい詩子は、茜が突然恒例だつたクリスマスパーティに参加しないと言つても、何も訊かないで許してくれる。そんな詩子に何も言えないのが辛い。

「お、澪。どうした？」

後ろから浩平の声がする。

気が付くと浩平の側に澪がいて、にこにこしながら袖を引っ張つていた。そして少し興奮したようにスケッチブックを見せる。

参加したいの

「ああ、クリスマス会のことか？」

澪はうんつ、と嬉しそうにうなづくと、浩平が呆れた表情で澪を見下ろした。

「お前も暇だよな。ま、いいけどな。おい、柚木。澪が参加したいらしいぞ」

「もちろんいいよ。みんなで遊んだ方が楽しいもんね」

詩子が澪の方を向いた時に、茜はすつと自分の下駄箱の前まで歩いた。

「……帰ります。さようなら」

「ねえ、茜。ほんとに参加しないの？」

「はい」

詩子が笑みを消し、眞面目な顔になる。

「何があつたかはあたしには解らない。でもね、そんな時こそ嫌なことを忘れて楽しむのもいいと思うんだけど」

「そうだな。俺もそう思うよ」

横から浩平も賛同する。やはり浩平の眼も心配げだ。話に途中から入った澪だけが不思議そうに茜を見ている。多分、三人全員が茜が楽しそうにパーティに参加することを望んでいるのだろう。心配させてしまつたようだ。

茜は表情をやわらげた。

「……解りました」

「よし、決定」

詩子がにこつ、と笑う。

それが合図だつたかのように四人は歩き出した。

途中で降つてきた雨を、女の子三人は茜の傘にぎゅう詰めに入つて避け、あぶれた浩平は濡れ鼠になりながら浩平の家へ向かつた。

住宅街の中で特に目立つ訳でもない、どこにでもあるような二階建て。その家の表札には折原ではなく、小坂と書いてあつた。浩平が叔母の家に住んでいる、と言っていた記憶がある。その叔母さんの苗字なのだろうと推測した。

浩平が雨に打たれてよろよろになりながら玄関の鍵を開けると、乱暴にしたたる雨を手で振り払っている間に、詩子と澪がおじやまします、と声をかけて家に入つて行つてしまふ。それにも浩平は気付いていないようだつた。

雨に打たれてぼうつとしているのだろう。

家中から楽しそうな詩子の声が聴こえる。

「こつちがリビングなんだ……こつちのドアは何かな。澪ちゃん、開けてみよっか」「うわあつ、勝手に開けるなつ。大体お前ら勝手に人の家に入るな」

浩平が叫ぶと詩子達が戻つてくる。

「ちゃんと断わつて入つたよ」

「断わつてもいいと言うまで入るな」

浩平はがつくりと疲れているようだつた。それでも決して嫌がつてはいない。とりあえず澪は浩平と一緒に中に入った。

詩子と澪はあちこちを覗き回っては浩平に怒られ、また懲りることもなく大騒ぎしている。茜はリビングのソファに座ってその様子を見ていた。

やはり、陽気に楽しんでいる空気に身を浸すのは気持ちがよかつた。

「ずわあつ、その包丁は何だ澪っ！」

キッチンから浩平が叫ぶ声がした。茜もキッチンへ行つてみると、実におぼつかなさそ
うな手つきで澪が包丁を握っていた。

澪が包丁を持ったまま茜に笑いかけた。

「料理を作りたいようです」

「料理？」

浩平が訊き返すと、澪がうんつ、とうなずいた。

「ねえねえ、それならケーキ作ろうよ。やっぱりクリスマスと言えばケーキだよ」

詩子がキッチンに入つて来ると、はしゃいで提案した。澪がスケッチブックにさらさら
と書き付けて見せる。

けーき作るの

眼がきらきらと輝いていた。甘いデコレーションケーキをイメージしているだろうとうのがありありと解る。

「じゃあ、頑張ってね。折原君、澪ちゃん」

嬉しそうにうなずく澪を見て、浩平は逃げられないと悟つたらしい。もちろん、澪が握つたままである包丁にもインパクトがあつたのは言うまでもない。

浩平は脱力して大きな溜息をついた。

「解つたよ。作ればいいんだろ。言つとくけど、俺に作らせたら何入れるか解らないぞ。

海苔の佃煮とかイカの塩辛とか入れるかもな」

よほど嫌なのか口調がすっかりやけだつた。

茜は海苔の佃煮だのイカの塩辛だの入つたデコレーションケーキの味を、思わず想像してしまつた。考えるだけで気持ちが悪い。

「……嫌です」

澪も気持ち悪そうに浩平を睨んでいる。平気そうに聞いているのは詩子だけだ。仕方なく浩平はうなずいてみせた。

「一応努力はしてみる」

浩平はキッチンの隅にある、数冊の料理本が並べてあるところまで歩いて行つた。

茜は澪と一緒にキッチンの備品をチェックしてやりながら、浩平の叔母という人物は基本的にお菓子作りは好きらしいと茜は推測した。ケーキの型もいくつかあつたし、菓子類を作るのに調理器具で足りないものはなかつた。一通り必要なものを確認して出してやると、茜と詩子はリビングに戻つた。四人もいては狭くてケーキ作りの邪魔になる。

「ねえ、茜。ケーキ、楽しみだねえ」

詩子が楽しそうにキッチンに眼をやつていた。

キッチンからは時折浩平の心許ない疑問が飛んで来る。それに茜がリビングから応えてやる。澪がぱたぱたとキッチンを走り回つている気配がした。

「ど、どうした。澪っ」

浩平の声が切羽詰まつてゐる。茜はキッチンの方へ向かつた。

しかし、何が起こつたのかはキッチンに行く前に解つた。焦げたチョコレートの匂いがだんだん炭に近い臭いに変化してゆく。

「わ、わ、わ。ちょっと待てっ……あ、やばいっ！」

ほとん、と何かが落ちる音がした。その一瞬後に浩平の叫び声があがる。

茜が辿り着いた時にはキッチンの中はとんでもない惨状をさらしていたのだつた。半泣きで真つ黒になつた鍋を持つ澪と、動転して床に転がるボウルからこぼれた、どろ

どろのケーキの材料を拭いている浩平。双方をゆっくりと見較べる。

「……茜。ケーキ、駄目になつちまつた」

「手伝いましょうか？」

「悪い。助けてくれ」

浩平はギブアップすると澪が持つてある焦げた鍋を見に行つた。茜はエプロンを借りて身に着けた。まだ材料は残つてゐる。チョコレートはなくなつてしまつたが、他のケーキなら何とか作れそうだ。

茜は一度洗つて綺麗にしたボウルを布巾で丁寧に拭くと、卵を割り入れた。その卵が室温に戻る間に、澪に砂糖を渡して振るつてもらう。茜も小麦粉を振るい始めた。

「バター、溶かして下さい」

浩平に計つたバターを渡すと、浩平は別の鍋にバターを入れて溶かしてくれる。

小麦粉を振るつてしまふと茜は卵を手際よく泡立て始めた。その途中で、澪に振るつてもらつた砂糖を卵に入れる。その後小麦粉、バターと混ぜてゆく。甘い匂いを放つ生地を型に入れ、とんとん、と空気を抜いてオーブンに入れた。

「もしかして、最初から茜が作つた方がよかつたんじやないか？」

手際のよさに見とれていた浩平がそう呟いた。



「そんなことないです。みんなで作る方が楽しいですから」

お菓子を作るのは馴れているし、好きだ。

確かに浩平も澪もケーキを作ったことがないせいか、あまり手際はよくなかったが、騒ぎながらケーキを作るのは楽しい作業だ。茜は微笑むと、浩平がうなづく。

「うん、そうだな。楽しかった」

浩平もやはり同じ気分でいてくれたのだ、ということが少し嬉しかった。

泡立てた生クリームを塗つておいしそうにデコレーションをされたケーキを食べながら、冷蔵庫から持ち出してきたビールを飲んだ。

お喋りに興じている間に夜が更けてゆく。

頬を上気させ、とろんとした眼をした澪が、スケッチブックに何事か書いている。

「悪い。さすがにそれは読めない」

ミミズののたくつたような状態の字だが、何とか茜には読めた。

「ねむたい。そう書いてあります」

「読めるのか」

「はい」

澪は茜の言葉にうんうん、とうなずくと、ソファに倒れ込んでしまった。その数秒後にはもう軽い寝息を立てていた。

「……澪ちゃん、ねちやつたの……お？」

「そうみたいだな」

「そうだあ。顔に落書きしちゃお」

詩子の声はどこか間伸びていた。やはりアルコールが回っているせいらしい。浩平も面白がつてサインペンを持ってくる。

「かわいそうです」

「だいじょうぶだいじょうぶ……」

詩子は嬉しそうに澪の顔に大きな渦巻き模様を書いていた。

それを見ていると、浩平が声をかけてくる。

「ところで、ちゃんと飲んでるか？」

「飲んでます」

茜はテーブルの上に置かれたビールに口を付けた。一口飲んでみせる。このビンもそろそろ空になる頃だ。

「お前、酒強いな」

そろそろ帰らないと、今日中に自宅に戻れないような時間になつた。眠つてゐる澪を起こして詩子と帰る準備をする。とんでもない量の空ビンが転がつていた。よく考えたらそのうちの半分は茜が飲んだのだった。

玄関まで見送つてくれた浩平に挨拶をして、三人は雨の中、一本の傘に入つて歩き出したのだった。

「……今日はほおんと、楽しかったねえ」

澪がゆらゆらとうなずく。よく見ると澪は頬の落書きを消さずに歩いていた。

雨は止まないどころか、ますます激しくなってきた。

「二人とも、傘か携帯レインコートを買つた方がいいと思います」

茜は少し先に見えるコンビニを指差した。

三人でコンビニに入る。コンビニの中もクリスマス用の飾り付けになつっていた。クリスマスソングの流れる店の中を歩き、何とか残つていた安いビニール傘を二人は買った。

(……そう言えば、後片付けをしてこなかつた)

やはり酔つているのだろうか。普段の茜なら他人の家を汚しつぱなしにすることなどないのに、すっかり失念していた。こまめに片付けをすると思えない浩平は、そのままにして寝てしまうような気がした。

「詩子、澪。浩平の家の片付けを忘れてました。私は片付けてから帰りますから、二人とも先に帰っていて下さい」

「ああ、そう言えば片付けてこなかつたねえ。あたしも行こうか?」

「詩子の家はここからだと反対方向だから、そのまま帰つた方がいいです。澪も眠そうでですから」

軽く手を振つて、そのまま歩き出す。

打ちつける雨粒が重たく感じるようになつてきている。

茜は浩平の家まで戻つて來た。

雨音のせいで、中の気配は全く感じない。茜はブザーを押した。

しばらくしてドアが開くと、何となく眠そうな浩平が出て來た。

「お、どうした?」

「上がつても、いいですか。少し、濡れてますけど……」

「おずおずと訊く。

「構わないけど、一体どうしたんだ?」

「後片付けを忘れました」

茜は中に入るととりあえずリビングの方へ向かつた。案の定ついさつきまで騒いでいた

リビングは、出てゆく時と同じく、皿や空になつたビールの空き缶が転がつていた。

とりあえず空き缶をキッチンへ持つてゆき、捨てる為に缶、瓶をまとめてある場所へ移動させる。ついでに新しく箱から缶ビールを出して、冷蔵庫に補給しておいた。

もう一度リビングに戻ると、ケーキのクリームがついた皿を重ねてキッチンへ運ぶ。

「一人で大丈夫か？」

「……はい」

一度おおざっぱにケーキの屑を三角コーナーに移し、蛇口からお湯を出す。

クリームをお湯で流し、一度スポンジに洗剤を付けると、茜は手際よく洗い始めた。機械的に単純作業をこなしてゆきながら、茜はふと考えていた。

（どうして私は、ひとりで戻ってきたのだろう）

詩子と一緒に来てくれる、と言つてくれたのにそれを断わつて、短い時間で終わるような後片付けをする為に、茜はひとりで夜道を戻つて来た。

「手伝おうか？」

手持ち無沙汰にしている浩平が茜の側で立っている。

「……いいえ」

「でも、大変だろ？」

「もうすぐ終わりますから」

もう茜は最後の皿を洗っていた。積まれた皿やフォークを乾いた布巾で一枚一枚拭いてゆく。それを棚に片付けて茜は顔を上げた。

「終わりました」

キッチンのテーブルのところで暇そうに座っていた浩平が立ち上った。

「ありがとう。助かったよ」

「楽しかったですから」

かすかに茜は笑みを浮かべた。

そう、楽しかったのだ。だからこそわざわざ戻ってきて、浩平の苦労を軽減したかったのだ……そうに違いない。

茜は笑いながらも、何となく自分に何かを信じ込ませようとしていた。

帰り際、玄関で浩平が送つて行こうかと言つた。

茜は浩平を黙つて見上げると、そのまま傘を差して歩き出した。浩平も一緒に茜の後ろから玄関を出てくる。その気配を感じながら茜は道路に出た。

二人で黙つて歩く。

ただでさえ見通しのよくない夜の景色を、強い雨がすっかり隠してしまっている。ほんやりと、鈍い闇色の上を時折くつきりとした車のライトが照らし、ぼうっと街灯に浮かぶアスファルトの道路をほんの数秒真っ白に変える。

しかし、そこには灯りは決して届かない。

茜はある場所で足を止めた。

街灯に照らされているほんのわずかの部分が鮮やかに見えるせいで、その後ろの空き地はすっかり夜の空に溶けてしまっていた。

(私……)

茜は3メートル先も見えない草叢を踏み分けて、空き地に入つてゆく。長い雑草がねつとりと脚にまとわりつくのを蹴つて歩いた。

後ろから浩平もついてくる音がする。

茜はある場所を見つめた。司が、最後に立つていた場所を。

「……ここで何をしてるんだ？」

「そうだ。

茜は浩平の家に戻った理由をその時悟った。
(私は……浩平に)

茜は振り返った瞬間、ごうつ、と風が鳴った。

「……待っているんです」

「え？」

「待っているんです」

茜はもう少し大きな声で繰り返した。

「待ってるって、誰を？」

怪訝そうに浩平が訊き返すと、茜は寂しそうに眼を伏せた。

「私の、幼なじみ」

司のことを聞いてほしかったのだ。

そのまま黙り込んでしまいたくなるような、大きな音をたてて雨が降る。そのまま、口を開かない方が自然であるような気がする。

しかし、今は言わねばならないのだ。

「この場所で別れた幼なじみを待ってるんです。ここが最後にその人と別れた場所だから。
私の、好きだった人だから……」

消えてしまいそうな声で茜は語り続けた。

「だから私は、この場所で待ち続けるんです……」

茜は司の笑顔を思い出した。どこまでも優しかった、一番親しかった少年。誰もが彼を憶えていないのに、茜だけが失った痛みを抱えている。

その傷は永遠に癒えることなく、ただ血を流し続けるだけの毎日。

浩平は低い声で呟いた。

「ここで再会の約束でもしてあるのか？」

「してません」

「できたはずなどない。」

「だったら、待つても意味ないじゃないか」

どこか浩平の声に責めるような口調が感じられたのは気のせいだろうか。浩平の声は平坦に近かつたのに、茜はそう感じた。

「そうかもしれません」

「それでも、待つてるのか」

「……はい」

こんなことを浩平に話してどうしようと言うのだろうか。

司のことを話すのは心が痛かった。それなのに、浩平が望んでいるとも思えない話をする為にわざわざ誘ってしまったのだ。

そんなに

浩平の唇がそう動いた。

しかし、半ば脅えたように浩平は口をつぐんでしまう。

きり、と胸の奥が痛んだ。そして体の心底から冷え切っていた。茜だけでなく、浩平の顔にもひどく辛そうな表情が浮かんでいる。

傷付けている。何故かは解らないがその自覚だけはあつた。

それなのに、茜は浩平にこのことを聞いてほしかったのだ。そうしなくてはならない。その義務感だけで茜は語り続けていたのだ。

眼をそらしたのは浩平の方だつた。

「それにしても、今日はずいぶん話をしてくれたな」

泣きそうな顔で唇を開く。

その瞬間、側の道路を車が通つた。

浩平の顔が、そして多分茜自身の顔も光の白と影の黒だけで描かれたように見えた。

「……多分、酔つてるんです」

車の音に紛れて、囁くように返事をした。



茜が初めてクッキーを焼いてきた。

クラスの女子の間ではやつてあるんだと僕に告げた。
ほんとうによくできた、きれいなクッキーだった。

「焼いたから」

いつもみたいな声で茜はそう言つたけれど、僕は知つてゐる。

茜はまじめだから、初めて焼いたって言ひながらちゃんと練習してきてることを。
知らない顔でかくして、右手のやけどの痕。

詩子がやけどを見つけて、声を出そうとするのを僕は止めた。

茜はやけどの心配なんかしてほしくなかつたんだ。

だから僕は「おいしいね、茜」って言つた。

ほんとうに、さくさくでおいしいクッキーだつた。



茜の家へ向かう道で、二人は別れた。

「じゃ、また。次は来年だな」

「いい年を」

ぎこちない響きの挨拶を交わす。

(こんなことが言いたいんじゃないのに)

空き地であんな話をして良かつたのかどうか、茜には解らなかつた。
しかし、浩平に話さなければならぬ。あれだけではなく、もつと。それなのに、まだ
茜は大事なことを浩平に話していられないような気がした。

何だつたのだろう。

考へてもそれは浮かんでこなかつた。

「じゃ、おやすみ」

「……おやすみなさい」

茜はゆっくり浩平に背中を向けて歩き出した。

解らなかつた。

とても、とても大切なことのような気がしてならないのに。

第4章 | 雨の代償

年が明けた。

初詣に出かけることもなく、ただ部屋でぼうつと座っている。

「茜、お母さん達はお年始回りするから、ちゃんとごはん食べてね」

「……はい」

一階から母が声をかけてゆく。それから2、3分でガレージから車が出て行く音がしたのを茜はそのまま聴いていた。

食欲なんかない。

何もしたくなかった。

(ここにいれば……司が来てくれる)

最近、司の夢を頻繁に見るような気がする。

窓を叩き、外から茜に呼びかける。その後どうなつてしまふのか、自分でも解らない。

茜は司の為に窓を開けてやつたのだろうか。何故かその部分の記憶がない。

ぼうつとしているせいであまり自覚はなかつたが、冬休みの記憶がところどころ抜けていた。特にどこかに出かけた訳ではないので、外で立ち往生したことはないが、どうにも奇妙な感じだつた。

例えば本を読んでいるはずだったのに、そのままの格好で一時間くらいたつてていること

がある。もちろんページは読んだばかりのところで止まっている。
うとうとしていた訳でもなかつた。

普通にぼうっと佇んでいて、時間があつという間に過ぎてゆく、というのとは感覚が違つた。そういう時独特のけだるい感じが一切ないのだ。

しかし、その間ひどく司が近いところにいるような気がしていた。
窓の向こうからかすかな音が聴こえた。

雨が降ってきたのだ。

茜は自分の中の奇妙な感覚をもてあましながら、部屋を出て行つた。

雨は決して激しくなることはなく、一定の音を保ちながら降り続けていた。

茜は空き地に向かっていた。

空き地への道を歩くたびに、いつもそこに司がいるのではないか、とわずかな期待を抱いてしまう。そして、空き地が見えると必ずその期待は裏切られる。

『……茜、迎えに来てくれたんだ』

司の笑顔を想像していた茜が見出すのは、いつも誰もいない、殺風景な空き地。
茜はうつむいて、いつもの通り空き地の真ん中に立つた。

(今まで……こんなことをしていればいいの)

雨のたびに空き地で突つ立っている女など、ただ不気味でしかないのは自分にもよく解つていて。それでも茜は待ち続けなければならないのだ。

待つことから解放される日まで。

「……茜、どうしたんだ」

後ろから声をかけられる。少しだけぶつきらぼうに聽こえる、あの独特の声。

「浩平」

茜は振り返った。

休みに入っているので今日は逢うはずがなかつたのに、どうしてこんな日にばかり浩平に見つけられてしまうのだろう。

道の向こうに戸惑つた表情の浩平が立つていた。あのクリスマスの夜以来、初めて浩平に逢つたことになる。何となく気まずい空気が流れた。

最初に声をかけたきり、何故か浩平は口をきかないで茜を見つめている。

「……どうしたの？」

「いや、ただ通りかかっただけだ」

「ゲームセンターの帰りですか」

何となく、そう言つてみた。

一緒に帰るときに、浩平がよくゲームセンターの対戦格闘ゲームについて話してくれたのを思い出したのだ。一緒にゲームセンターへ行つたことはないが、結構うまいのだろうということと、ゲームが好きなのだとすることはよく解っていた。

浩平は驚いたように茜を見て、空き地の中に入ってきた。

「どうして解つたんだ？」

「何となくです」

当てずっぽうなのでそう言うより他にない。

とりあえず茜は話題を変えた。

「あけましておめでとうございます」

「ああ、今年初めてだつたな、茜と逢うのも。じゃ、俺も……おめでとう」

ふたりはぎこちなく年始の挨拶を交わす。

「茜、寒くないか？ 風邪ひくぞ」

「……はい」

皮膚には寒さで感覚がほとんどなくなっている。骨だけがきしむように痛かった。

「じゃ、帰ろう」

合わせた視線を外せない。

茜が黙っていると浩平はひどくやりきれなさそうな、痛みに似た表情を浮かべながら言葉を放った。

「その幼なじみに逢いたいんだつたら、方法なんていくらでもあるだろ？ 寒い思いして、無意味にこんなところで待ってなくとも……」

「これだけなんです……！」

言いつのる浩平の言葉を茜は遮った。

「私のできることはこれだけ、なんです」

「……どうして」

どうしてなんだろう。

「そんな、帰つて来るのかも解らない奴を」

茜はゆっくりと首を振る。

傘に、髪についた雨が水たまりに落ちた。

「あいつ、傘を持つてなかつたから……濡れると風邪をひくから」

自分でも馬鹿なことを言つてゐると思つた。

ここから司の家まで30分とかからない。それに、歩いて5分ほどのところに商店街があ

る。店の中で雨宿りをするなり、アーケードの下で待つなり、いろいろ対処の方法はあるのだから。子供でもその程度の分別はあるはずだ。

それでも、待っていたかった。

その為に、茜はここに囚われているのだ。そんな気がした。

「……それだけです」

浩平は何も言わなかつた。その理由は解らなかつた。

それでも、茜は浩平に謝らなければならぬような気がしてゐた。茜のことを気にかけてくれる浩平への謝罪の言葉を出さねばならない。

（でも、何の為に？ 何を謝るの？）

自問自答しても答えは決して出ない。

「ごめんなさい」

その言葉が意味することも、その言葉を発することによつて浩平にとつてどんな意味を持つのかといふことも解らないまま、茜はひどく苦しい思いをしながらそう言つた。

それから、ほとんど言葉を交わすことなく、浩平と別れて家に帰つた。
部屋へ戻つて濡れた服を着替える。

『……あかね』

どこからか声が聴こえた。

まるで迷路の壁の向こうから呼びかけているように、ひどく頼りない声。それでも、茜は振り返った。

大切なひとがそこにいる。

茜は微笑んだ。

「……司」

その声が迷路の出口から発されたものなのか、更に迷路の奥へと呼ぶものなのか、茜には解らなかつた。そんなことはもう、どうでもよかつた。

司がいさえすれば。

● ● ●

小さな頃。鬼ごっこで、いつもすぐ捕まってしまつてた茜。

僕は時々、茜のためにわざと捕まつてやつたりもした。

そんな時でも、茜は何も言わない。

解つてゐる、という視線でちらつと僕のことを見てゆく。

それでも、茜が僕のことを見ているのを知っていた。

詩子とは違う感じで僕のことを眼で追っている。

その意味の違いに、僕が気が付いたのはずうつと先のことだ。

僕が同じように誰かを眼で追うようになつてからだつた。

だからその時はどういうことだか解らなかつた。

ただ、見ててくれるんだな、と思つていただけだつた。



学校が始まつて、浩平とも何事もなく一緒に帰るようになつた。

それでも冬休みのあの日のことを、茜は決して口にしなかつた。それは浩平の方も全く同じことだつた。

二人の間に、小さな痛みがあつた。それでも表面では何でもない世間話に興じたりしながら、道を歩いて行つた。

いつまでもこうしていられたらしい。永遠に雨の日など来なければいい。

晴れの日には浩平が楽しそうにしている。

茜もいつも通りの自分に安心していられるのだから。

その願いを天が叶えたのか、一月は一度も雨が降らなかつた。寒かつたから代わりに雪が降つた、というのもあつた。しかし茜は雨が降らなかつたことで安心していた。

雪には、悲しい予感は含まれていらない。

自分の学校を抜け出して遊びに来た詩子や、雪を見て大はしゃぎの澪が、学校の校庭で雪だるまを作つて遊んだりしているところを見ると、本当に幸せだつた。

このまま、雨が降らなければいい。

そう思つていた。

しかし、雨はいつか必ず降るのだ。



中学三年生の始業式、僕達は相変わらず三人で学校で喋つていた。
壁に貼り出してあつたクラス分けのリストと一緒に見る。

自分で別のクラスだったのを、詩子は残念がっていた。

早く来た僕達は、校庭に出て桜を見ていた。

「そうだ。土曜日に花見に行こうよ。お弁当作つて」

詩子の『お弁当作つて』は、大抵茜に作つてほしい、という意味だ。

「そうですね」

「じゃあ、決まり」

教室に入る時間になつて歩き出そうとした時、突然、風が吹いた。

茜の髪が樹の皮に引っかかって、茜は小さく叫んだ。

僕が取ろうとしてもうまく取れなかつたから、詩子が思い切り引っ張ろうとする。
「待つて。ちゃんと取つてあげるから。綺麗な髪なんだからちぎつたらかわいそう」
いきなり後ろから大人の女の人の声が降ってきた。

見たことのない女の人が、茜の髪を外してくれた。

そのひとが新しい担任の先生だというのを、十分後に僕と茜は知つた。

南条紗江子先生

その瞬間が僕にとつて、特別な時間になつたのだ。

● ● ●

その日、とうとう雨が降つた。

雪ならばさぞ大雪になるだろうと思われる、季節外れの大雨だつた。茜は眼を醒ました時、既に半ば眼の焦点が合つていなかつた。

機械的に着替えを済ませ、身支度をして家を出る。

しかし、そのうちの何割を茜が自覚していたかは定かではない。通学用の鞄も持たず、傘も差さずに歩く少女を、通りがかりの人達がぎょっとしたような眼で見てゆく。そんなことにも茜は気付かなかつた。

ただ雨に打たれ、ゆらゆらと歩いてゆく。

反対側を歩いてきたサラリーマン風の男は、傘を持つていない茜に声をかけようとして、近くへ寄つてきた。

「……きみ」

しかし、男の声はそこで止まつた。

心底うすら寒そうな顔になり、足早に茜の側を離れてしまう。

「司……今、行くから」

顔をしたたる雨粒のせいで泣いているように見える茜の眼には、何も映つていなかつたのだ。離れてゆくサラリーマンの存在にも全く気付いていない。

茜は笑つていた。

誰にも見えない相手に向かつて微笑みながら、ただ歩いて行つたのだった。

(ねえ、司。私ね、ずうつと待つてた。待つてたの)

空き地の中で、茜は司に話しかけていた。

『……あか……ね』

(司が早く戻つてきてくれるのを……私、ずつと信じてた)

大切なことを忘れているような気がしてた。

それでも今の茜にはそれが何であるかを考える心の余地はなかつた。

ただ、必死で司に呼びかける。それ以外に何もなかつた。

自分の側に司の存在を感じる。司が戻つて来さえすれば、全てが元に戻る。あの幸せな日々がもう一度茜の許に戻つてくるのだ。

雨に打たれ、体が動かなくなつてゆく。ひどい風に煽られて、三つ編みにした髪が自分の体を打つた。

意識がぼやけてくる。眼の前が真っ暗になつてきた。大好きな司が微笑みを浮かべて向こうに立つていた。

それなのに、茜に気付かない様子でどこかへ歩いてゆこうとする。

(……つか……さ)

司が遠くに向かつて手を差し伸べた。おぼろげにしか見えないその相手を見ても茜は口を開くことができなかつた。

もういなのはずのやさしい人が、司に微笑みかけている。

そのことに堪えかねて、茜はぎこちなく首を振つた。

もう何も見えない。

茜は何も考えられないまま、もう一度司の姿を探した。司が自分を置いてゆくはずがない。必ず戻つてくれる。

「あかねえつ！ こんな所で何やつてんだつ」
かすんで見えない視界を、何かが遮つていた。

茜を心の底から心配する少年の怒声。

「……つか、さ……よかつた。帰ってきて、くれ……た」

「おいっ、茜っ。しつかりしろっ」

茜はひどくだるい筋肉を必死で動かし、司の為に笑みを作った。

「……もう、どこにもいかない……」

ひどく安心したせいか、茜の意識はそこで途切れてしまった。

すぐ側で何度も茜の名を呼ぶ声がしたような気がする。

大切な司。大好きな司。

しかし、司はこんなに自分をぶつきらぼうな呼び方で呼んだだろうか。それに、こんなに熱っぽく呼びかけてくれただろうか。

奇妙に思いながらも、茜はけだるくてその違和感について考えられなかつた。

バニラアイスクリーム色の天井。

うつすらと茜が瞼を開けた時に目に入ったのはそれだつた。
かすかに、眼を動かす。体の節々が痛くて、そんなことでさえ苦痛になつた。

(どこなの、ここ)

知らない部屋のようだつた。ゆっくりと茜は体を起こした。

その時、ドアをノックする音が聴こえた。正確には今初めて聴こえたものではないらしい。さつきから鳴らされているそれに、茜が今気付いただけなのだ。

ノックの主はしびれをきらしたのか、ドアを開けた。入るぞ、と断わりの言葉が聴こえてくる。

そこにいたのは浩平だつた。

「……眼、醒めてたか？」

茜は浩平をただ見つめていた。何も考えられなかつたし、何となく浩平のぶつきらぼうな声が音楽のように耳を通つていつた感じなのだ。

意味がちゃんと頭に入つてこない。

「倒れたんだよ、あの空き地で」

少しだけ、茜の記憶が戻ってきた。

あの場所で立つていた記憶があつた。しかし、そこから記憶が途切れている。あの後自分は倒れたのか、と何となく認めた。

「ここは俺の部屋だ。本当はお前の家に連れて行つてやりたかったんだが、場所知らない

からな。汚い部屋だけど、それは我慢してくれ

茜はゆっくりと部屋を眺めた。

確かに、少年の部屋という感じだった。並んでいる教科書、散らばった漫画雑誌、ゲームソフトが数本テレビの側にいい加減に積んである。

視線を動かした時に、自分が見馴れない服を着ているのが見えた。

グレーツシュピングの、大人っぽいデザインのパジャマだ。当然女性用だろう。ボタンが右前に付いている。間違いない。

パジャマを見ている茜を先回りして、浩平が口を開いた。

「言つとくが、服を着替えさせたのは俺じゃないからな。前に言つただろう？ おばさんと一緒に住んでるって」

やや狼狽したような口調で浩平が付け加える。

「その人に頼んで着替えさせてもらつたんだ。さすがにあの格好のまま放つておく訳にはいかなかつたからな。パジャマもその人のだ」

茜はまだ何かを言うこともできなかつた。

「制服、ここに置いておくから」

おおざつぱに畳んだ制服を勉強机の椅子に置かれた。そのまま浩平はドアの方に向かつ



た。

「じゃあ、俺出て行くから。あ、そうだ。茜、寒くないか？」

茜は首を振った。この部屋はエアコンが効いていて、ほどよく暖かい。

「じゃあ、俺階下にいるから、何かあつたら呼んでくれていいから。それと、気分がよくなるまでベッド使つていいぞ。じゃあな」

ふと、浩平が振り返る。

「それからな、茜……お前は、振られたんだ」

頭の奥でカシヤン、とガラスが割れた音を聴いた気がした。
しばらく言葉を探し、戸惑つて、やつと茜は口を開いた。

「……は……い」

声を絞り出すのにひどく苦労した。

それを聴いていたのかいなか、浩平は足早に部屋を出て行つてしまつ。
ぱたん、というドアが閉まる音を残して、茜は再びひとりになつた。浩平の足音がとん
とんとん、と遠ざかつてゆく。

（ふられた）

その時パズルのピースがはまつたように、茜の中で不明瞭な部分が消えた。

茜が思い出したくなかったこと。痛みを伴う小さな記憶が頭に浮かんできた。
消えてゆく瞬間の司は、茜を見ていなかつた。うつすらと幸せそうに笑んでいた彼の唇
から漏れた言葉は、茜の名前ではなかつたのだ。

『紗江子先生』

茜はきつく瞼を閉じた。

(……解つてたはずなのに)

最初から振られたことなど解つていた。しかし、見たくなかつたのだ。茜の一一番好きな
ひとが他の女性を想つて消えて行つたなどと信じたくなかつたのだ。

だからこそ、茜は待ち続けた。

待つている間は司が茜のことを、薄れゆく世界と同じように置いて行つたことを考えず
に済むのだから。いつまでも、いつまでも待つっていたかつた。

それでも、茜はこの世界で司の残滓を無理やり寄せ集めて取り戻そうとしていたのだ。
もし取り戻すことができたとしても、司は決して感謝したりはしないだろうに。南条先生
の夢から醒ませた茜を、哀れんでくれはしても嬉しいとは思わないのに。

一方通行だつたのだ。

そこから、浩平は茜を引き戻してくれたのだ。

ベンキで描いたドアは決して開かないのだと教えてくれたのだ。

茜はやっと自分がクリスマスの夜に浩平に何を望んでいたのかを悟った。決して終わらない迷路を壊して、茜を救い出してほしかったのだ。

あのまっすぐな眼をした少年が必ず茜を救ってくれるような気がしていたのだ。どうしてだかは解らないけれど、それを知っていたのだ。

(……だから)

一度自分の為にうなずいてみせる。

浩平にちゃんとお礼を言おう。自分をこの世界へ取り戻してくれた浩平に。とりあえずその前にまともに動かない体を癒す為、茜は眠りに就いた。

もう一度眼を醒まし、自分の制服に着替えて一階に降りてゆく。

リビングのドアを開けると、浩平がソファで横たわっているのが見えた。ドアの音で浩平が茜を見る。

「茜、もういいのか？」

「……はい。大丈夫です」

「どうせこんな時間だから、もつと寝てもいいのに」

壁にかかっている時計は3時過ぎだつた。

「学校と家にはおばさんが連絡してたから。あ、ちょっと気分が悪くなつただけだつて言つてあるから」

「迷惑でしたよね」

「とんでもない手間をかけさせてしまったのだ。しかし、浩平は笑いかけてくれる。

「今度倒れる時は、家の近くで雨の降つてない時にしてくれると嬉しい。お前を運ぶのは本当に大変だつたんだぞ」

「……どうやつて運んだんですか？」

空き地からここまで大体歩いて10分くらいはかかるのだ。

「俺が抱きかかえて、と言いたいが、実は由起子さんに車で来てもらつたんだ」

「……ゆきこさん？」

「ああ、おばさんのことだ。会社に行くところだつたのを捕まえてな」

それでも、あの場所から近くの公衆電話まで少しあるのだ。そこまでは茜を抱えるか肩を貸して引きずつて歩いたことになる。

「今は？」

「お前の服を着替えさせて、制服を乾燥機に放り込んだらすぐに出で行つた。今度逢うこ

とがあつたらちゃんと礼を言つとけよ」

浩平は公衆電話まで茜を抱えて、説明にも困るだろうに叔母に車を頼み、茜を助ける為に尽力してくれたのだ。

「ありがとう」

「俺に言つてどうするよ」

「……ありがとう、本当に」

茜の眼から涙がこぼれていた。

まるで心の中から何か溶け出してゆくように、あたたかく頬を濡らしてゆく。

嬉しかった。茜は浩平を見つめ、微笑んで感謝の言葉を繰り返した。

ふらつきながらも家へ帰った時、母は買い物に出かけていた。キッチンのテーブルにメモが置いてある。

茜へ

買い物に行つてきます。無理しないでちゃんと寝ているように。

母より

とりあえず寝る前に風邪薬を飲んでおきたかった。

茜は牛乳をグラスに一杯と、チョコレートクッキーを二枚用意した。食欲はなかつたが、胃に何か入れておかないと風邪薬が飲めないのだ。あまり薬に強くない茜は、空腹時に強い薬を飲むと、一気に気持ち悪くなってしまうのだ。

クッキーをつまんでゆつくり、ゆつくり噛んで喉を通してゆく。

一枚食べたところでやつと、舌にクッキーの甘みを感じるようになつてきた。それから牛乳を含んで口の中で暖めるように転がしてから飲む。何とか全部食べてしまふと、茜は救急箱から風邪薬を出してきて飲んだ。

だるいので皿やコップを洗う気力がなかつた。今日は洗わなくても母も許してくれるだろう。そう思つて洗い桶に水を張つてグラスと皿を入れる。

するん、と食器は水に沈んだ。

玄関のところで留守電が点滅しているのが見えた。ボタンを押して留守録を聴く。

『もしもし柚木です。えつと、茜のことが心配になつたので電話しました。よかつたら電話下さい』

少し迷つたが、茜はそのまま受話器を取つて詩子の家の電話番号を押した。
コール三回で詩子が出た。

「……もしもし、茜です」

『よかつたあ……無事だつた。ねえ、声がかかるてるよ。風邪ひいたの?』

『はい、具合が悪くなつて……今から寝るところです』

『そつかあ……ちゃんと大事にするんだよ。そう言えば折原君には逢えた? 学校早退してすつ飛んでつたよ』

「……はい、逢えました」

『ん、よかつた。あいつ、すつごく心配してたからね。もう形相とか変わつちやつててさ。ちようどあの時あたし学校にいたんだけど、ほんと凄かつたよ。じゃ、おやすみ』

自分の学校をさぼつて朝っぱらから遊びに来ていたことについては、あえて触れなかつた。今はただ、心配してくれる詩子の気持ちが嬉しかつた。

「おやすみなさい」

電話を切つて、留守録を消す。

茜はふらつきながらも穏やかな顔で二階に上がつて行つた。

自分の部屋に戻ると、脱いだパジャマがそのまま散らかしてあつた。普段はきちんと畳

んでから家を出るのに、そんなことも抜け落ちていたのだ。

茜は制服を脱いでパジャマに着替えると、早々にベッドの中に潜り込んだ。

風邪薬のせいだろうか、あまり時間が過ぎないうちに眠くなつてくる。

何となくいい夢を見られそうだ、と思いながら茜は眠りに就いた。

冷たい冬の雨にさんざん打たれたことが祟り、茜はそれから一週間近くも休むことになつたのだった。

学校に行きたかったが、ずっと微熱が下がらないので母が許してくれない。仕方なくゆっくり養生することにした。

その間詩子が毎日見舞いに来てくれて、茜の学校の様子を時々教えてくれる。一度澪から可愛い便箋で『はやくよくなつてね』と見舞いの手紙を頼まれた、と渡してくれた。

あの、小さくて愛らしい下級生も茜のことを心配しているらしい。

茜はその場で返事を書いて詩子に渡した。

「そう言えば、自分の学校はどうしてるんですか」

かねてから疑問に思っていたことを訊くと、詩子は舌をぺろっと出してみせた。

「あのね、実はスクーターを買ったんだ。貯金がたまつたから」

詩子の高校と茜の高校は、さほど離れていない。授業を抜け出して遊びに来ることのは
非はともかく、移動には全く問題がなさそうだ。

「茜がちゃんとよくなつたら、スクーター見せてあげるよ」

詩子は嬉しそうに笑つた。

茜も何となく嬉しくなつたのだつた。

浩平が茜を助けてくれた日から、茜があの空き地へ行くことはなくなつた。司の夢を見
ることもなくなつていた。

それと同時にふたりの間に流れる空気もまた、変わりつつあつた。
そのことに茜自身はまだ気付いていなかつた。

第5章 | 特別ということ

一週間も休んでしまった後で登校すると、茜は何となく学校に一瞬だけよそよそしいものを感じてしまった。しかし、廊下を歩いているうちに、学校の雰囲気を体が思い出してゆく。

教室に入る頃にはもう、いつもと変わらない気分になっていた。

ホームルームの時間、浩平が茜に視線を送ってくる。

『大丈夫なのか？』

はい、とわずかにうなずいてみせた。

それだけで浩平には通じたようだ。にっこり笑つて教壇に立つ教師の方を向いた。

土曜日だから、授業は昼までで終わってしまう。体育もないのに、茜は無理をすることもなく、病み上がりの体をゆっくりと馴らすことができた。

放課後になり、茜は鞄に教科書を詰めて教室から出る。そのまま廊下を歩き、下駄箱の扉を開けようとした瞬間、後ろから声をかけられた。

「ちょっと待つた茜」

浩平の声だった。

茜は振り向いた。

「……何ですか？」

「これから、デートしないか」
何故か浩平の表情がひどく真面目だった。緊張しているようにも見える。

「デートという言葉をあえて使つてきた。

一緒に商店街をぶらついて帰らないか、とかそういう意味合いとは違うのだ。茜は何となく、来るべきものが来た、という感じがしていた。

浩平が茜のことをどういう形で気にかけていてくれるのか、何となく解っていた気がする。今思い起させばあのクリスマスの夜の浩平は、茜を特別な存在として見ていたからこそあれほど辛そうだったと解るのだ。

そして、冬休みの浩平。

あの雨に打たれた茜を助けてくれた日の浩平。

電話で詩子が言つていたではないか。

『そう言えば折原君には逢えた？ 学校早退してすっ飛んでったよ』

『あいつ、すっごく心配してたからね。もう形相とか変わっちゃつててさ』

そう考えると自分がどれだけ浩平にひどいことをしていたか痛感する。

しかし茜は反射的に返事をしていた。

「……嫌です」

「せめてもう少し話を聞いてから答えてくれ」

頭を抱えた浩平がそれでもねばる。茜は浩平の言葉の続きを待った。

「デートと言つても商店街をうろついて、映画見て、うまい物食つて……と、何の変哲もないコースなんだけどな。どうだ?」

「……嫌です」

実際にはいつもしていることとほとんど変わらない。それでも茜は拒否した。

「そんなにはつきりと言わなくとも

「嫌です」

浩平は半ば予想していたのか軽く溜息をついた。

「とにかく、俺は待ってるから」

「行きません」

「その時は目的をデートから散歩に切り替えて、公園でも歩くからいいけどな。でも、で
きれば来てくれると嬉しいけど」

「……嫌です」

「場所は、この前の公園。時間は……そうだな、2時でどうだ?」
「解りました。でも、行かないです」

「その時はさつき言つた通りだ。じゃ、茜。俺は着替えてから行くから」

浩平が手を振つて出て行こうとするのに、茜も手を振り返した。そのまま靴をはき替え
て出て行こうとする浩平に、思わず声をかけてしまう。

「……待つて」

浩平が振り返つた。

「どうして、私を誘つたんですか」

心の底で狼狽しながら訊いてしまつた。

答えは多分、茜の思つた通りのはずなのに。

浩平は少し戸惑つてから口を開いた。

「多分、茜のことが好きだから……だと思う」

茜はうつむいた。

「……行きませんよ」

「その時は散歩するさ。いい天気だしな」

そこまで言うと浩平は出て行つた。

茜は去つて行く浩平を黙つて見送つた。

(司が駄目だったからって浩平にします、なんて)

どんなに浩平と一緒にいて安心しても、司に対して抱いていた気持ちより浩平に対する気持ちの方が強くなつていようと、言つてはならない言葉だと思った。

確かに茜の心の中で浩平のことがとても大きくなつている。

助けてくれた時のことを心の底から感謝している。

それに、多分恋している。

かつて片思いとは言え好きだった相手の件で助けてくれたひとに、あつさりあなたが好きですと転んでしまう状況というのを、茜はひどくするく感じた。

本気で好きだと思う。

だからこそ、自分が小手先のテクニックとして前の好きなひとを利用した形になるのが嫌で仕方がなかつた。かつての自分の本気を餌にする形なのが許せなかつた。

茜のことが好きだから。

そう言つてくれた浩平の側に本当は行つてしまひたかった。しかし茜は一度きつく瞼を閉じて、そのまま学校を出たのだった。

家に帰る。

土曜日は母がフラワーアレンジメントを習いに行っているので、当然ながら誰もいなかつた。大抵は午前中に習い事をして、昼食をその仲間と一緒にとつて、買い物をすませて帰つて来る、というパターンだ。

娘が料理上手なので、中学くらいから昼食は自分で済ませることが不文律になつていた。茜もひとりで気楽に昼食を作つて食べる時間が好きだつた。

(何を作ろう)

冷蔵庫を覗いて材料を物色すると、買い物前のせいかあまり材料がなかつたので、スペゲティカルボナーラにすることにした。ケーキ類をよく作る茜の為に、生クリームは大抵用意されている。とりあえず卵と生クリーム、ベーコン、粉チーズを出してくると、とりあえずお湯を沸かし始める。

その間にお気に入りのエプロンを着けた。

卵と生クリームを混ぜておき、ベーコンを切つてかりかりに炒めた。

じゅうう、というベーコンの脂が出てきた後でキッチンペーパーに取つた頃には、湯が沸騰していた。そのままパスタを投入するとしばらくすることがない。

特にひどい空腹だという訳ではないのだが、ただ待つているだけの時間が何故か異様に苦痛に感じた。

(……浩平)

単調な湯が沸騰する音を聴き続けていると、どうしても浩平のことを思い出してしまう。時計を見ると1時20分を過ぎたところだった。まだ浩平は家にいるだろう。

物思いにふけりながらパスタをかき混ぜているところは、自分でも滑稽に見える。

まだ卵液に味をつけていないことを思い出して、粉チーズと塩、胡椒をいれてかき混ぜた。ついでに冷めたベーコンも放り込んでおく。

そろそろすることがないことをもてあまし始めた。

ちらちらと時計を窺つて、浩平がどうしているだろう、などと考え込んでしまう。

(行かないって言つたのに、何馬鹿なことをしてゐる、私)

溜息をついたところでタイマーが鳴り、思わずびくつと震えた。ゆでたパスタをざるにとつて、ボウルに放り込んで混ぜる。

ちょうどよく出来上がったカルボナーラを食べ始める。フォークで口に運んでいる間も浩平のことが浮かんでくる。

茜は機械的に食べ終えると、そのまま食器や鍋を片付けて二階へ上がってしまった。約束の時間を5分ほど過ぎていた。

茜はうつむくと、目覚まし時計を裏返してしまった。さつきからずつと時間が気になつ

て仕方がない。

浩平はあの公園で待っているのだろう。

来ないと解っていてもずっと待ち続けるのだろう。

茜は大きく息を漏らした。

時計の音が、異様に大きく響く。

かちつ、かちつ、かちつ

茜は自分の耳を押さえた。しかしそれは逆効果だった。意識してしまって耳を押さえた程度では針の動く音は遮れないし、自分の鼓動までが頭に響いてくる。

茜はいらいらしながらただベッドに座っている羽目になった。

ぱつつ

ガラスに水滴が当たる。

ついさっきまでは晴れていたのに、突然空がどす黒く曇ってきた。そしてあつという間に雨粒がぱつぱつ当たる音は、激しい雨の音に取って代わられた。

(嘘、でしよう?)

あの公園にはどこにも雨宿りする場所はなかつた。

浩平が待っているのなら、ひたすら濡れるばかりだ。

茜は反射的に立ち上がっていた。

この時期に雨に打たれながら、ただ待ち続けるというのはあまりにも酷だ。自分が冷水のようないい雨で寝込んだばかりだからこそ余計に痛感する。

こんな雨の時に浩平が待っている訳がない。そう信じたかった。それに浩平は茜が来なければ散歩に切り替える、と言っていたではないか。散歩の途中に雨が降ってきたのなら、必ず走つて帰るだろう。

そうやつて自分に言い聞かせる。

しかし、茜はふらりと自分の部屋から出ていた。最初はゆっくりと歩いていたつもりだったが、気が付くと小走りに玄関から傘を差すのもそこそこに駆け出していたのだ。

(何してるので、私……)

浩平はもういよいよ思ひ込もうとしても、どうしても雨に打たれて待つている浩平の姿が脳裏から離れない。

待つていてる。

浩平が待つていてる。

(ちゃんと家に帰つてて、浩平)

茜は祈るような気持ちで走つていた。

こんな雨の中で公園にいようと思う人間はいない。そのはずだつた。
確かに公園には誰もいなかつた。

浩平を除いては。

びしょ濡れの浩平はベンチの側でぼつりと立つていた。
(……どうしてそこまで、私を待つていられるの)

茜は泣きたくなつた。

誠実でありたかつたし、上つ面だけで仲のよい男友達を『次の彼氏』呼びわりする、
というパターンは嫌だつた。

浩平の側はひどく居心地がよくて、失いたくはなかつた。それは事実だ。しかし、いくら浩平が好きだと言つてくれたからと言つても、ほんの数日前まで司を思つていた自分がいきなり浩平がいい、と言つても誰が信用するのか。

茜自身も信じられないというのに。

それでも、茜は雨に打たれながら自分を待つていてくれる少年を見捨てて行けなかつた。
心変わりを誰になじられてもいい。好きになつたひとに傘を差しかけることを諦めてしま
うような潔癖さなどもう嫌だ。

茜は浩平の側に近付いて行つた。

砂利を踏む音で、浩平が茜に気が付いた。

「……来る場所、間違つてないか？」

こんな時でさえ、冗談めかそうとしている浩平の顔に浮かぶのは、あまりに切なそうな表情だった。茜はか細い声で否定する。

「合つてます」

「どうして、来てくれたんだ？　来ないつて言つてたのに」

茜は浩平に傘を差しかけた。

「傘、持つてないと思つたから……風邪ひくと思つたから。それだけです」

「……そうか」

低い声で浩平が呟く。

「傘差してた割にはずいぶん濡れてるな」

「……走つたから」

茜はうつむいた。浩平が苦笑する気配が伝わる。

「全く、それだけ濡れてたら傘持つてる意味ないな」

「そうですね」

茜もかすかに笑んだ。何となく浩平の口調が普段通りのものになつてゆく。

「そんなことやつてると、また倒れるぞ」

「その時は、浩平がまた助けてくれます」

「俺まで倒れたらどうするんだ」

「そうですね」

確かにふたりして倒れているのも間抜けな光景だ。

「そうですね、じゃないだろ。全くお前は……」

浩平が溜息をついた。呆れているのは解るが、それと同時に自分を包んでくれるような優しさを感じるせいで、茜はリラックスしていた。

「私は、馬鹿ですから」

「ほんとにそうだ」

「はい」

馬鹿でもよかつた。

ちゃんと浩平に傘を差してあげることができたのだから。

茜はそう思つて浩平を見上げた。

「茜、ありがとうな」

浩平がにつこり笑つてくれた。

茜は一度だけ瞼を閉じて、それから浩平を見つめた。

「いいんです。私は、振られたんですから」

この世界に浩平が引き戻してくれたのだから。茜にとつて大切なひとが、茜を世界にとどめてくれたのだから。

茜は滅多に浮かべることにない心からの、満面の笑みを浮かべた。

「じゃ、今日は帰ろうか。さすがにびしょ濡れで映画館に入つたらまずいしな」

「はい」

「じゃあ、家まで送つて行くよ」

茜は立ち止まつたままだつた。

「こういう時、普通は傘を持つてくれるものです」

「まあ、そう言えばそうか」

半ば背伸びしながら身長差のある浩平に傘を差しているのは、確かに難しかつた。しかし、茜が考へているのは他のことだつた。

浩平は茜の思惑に気付くことなく、あつさりと傘を持つてくれる。とりあえず自由になつた茜は、浩平の顔をじつと見つめた。

キスしたかった。

今まで素直に気持ちを表せなかつた分、余計にそうしたかった。

浩平が穏やかな眼で茜を見ていてくれる。

茜は口籠もりながら呟いた。

「……こういう時、普通はうつむいてくれるものです」

一瞬驚いたような感じがしたが、浩平は笑つてくれた。

「はは、そう言えばそうだよな」

浩平が茜の側まで顔を寄せてくれる。茜はつま先立ちになるようにして、浩平の唇を自分でそれで塞いだ。

初めてのキスだつた。

冷たさのせいで唇に半ば感覚がなかつたが、それでも浩平の息が温かいのが伝わつくる。唇が触れた瞬間、心臓の鼓動がうるさく感じるほどに緊張していたのに、それと同時にゆつたりとリラックスしてゆく自分を感じていた。

触れ合つているうちに、唇の温度が戻つてくる。

温かかつた。

「……どこにも、行かないですよね」



浩平は司のように消えてしまつたりはしない。そのはずだ。

「あ……」

しかし浩平が何故か脅えるようにかすかに震えたことを、キスの途中の茜ははつきりと気付かなかつた。

「……風邪をひきますよ」

顔色の悪い浩平を連れて、茜は自分の家まで歩いた。

ふたりでいるとそんな気はあまりしないのだが、茜も浩平もすっかり冷え切つてしまつてゐる。

何故か行きに走つたときよりずっと速く着いたような気がした。ゆっくり歩いていたのだから倍はかかっているはずなのに、そんな気は全くしなかつた。

ガレージに母の軽自動車は停まつていない。母はまだ帰つてきていないのだ。もしかしたらこの雨だからどこかでお茶でも飲んでから戻つてくるのかもしれない。

茜は鍵を開けた。

「おじやまします」

茜について浩平が中に入る。

「タオルを持つてきますから」

リビングに浩平を通して、エアコンをつけると茜はタオルを二枚取りに行つた。茜の髪からも水滴がしたたつてくる。ちゃんと拭いておかないとまた風邪をひいてしまう。棚からバスタオルを一枚取り出す。普通サイズのタオルでは、このびしょ濡れの状態では全然間に合わない。

手持ち無沙汰な様子で床に立っていた浩平に、茜ははい、とタオルを渡してやつた。

「サンキュー」

タオルを受け取ると浩平はごしごしと体を拭いた。

茜も髪の上からタオルをかぶり、おおざっぱに髪から水を絞る。その後で一度髪をほどき、丁寧に水気を取つていった。

浩平は物珍しそうにその様子を見ている。

「どうしたんですか？」

「いや……よく考えてみれば、髪をおろしてゐる茜を見たのは初めてだ。澪と一緒に時は片方しかほどいてなかつたからな」

「……そうですね」

茜の腰まである長い髪は、編んでおかないと異常に不便だ。家に帰れば三つ編みをほど

いている時も当然あるのだが、浩平にとつてはよほど新鮮であつたらしい。見とれるように茜から視線を外さない。

茜は恥ずかしくなつてしまい、その視線から隠れなくなつてしまふ。とりあえず髪がそれほど重くなり、水滴が落ちなくなつてから茜は一度タオルを置いた。

「どうした？」

「何か温かいものをいれてきます。浩平は座つていてください」

茜はすぐ隣につながつてゐるキッチンに入つていった。コーヒーと紅茶とどちらにしようか迷つたが、紅茶の葉が切れていたことを思い出し、コーヒーを入れる準備をする。コーヒーメーカーに水とコーヒー豆をセットする。後はコーヒーの熱い雰がすっかり落ちてしまうのを待つだけだ。

しばらくするとコーヒーのいい匂いがしてくる。

それにつられたのか、キッチンに浩平が入つてきた。

「いい匂いだな。腹が減つてくるな」

「お昼、何を食べたんですか？」

「何食つたつけ……さつまいもか何かのペーストが入つてるパン、だつたと思う」

「浩平にはそれだけじゃ足りません」

茜はポットからコーヒーをカップに移すと、浩平の前に出した。もうひとつのカップに自分のコーヒーを入れる。

「ミルクとお砂糖、ありますか?」

「どうしような。俺、どつちも平気だけど」

「じゃ、入れた方がいいです。雨で体力が消耗してるはずですから」

冷蔵庫からカルボナーラに使った残りの生クリームを出して、ミルクピッチャーに入れ
る。砂糖と付け合わせのクッキーを棚から出してきて、トレイに乗せた。
茜はリビングまでトレイを運んだ。

やはりエアコンが効いているリビングの方が暖かい。

「いただきます」

浩平が妙に礼儀正しく一礼して、コーヒーに口を付ける。

「もしかして緊張してませんか?」

ぎくつ、と浩平の体が強張る。

「な、何で解る?」

「何となく」

浩平は自分の感情が表に出るタイプだと氣付いていないらしい。もしかして茜は超能力

者か、などと馬鹿な台詞を呟いている。

茜はかすかに微笑むと、自分のカップに口をつけた。

何でもないような世間話をしながらコーヒーを飲んでくつろいでいると、ガレージに車が入る音が聴こえた。

浩平が外に眼をやつた。

「母です」

しばらくすると玄関の扉が開き、靴音が響いた。多分スーパーで買い物でもしてきたのだろう。ビニール袋に荷物が入っているとすぐに解る音が聴こえた。

「お帰りなさい、お母さん」

「ただいま。何だかひどい雨ね。あら、お客様さん?」

「そう、同じクラスの折原浩平君」

茜が紹介すると、浩平は一度立ちあがつて会釈した。

「初めまして、折原です」

母がにつこりと浩平に笑いかけた。

「折原君ね、ゆっくりしてつてちょうどいい

「……すみません」

浩平はもう一度頭を下げるソファに座った。

「そう言えば茜が男の子を家に連れてくるなんて初めてね……」

にこやかに浩平に話しかけていた母が、不思議そうに言葉を途切れさせた。

「初めて……？ 変ね、前にもこんなことがあつたような気が」

「お母さん」

茜はそれ以上浩平に聞かせないように母の言葉を遮った。

「なに、茜？」

「……荷物片付けるの、手伝うから」

いなくなつた司のことを浩平に言わぬでほしかつた。浩平は司がどうやつていなくなつたのか全く知らないのだ。多分、ただの家出か失踪だと思つてゐるだろう。

茜は立ち上ると床に置かれたビニール袋のひとつを持つてキッチンへ向かつた。リビングには戸惑つた表情の浩平が残された。

傘の一本を浩平に貸し、玄関まで見送る。

浩平は少し迷つたように言葉を切り出した。

「……さつきの、茜のお母さんの言葉……どういう意味なんだ？」

茜はうつむいた。

「幼なじみの件にしては、何か変な感じだったし。かと言つて他の誰かが来たのを忘れてる、って感じじやなさそだつたし」

やはり気付いていたのか、と茜は息をつく。

「……ごめんなさい、浩平」

「話せないのか?」

哀しそうな眼で茜を見下ろした。

茜は横に首を振る。

「信じてもらえないようなことだから。まだ、話す勇気が出ないんです」

「茜、俺は……！」

「いつか必ず話します」

茜は涙で視界がくもりかけている眼で、浩平を見つめた。浩平がどんな顔で茜を見てくるか解らないが、茜の頭にぽん、と掌が乗せられる。

やさしい声だった。

「解った。すぐ話せなんて言わない。茜が話せるようになつてからでいいからな。ただ、

俺は茜の言うことなら信じる。そう言いたかつたんだよ」

「……はい」

玄関の扉を開けると、小降りになつたもののまだ雨が降つていた。

「じゃ、また来週な。コーヒー、ごちそうさま」

「……はい」

茜が手を振ると、浩平も同じように振り返した。

リビングにコーヒーカップを片付けに戻ると、ちょうどキッチンから母が出てくるところだつた。炊飯器に米をセットしたところらしい。

「さつきの折原君、もう帰つたの？」

「今帰つたところ」

「いい子だつたわね。でも、本当に前に来たことなかつた？ 何だかうちに男の子が来てたの、初めてじゃないような気がするんだけど」

「浩平が来たのは初めてです」

司の記憶は彼を知る人の中で、ひどく曖昧な形で消されてしまつてゐる。幼稚園の頃から頻繁に遊びに来ていた男の子の存在をすっかり忘れてしまつてゐるのに、その気配だけがまだ残つているのだろうか。

「……そうね、そのはずよね」

母はけだるげに首を振った。

茜は手早く食器を洗つて片付けると、そのまま二階の自分の部屋に上がつてしまふ。これ以上、司が忘れ去られているのだという事実を突き付けられたくなかつた。

とても説明がつかない形で消えた初恋の相手のことを、とても信じてもらえない事実を、近いうちに浩平に語らねばならないことがひどく重荷だつた。

第6章 | 彼の温度

あの雨の日以来、茜と浩平はいわゆる『彼氏・彼女』というような関係になつた。

恋人、という言葉が似合うような、ロマンティックな会話など全くないし、やつてていることはそれまでとさほど変わらなかつた。しかし、傍から見てもふたりの間に流れる空気は、それまでよりやわらかなものとなつていた。

茜の表情から初めて浩平と言葉を交わした頃のかたくなな冷たさはなくなつてゐるし、浩平の方も瑞佳に起こされて遅刻寸前で学校に駆け込む、という生活パターンを改め、茜と待ち合わせて登校するようになつた。

何より、茜の顔には穏やかで幸せそうな笑みがたたえられるようになつた。

もちろん、付き合い始めたからと言つてお邪魔虫が現れない訳ではない。

相変わらず詩子は学校を抜け出して遊びに来るし、澪も含めて一緒に遊びに行つたりすることもある。

しかし、今日は詩子は来なかつたし、澪の方は所属している演劇部の練習が忙しく、最近はあまり遊びに来られない。この前逢つた時には元氣いっぽいで、スケッチブックに『がんばるの』と書いて出してくれたものだつた。

一度舞台のチラシを澪にもらつたが、キャストの目立つところにはちゃんと『上月澪』の名前が入つていた。見に行くと真っ赤になつて照れていた。

とりあえず今日はふたりだ。

しかし、茜は授業が終わる直前、珍しく気を張り詰めていた。
その理由は。

『山葉堂のワッフル、新メニューが出るんだって』

廊下側の席に座っている女生徒が、前にいる女生徒に小声で話しかけている。
これだった。

もともと山葉堂のワッフルは人気商品だ。山葉堂は通常メニューでさえ並ばないと買えないほどの人気店だ。しかも、新メニューとあれば尚のこと、客が殺到するのは眼に見えている。当然いつもみたいに普通に並んでいては絶対に買えないのは想像に難くない。

甘いものが大好きな茜としては、絶対押さえておかなくてはならないという類のものなのだ。通常メニューは全部食べている。

おいしい新作ワッフルを吃るのは幸せな気分に違いない。

もちろん、浩平と一緒に食べればもつと幸せだ。

茜は浩平の席までやってきた。

「……浩平」

窓際の席からのんきに晴れた空を見ている浩平に、茜は声をかける。浩平はにこやかに

茜の方を振り返った。

「茜、いい天気だなあ」

「はい」

雲ひとつない快晴の青空が確かに気持ちよかつた。

「今日は何か予定がありますか?」

「なんもない。暇ならどこかぶらつくか」

「商店街がいいです」

その一言だけで浩平は茜の目的を察してしまつたらしい。

につ、と楽しそうに笑う。

「山葉堂のワッフルの新メニュー、だろ」

ちゃんとお見通しだ、といった感じで浩平がいたずらっぽく微笑む。茜はかすかに頬を染めた。

やはり教室の窓側の方でもその話題は飛び交っていたらしい。結構甘い物が好きな浩平も食指をそそられたのだろう。

「……はい」

「じゃつ、早速商店街に行くぞっ!」

照れ隠しに勢い込んで言う。

「まだホームルームがあります」

「面倒だから一緒にさぼろう。どうせ髭のことだから生徒の半分がペンギンと入れ替わつても気付かないんじゃないか?」

「……可能性はあります」

勝手に教室に入り込んでいた、他校の制服を着ていて、おまけに席にもついていない詩子にさえ気付かなかつたのだから、充分有り得ることだつた。何しろ髭は、本来ならば全員の顔を憶えていてしかるべき3月に、勝手に休みの生徒の席を占拠した上級生のことを、本来の席の持ち主と区別がつかなかつたという逸話の持ち主だ。

もちろん、その上級生がそんな馬鹿なことをした理由は、当然ながら気付くかどうかを賭けていたからだ。それが茜達が一年生の頃の話だ。そんな面白い先生なのか、と思つていたら何と担任になつてしまつて、例の逸話を自分で確認する羽目になつたのだ。

しかし、髭はよからぬ噂をしている間に教壇のところに向かつてきていた。

「悪いことはできないものです」

茜は微笑んで自分の席に戻つた。

やつとHRが終わり、茜は浩平と一緒に走り出していた。

目指すは山葉堂。

うららかな初春の太陽を浴びながら、茜としてはかなり速く走っているつもりだった。あたたかな陽気のせいか、走っていると暑く感じるほどだ。

しかし。

「やっぱり歩こうか？」

少し先で浩平が同じ場所で駆け足をしながら待ってくれていた。

「……大丈夫です。売り切れたら嫌ですから」

茜のスピードは本人が一生懸命走っているつもりでも、かなり遅かった。往来を歩く人達よりは速いかな、といつた感じだ。

脚の速い人が歩くのとさほど変わらない。

「だつたらもつと急がないとな」

「……はい、急ぎます」

茜はピッチを上げた。

腰まである三つ編みが二本、ぽおんぽおん、と背中に当たる。

「頑張れ、茜」

浩平が励ましてくれる。

茜は笑い返した。

茜としてはかなりのハイスピードで山葉堂に着くことができた。

しかし、長い行列が既にできており、浩平と茜はその最後尾に並んだ。この位置だと何とか新メニューを買うのにぎりぎり間に合うかどうかだろう。

「……凄い人だかりだな」

山葉堂は雑誌やテレビでも紹介され、この時間には中崎町の人間だけでなくこの近隣からやってきた女子学生でごった返すことになる。

今の時間に並んでいるほとんどの人間が女子学生であるのは、単純にOLや主婦が午前や昼など、もつと違う時間に並ぶからである。

茜は少し乱れている息を整えた。

運動能力はお世辞にも高くない方だが、基礎体力がない訳ではないので、しばらくするとすぐに回復する。

「私達も人のことは言えません」

「確かにそうだな。そう言えば、新しいメニューって何だ?」

「……知りません」

クラスの噂では新メニューにどんなワッフルが入っているかまではフォローしていなかつた。だから何があるかは並んでみてのお楽しみだ。

「お、何か貼つてある。あれじやないか？」

浩平が店舗の方を指差した。

しかし、人込みに隠されて何があるのかさっぱり解らない。

「見えません」

それでも何とか浩平が指差した方を確認しようと、背伸びをしてみたりジャンプしてみたりしたが、全く報われない結果に終わつた。

女子学生といつてもやや長身の生徒だと既に茜とは10センチは優に差があるのだ。覗こうとしても壁は厚かつた。もちろん、茜自身の跳躍能力がたかが知れている、というのも大きいにある。

浩平が同情して茜の頭にぽん、と掌を乗せた。

「俺が読んでやるから」

「はい」

んー、と声をたてながら、浩平は全く問題なく貼つてあるものを確認する。

「……ええと、プレーンとチョコとアーモンドは今まであつたよな」

「はい」

「……新しいのはストロベリーと、ココナッツ……」

どちらもおいしそうだ。茜はどんな味のワッフルだろう、と想像した。

浩平の読み上げはまだ続いている。

「……それから……何だあれ？」

その声が一度ぎょっとしたように途切れた。

自分に納得させるように小声で読み上げてゆく。

「……砂糖をふんだんに使ったワッフルに……」

「……ふんだんに砂糖」

ワッフル生地がいつもよりずっと甘くなっているのだ。

もちろん通常の甘さのワッフルや、甘くない軽食として食べられるタイプのワッフルも好きだが、それは絶対においしそうだ。

「練乳を練り込んだ……蜂蜜、をたっぷり……想像しただけで口の中が甘つたるくなるよな。甘党の人にお勧め、つてあるけど、いくら何でも甘すぎるだろ」

「練乳と蜂蜜……」

練乳も蜂蜜も大好きだった。きっと幸せな甘さが口に広がるに違いない。

茜はうつとりした。

「どうした、茜？」

「それがいいです」

「……マジか？」

「はい」

茜はうなずいた。

浩平がひきつっているように見えたが、その甘くて幸せな味を想像している茜には全く気にならなかつた。

何となく疲れたような声で、浩平が提案した。

「ここは無難にストロベリーあたりから挑戦してみないか？ ココナッツなんかもうまそ
うだし」

「……嫌です」

確かにどちらもおいしそうだが、一押しのメニューはやはり練乳蜂蜜ワッフル以外にな
いだろう。ストロベリーもココナッツもそのうち食べればいいのだから。
「まあ、茜がそう言うなら別に構わないけどな」

浩平は小声で店長を呪う文句を呴いていたが、心の中が練乳と蜂蜜のマーブル模様になつてゐる茜には全く聽こえなかつた。

「いらっしゃいます。何になさいますか？」

店員のお姉さんがにこやかに応対する。

浩平がひどく切り出しにくそうに貼つてあるメニューを指差した。

実際には『例のブツ』を頼んだなどと、周囲に知れるのが恥ずかしくて仕方がないからそういう行動に出ているのだが、当然茜には浩平の気持ちは解るはずもない。

「ええつと、その……つ、一番下のやつを4個入りの箱で」

「え」

限りなく『げ』という音に近い声をあげ、店員の顔があきらかに硬直した。もしかしたら売り切れになつてしまつたのか、と茜は心配になる。

しかし、店員はもう一度笑顔を作ってくれた。

「……かしこまりました。4個入り1箱ですね」

「……ああ」

しばらくすると茜には待望の、浩平には絶望の練乳蜂蜜ワッフルが焼きあがり、ふたりは混み合つた行列からやつと抜け出ることができた。

「買えましたね」

運が悪ければ店を閉じていたかもしれない盛況だったのだから、本当に幸運だった。

茜は暖かな湯気が隙間から漏れている紙箱を嬉しそうに抱えている。

「じゃあ、どこで食うかな。天気もいいし、公園に行つて食うか」

確かに青空の下でほかほかと暖かい陽を浴びながらワッフルを食べるのは、ピクニックのようで楽しいだろう。しかし茜はもつと違うところで食べたかった。

つきあい始めたばかりの恋人の家で、ふたりきりでゆっくりと食べる。そんなシチュエーションで食べるのもきっと幸せなはずだ。

そこまで考えてから、茜はひとつ思い出した。もし浩平の叔母が在宅しているのなら、前に助けてもらつた時のお礼を言いたかったのだ。

自宅に帰つて下着を替えるまで気がつかなかつたが、帰つた時に茜がはいていたショーツは見憶えのないものだつたのだ。少女向きのデザインではなく、シンプルではあるが大人向けのものだつた。それにブラジャーはいつの間にかしていなかつた。

慌てていろいろ探すと、通学鞄の隅にビニール袋に収められた茜のブラジャーとショーツが入つっていて、その側にメモが入つっていたのだ。

下着も替えないと風邪をひいてしまうので、私のをはいてもらいました。新品ですから安心してください。

本当は服と一緒に洗つてあげたいのですが、乾いたものを浩平に持たせることになりますから、男の子に下着を見られるのがいやだらうと思いましたので、そのまま入れておきます。お大事にね。

ゆきこ

気を効かせた形で着替えさせてくれた由起子に、ちゃんとお礼を言つておきたい。
べたべたの親子とは違つて付かず離れず、といつた関係を保つてある節のある大人の女性の顔を、茜は見ていない。

それが今日でもいいかもしない、と茜は思つていた。

「浩平の家がいいです。以前お世話になつたお礼を言いたいので……おばさんはいますか？」

「ああ、今日は休みだから家にいるぞ。じゃあ、三人でワッフルでも食べようか」
浩平は茜が言わんとするところを悟り、につこり笑つてみせた。

もう多少は見馴れた浩平の家の門をくぐり、茜は浩平がドアの鍵を開けるのを待つていた。かち、と鍵が回る音がする。

「おじやまします」

「とりあえず由起子さんに話してくるから、俺の部屋で待つてくれ」

そう言うと、浩平は茜を先導して二階へ上がった。

ドアを開けると、相変わらず散らかった浩平の部屋が眼に入る。

「まあ、どつかに座つてくれ

「……どこか」

そうは言われてもどこにも座つていられそうなスペースはなかつた。床も散乱しているし、勉強机とセットになつてゐる椅子には、乱雑に服がかけてある。

「散らかつて悪いけどな」

「はい」

確かに散らかっていると言われば、これほど散らかっている部屋も珍しいに違ひなかつた。第一、司の部屋以外に男の子の部屋には入つたことがないし、司の部屋は基本的に片付いていたのだ。

弟の部屋は確かにきれいではないが、ここよりは多少は片付けてあるように見える。ただし、男兄弟の部屋というのはそんなに頻繁に入る物でもないから、茜が見ていない時は汚くしているのかもしれない。

浩平は茜のストレートな返事に苦笑した。

「そう言うなって。片付ける時間もなかつたんだから」

「気にしません。私の部屋も散らかっていますから」

まあ、この部屋ほどではないのだが、あえて言う必要もない。

浩平はしばらく首をひねって茜が座るべき場所を見繕っていた。

「そうだな、ベッドの上にでも座つてくれ」

言うまでもなく座る場所はそこ以外には残つていなかつた。

茜は部屋に入るとちよこんとベッドに腰かけた。

「じゃあ、おばさん呼んでくるから」

「……はい」

浩平はそう言うと手を振つてドアの向こうに消える。

思わず茜はこの部屋の中で、三人がベッドに腰かけてワッフルを食べるところを想像してしまつた。

かなりの線で間抜けな光景だつた。

そんなことを考えながら待つてゐると、しばらくして階段を昇つてくる足音が聴こえた。
しかし、一人分だ。

(一階で話そうということになつたのかも)

茜はドアの方を見た。

浩平がドアを開き、困惑した表情で入つてくる。

「……ただいま。あんまり広いんで家の中で迷つてしまつた。やっぱりキッチンが17もある
と、人を探すのは大変だな。ちなみに、風呂が21、トイレが43もあるんだ」

冗談めかした言い訳にひどく戸惑つているような声色が混ざつてゐる。

「それで、家の方は?」

「急用が入つたとかで、出かけてた」

手に持つていたメモを茜に手渡す。

急用が入つたので、でかけます。

夜はいつものようにインスタンントで済ませてください。

「今日なんかさ、夕食は腕によりをかけて作るから楽しみにしててくれ、って張り切つてたはずなのにな。忙しい人だよ、ほんと」

「いつ頃お帰りですか？」

少なくとも夕食前に帰ることないと推測はできる。

浩平は頭を抱えた。

「いつものパターンだつたら早くても11時。もしかしたら今日中には帰らないかもしけない

それで浩平は茜に言い辛かったのだと納得する。

「……で、どうする？」

「はい」

「はい、と言われても困るけど……茜はゲームとかしなさそうだし」

確かに家庭用ゲーム機は自分の部屋になかった。弟の部屋にはあるらしいのだが、わざわざ入り込んでプレイしようとも思わない。一応詩子の家あたりに遊びに行けば、ゲーム機もないではないのだが、それほど得意でもないのだ。

浩平はあたふたと部屋の中を見回している。

その視線が茜の顔で止まつた。

茜をじっと見ながらも、浩平は戸惑つた様子で口を開いた。いきなり視線が熱っぽくなつてゐる。

「茜、もう一度キスしていいか？」

「……嫌です」

いきなり何を言い出すのだろう。茜は浩平をじっと睨んでやつた。けんもほろろの口調に浩平は苦笑した。

「やつぱりな。まあ、それはともかく、せつかく来てもらつたのに悪いけど、今回のところは出直すか？　おばさんには俺の方からちやんと言つておくから」

茜は一度うつむいて考えた。

当初は浩平と一緒にワッフルを食べる、という予定だつたではないか。由起子に礼を言うことことができなかつたのは残念だが、本来の目的がまだ残つてゐる。

「ワッフル、食べませんか」

茜はかすかに微笑んだ。

「冷めたら、おいしくないです」

「そうだな。俺達の分だけでも食つとくか」

いつも通りの浩平に戻ると、浩平は立ち上がった。

「じゃあ、俺飲み物いれてくるよ」

「……私も手伝います」

どうせここでひとりでいても手持ち無沙汰だ。茜も浩平について立ち上がる。

「そうか、悪いな」

明らかにほつとしているのは、多分コーヒーや紅茶などをいれるのが上手くないからだろうと思われる。詩子の家に遊びに行つた時にも、お茶やコーヒーをいれる役目は大抵茜がすることになつてゐる。

今度は二人分の足音がとんとんとん、と一階に降りる。

クリスマスパーティーの日、ケーキを作る為にキッチンは一通りチエックしてあるので、何も問題なく用意ができる。

「コーヒーと紅茶、どつちが好きですか？」

「じゃ、紅茶」

茜はうなずくとやかんにたっぷり水をいれて火にかけ、棚からティーセットを出してきた。ついでに由起子のものらしいエプロンを引っ張り出してくる。

蛇口からお湯を出してポットやカップの中に張った。

「なあ、茜。紅茶をいれる時もエプロンを着けるのか？」

「はい」

「面倒じゃないか？」

「気分の問題です」

エプロンをしていると、ちゃんと台所仕事をしているような気になつて、手を抜かないようにしてしまうという気が出てくるのだ。ある種の暗示だ。

しかし肝心の紅茶は、コンビニで買ったティーパックだった。スーパーが開いている時間に買い物に滅多に行けない由起子は、どうしてもコンビニで買えるものに頼ることになる。もちろん、忙しくてあまり帰つてこないので、リーフで買って来ても香りが飛んでしまう、というものもあつた。

それでも、手をかけていれた紅茶はいい匂いを放つている。

「できました」

茜はトレイにティーカップを乗せて、二階に運んだ。

浩平が一応床に散乱するものを乱暴にどかして、床にふたりが座るスペースを確保する。茜は学習机にトレイを置いて自分のカップを取つてぺたんと床に座つた。

同じように浩平も座る。

浩平が紅茶を飲んで妙に感嘆している。

「うまいなこれ」

「ティー・パックです」

「同じ物使つて自分でいたのと味が違うってのも、何だか凄い」

「浩平はお茶をいれるの、下手ですか?」

「うーん、多分下手だと思う。うまいと思ったことがないからな」

「詩子も似たようなことを言つてます。いれるたびに味が違うそうですから」

「……柚木のいれたお茶を飲むのは絶対よそう。均等にまずい分だけ自分でいた方がずっとましだ」

見事に自分のことは棚に上げ、浩平が顔をしかめた。

「とりあえずワッフルでも食うか」

学習机の上に置いてある山葉堂の箱はまだ温かい。浩平はそこからひとつずつ取つて一個を茜に渡した。そのまま自分の手に持つているワッフルをかじる。

数秒後、浩平はひきつった顔で茜を見つめた。

「……これ、無茶苦茶甘くないか?」

茜も同じようにワッフルに口を付けた。

練乳と蜂蜜の甘さが口に広がり、幸せな気分になつた。

「おいしいです」

「俺もどつちかと言ふと甘党なんだけど、これは……きついぞ」

茜が順調に食べている間も、浩平は結局その一口だけしか食べなかつた。

時折紅茶を飲みつつ、茜はゆっくり練乳蜂蜜ワッフルを食べた。

「ごちそうさま」

食べ終わつた茜を浩平がじつと見つめている。上から下まで見られて、恥ずかしくて仕

方がない。からかうような笑みを浮かべ、浩平が口を開いた。

「……さつきの話だけど、本当に駄目か？」

「さつきの話？」

「もう一度キスしたいってやつ」

繰り返されるまでもなく解つてゐる。

しかし、茜としてはあの日のことは勇気を振り絞つてしたことで、日常的にキスを交わすほどには唇が触れ合うことに馴染んでいなかつた。

「……嫌です」

「どうしても？」

「どうしてもです」

きっぱり断わる。普段ならこれで終わるはずだった。
しかし、爆弾は後できた。

「でも、俺は茜のことが本当に好きだけど」

茜は顔が上気しているのを感じ、うつむいた。

「……私もです」

消え入るような声でそう呟くのが茜の精一杯だった。

そのまま居心地の悪い沈黙にふたりして耐えている状況を考えると、思い切ってキスした方がよほど恥ずかしくなかつたかもしれない、と思うほどだ。

「あ……っ」

どちらが声をあげたのかは解らない。しかし、それはすぐに大きな音で遮られた。

窓際に置いてある目覚まし時計の音だった。

あまりの音の騒がしさに、思わず茜の体はびくつ、と震えた。しかし、声だけは落ち着いた様子で浩平に告げる。

「……鳴つてますよ。止めましょか？」

〔頼む〕

脱力して溜息をつく浩平の代わりに近くにいた茜がその時計を取り、いろいろそれらしいボタンを押してみる。しかし、何故か時計はいつまでも騒がしい音を響かせ続けている。

「止まらないんですけど」

「頭についてるボタンを押したか？」

「押しました」

いじれそうな部分は全部いじってみたのだから間違いない。

「強く押してみたか？」

「一生懸命押しました」

どれだけ努力してみても目覚まし時計にはその努力は通じなかつたらしい。ひたすら凶

悪な騒音を響かせている。

浩平が溜息をついた。

「うーん、確かに前から調子が悪かつたが

「壊れてるんですか？」

「ああ、目覚ましが鳴ったにも関わらず、朝ちゃんと起きられないんだ」

「……それは時計のせいじゃないです」

「でも、調子が悪いのはほんとだ。そろそろ新しいのを買わないといけないとは思つてたんだ。まあ、とりあえずこれをどうにかしよう。ちょっと貸してくれ」

茜はうなずくと浩平に時計を渡した。

「こういうのは気合で何とかなるもんだ」

やあっ、とかけ声をかけて、時計の上のボタンを連打する。しかし、ジリジリと鳴る目覚し時計の音に、がしがし叩く音が加わっただけだった。

「余計にうるさいです」

「くそっ、どうして鳴り止まないんだっ。こうなつたらもう破壊する他方法はない……。さようなら、目覚まし。今までありがとう」

芝居がかつた口調で言うと、浩平が大きく目覚し時計を持った手を振りかぶった。
「……電池、抜かないんですか？」

そこで浩平の手がぴたり、と止まった。そして黙つて時計の裏にある蓋を開けて電池を外した。浩平は大きな溜息をついた。

「……止まつた」

「これで止まらなかつたら怖いです」

それこそ超常現象、ほんとについた怖い話の世界だ。

「何か疲れたな」

最初から電池を抜いていればここまで大騒ぎをする必要がなかつたのだ。そう思うと確かに疲れもする。浩平がどつかとベッドに座る。

茜も同じように浩平の隣に腰かける。

「さて、これからどうする?」

うつむいて膝に置かれた自分の手と睨めっこをしながら、茜は気持ちを固めた。

「……さつきの話、構いません」

自分が言つていることに自分で照れてしまう。恥ずかしさの余り顔が熱くてたまらない。そのままうつむいたままでいると、低い声で浩平が訊いた。

「……いいんだな?」

「そんなこと、訊かないで下さい」

「解った」

浩平はうなずくと、茜の顔の側に自分の顔を寄せた。
唇が触れた。

温かかった。最初の、雨に濡れた冷たい唇とは違つた。身を斬られるようなせつなさは

なく、やさしいキスだった。その温かさが、どっぷりと浸かってしまいたい安心感と、面映ゆい恥ずかしさを同時に呼び起こしてくる。

浩平が茜を静かにベッドに横たえた。体に浩平の重みを感じる。
ひどく安心できる重みだった。

浩平がどうするつもりなのか自然な形で解っていたから、そのまま浩平の温度と重さに身を委ねていたが、それだけでは不安だったのだろう。

おずおずと訊かれる。

「……茜、いいのか」

「私は……嫌だつたら嫌と言います」

「はは、そうだつたな」

浩平は軽く苦笑いを浮かべた。茜がきつぱりと告げる『嫌です』には何度もものたうち回つているのだ。

そうされたい、と積極的に思つていた訳ではなかつた。やはり未知のことに対する脅えもあるし、何より男の人に裸を見られるのは恥ずかしい。

それでも浩平が自分を愛してくれること、求めてくれることに応えたかつたのだ。
体が本当にあるのか確かめるように、消えてしまいそうなものに手を伸ばすような感じ

で、浩平が触れてくる。

直視するのはまだ怖かつた。眼をそらして浩平の手を感じている。

ブラウスのボタンを外され、服をたくし上げられる。白いブラジャーモ浩平が不器用に上へずり上げた。露わになりかけた胸を茜は見えないように手で隠す。

「……茜、恥ずかしくないのか？」

何ということを訊くものだろう。

茜は横向きに転がつた。顔から火が出そうなほどに熱かつた。

「……恥ずかしいです、すごく。頭の中が真っ白で、何も考えられないくらい……恥ずかしいです。だから、あまり見ないで下さい」

浩平の表情にかすかに安心が混ざっている。そのことに横を向いた茜は気付かなかつたし、その理由は浩平自身にも解つていなかつた。

しかし、それはこうして肉体に触れた思い出として、自分の知らない茜の幼なじみの影が浮かんでいなかつたことへの安心でもあつただろう。

浩平が形よい胸に顔を近付け、先にある乳首に舌で触れた。

眼をそらしていた為にいきなりその感触を感じることになつた茜は、漏れてしまふ息をこらえた。そのまま浩平は茜の乳首を舐め続けている。舌を動かされるたびに、茜の体が

小さく震えた。

「子供みたいですね」

「そうか？」

「……はい」

ただただ、茜の胸にむしやぶりつく浩平の姿は、小さな赤ん坊を思わせた。

「茜、ちょっと体を起こして」

言われた通り体を起こす。シーツに刻まれたしわが、何故か妙に深く感じる。

「これでいいですか？」

茜がそう言うと、浩平は返事の代わりに後ろに回つて茜を抱き締めた。

「……浩平」

呼びかけると、浩平がひどく幸せそうに笑う。

浩平の掌が茜の胸を覆う。骨っぽい感じのする指の間から自分の肌が見える。茜は浩平の掌に自分の掌を重ねた。

恥ずかしさと、体が熱く感じるのとで肌がぼうっと上気してほんのり染まっていた。

「茜、服を全部脱いで欲しい」

「……嫌です」

今まで恥ずかしくてたまらないのだ。

しかし浩平の手はスカートのホックにかかる。

「それなら俺が脱がす」

「浩平、嫌です」

茜は浩平の手に抵抗しようと身構えた。しかし、どうも様子がおかしい。

浩平はひどくまごついていた。強引なことを言つた後だと言うのに、どうやら外し方が解らないで戸惑つてゐるらしい。

「……どうすればいいんだ、これは」

茜はそんな浩平がひどく可愛いと思つてくすつと笑つた。

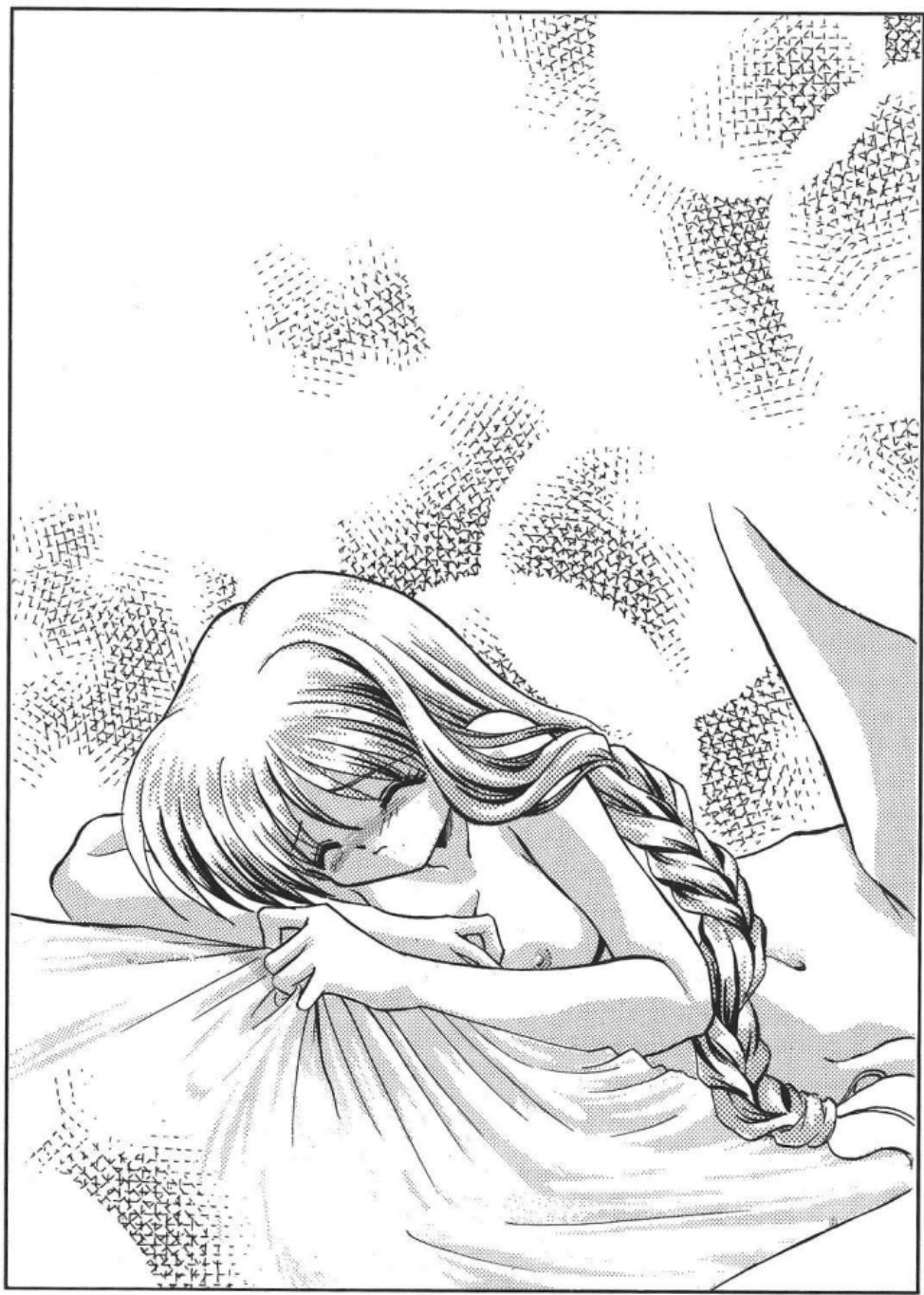
「解りました」

そうして自分でスカートのホックを外して脱ぐ。驚いたような、戸惑つたような声で浩平が訊く。

「いいのか?」

「……訊かないで下さい。恥ずかしいんですから」

何も考へないようにして一気に脱いでしまう。しかし、恥ずかしさのせいで手元はおぼつかず、到底一気にとは言い難い結果になつた。



それでも、最後のショーツを取つてしまふところまで辿り着いた。

「綺麗だと思うぞ。ほんとに」

「……ひどいです」

茜は涙をこらえながらシーツの上で座つている。綺麗、という言葉が自分の裸に対して称される言葉になるというのが信じられなかつた。それでも浩平のうつとりとした表情で、嘘をついているつもりではないのが解る。

しかし、見られていること自分が恥ずかしくて仕方がないのだ。

浩平が茜の腰を持ち上げる。

「少し腰を浮かせてくれると嬉しい」

その意味するところを理解して、茜はためらいながらもうなずいた。ほんの少しだけではあるが腰を浮かせる。茜の部分に浩平の性器が当たられる。濡れているその場所に浩平の性器がゆるやかに入つてくる。

浩平が茜の体を固定して、ゆっくりと沈めてゆく。それが明らかに茜に負担をかけさせないようにする為の浩平のやさしさであるのは解つたが、それにも増して初めて迎え入れる男性の性器が与える痛みの方が凌駕している。

「……つ」

思わず茜の眼に涙が浮かんだ。浩平が気に病んだりしないようにしゃくりあげる声をこらえようとする。

できるだけゆつくりと挿入しようとしている浩平の腕が、茜の体重をずっと支えていたせいで震えている。そして限界がきた。

いきなり奥まで入つてくる。

痛くて痛くてたまらなかつた。心配そうに浩平が訊く。

「茜、痛くなかったか……」

「……すごく、痛いです」

泣くのをこらえ続けていた。その痛みをこらえる為に必死でシーツを摑んだ。

大好きな人とそうなるのだから、投げ出したい痛みも耐えてみせる。その一心で浩平の名を呟く。

体を抱き締められたまま、大切なものを扱うようにシーツの上に横たえられた。ベッドのスプリングで茜の体が一度跳ねる。

そしてもう一度挿入された。

もう浩平は痛いか、とは訊かなかつた。熱っぽいような、包み込むような眼で茜を見ながら腰を動かし続ける。

痛かった。痛かつたけれども、茜は幸せだった。

浩平のぬくもりが、浩平が自分を愛して、求めてくれることが肌から直接伝わってくるのだから。

浩平が達するまで、茜は幸せな表情で瞼を閉じていた。

終わつた後に浩平が茜の体を抱いていてくれるのが温かくて気持ちがよかつた。

「浩平」

浩平の胸にしがみついて茜は愛するひとの名を呼んだ。

「何だ？」

「……三つ編み、いじらないで下さい」

茜を胸のところに抱き寄せながら、浩平は長い三つ編みを一本、ねこじやらしを振るようふわふわと振っている。

「澪にはよくても俺にはいじらせてくれないからな、茜は」

「……恥ずかしいです」

男の人には美容院に行つた時以外は髪を触られたことはなかつたのだ。もちろん、司にもだ。それでも浩平は興味深そうにもう一本も手に乗せる。

既に編んだ髪は乱れてくしゃくしゃになっていた。

茜は一度起きてベッドに腰かけた。

「浩平、髪を編み直します」

「俺にもやらせてくれ」

「……嫌です。斬新な頭にされたら困りますから。前にそう言つていました」

茜がそう言うと、浩平はとても残念そうに手を離した。どうやら本当に斬新な頭とやらにしてみたかったらしい。スカートのポケットから携帯用の櫛を出して、シーツの上に置いておく。

髪を止めてあるゴムを手早く外すと、三つ編みをゆっくりばらしてゆく。一度きれいに梳かしてしまって、後頭部の中央に分け目を入れて髪をふたつに分けていった。

手際よく編んでゆく。とりあえず左側の三つ編みができると、右側も同じように作つてゆく。その途中、茜は奇妙な感じを抱いた。

突然意識が薄れてゆく。

正確にはこの、ベッドに横たわっている少年が何者なのか急に解らなくなつていつてしまふ。その忌まわしい感覚は、茜にとつて初めてのものではなかつた。

(司の時も、こんなことがあつた)

世界の全ての人間から城島司という人間の記憶を消えて、茜からも幼なじみの記憶を奪つていこうとしたあの感覚。

茜はうすら寒くなつた。

(浩平)

最愛の少年の名前を奪われまいと、必死に瞼を閉じて戦う。

そうして、しばらくたつてから茜は自分の中にちゃんと浩平の記憶があることを確認して、深く息をついた。

「……浩平？」

茜は浩平の方を向いた。

浩平はぼんやりと茜の方に眼を向けている。しかし、浩平の眼は茜を見ていなかつた。まるで茜との間に何か別なものがあるかのように、ぼうつとしている。

「……さお」

浩平が何かを呟いた。

一瞬意味が掴めなかつたが、声の感じからさお、という音を含む普通の言葉ではないような気がした。

これは人の名前なのだ。

さお、の付く名前を茜は考えた。さおり。ひさお。まさお。みさお。いくつもある。かつての恋人なのだろうか、という考えが浮かんだが、茜はそれを言下に否定した。浩平は茜のことを愛してくれている。過去に好きになった人がいたとしても、それ以上に茜のことが好きなら、こんな風にいない人に呼びかける必要はないはずなのだから。

浩平の声はひどく悲しそうだった。

（司が、お葬式の後で南条先生を呼んだ時みたいに）

葬式の帰り道、司は何を話してもろくに返事をすることもなく、たった一言『紗江子先生』と呟いたのだ。それから一年以上、司は一度も南条先生のことを話そうとはしなかつたから、忘れようとしているのだと思い込んでいたのだ。

そして、冬の雨の日。司は消えてしまった。

あの時と同じだ。

悲しいことがあつたのだ。

その思い出の登場人物の名が『さお』の付く人物なのだろう。

茜はひとつ決心をすると、浩平の体を揺さ振った。

「浩平、浩平。起きて下さい」

「……あ、俺、寝てたのか」

段々浩平の眼に焦点が合つてくる。もちろん寝ていたのではないが、茜はあえて言わなかつた。

「浩平、名前にさお、のつく人が知り合いなんですか」

浩平の体が傍で見て解るほど、びくり、と震える。

「寝言で呼んでもました」

そう言うと浩平は泣きそうにも見える笑顔を浮かべた。

「妹だよ。みさおって言うんだ。小学生の時に病気で死んだんだけどな」

「……そうですか」

間違いない。明らかに浩平の口調はさつきの声と同じような悲しみをたたえている。

「そう言えば茜、いつの間に髪を編み終わったんだ」

「浩平が寝ている間にです」

「ううう、見たかった。もう一回編んでみせてくれ」

「……嫌です」

いつもの雰囲気が戻ってきたことに、茜はほつとしていた。脱いだ服を着ながら訊いてみる。

「お茶、お代わりれます。一杯目も紅茶でいいですか?」

「ああ、一緒に行くよ」

浩平がぽんつと体を起こした。

帰り道、茜は不安だった。

司の時と同じ感覚、辛い記憶。全てが一致し過ぎていた。空は茜の心の影を表すかのようにかき曇りつつあった。

第7章 | 引いてゆく潮

兆候はあった。

確かにあつたのだ。

しかし司の時よりもごくゆるやかに訪れていたことと、浩平が茜をとても愛してくれて
いることへの思いのせいで、はつきりと認識するのが遅れてしまった。

それは茜と浩平が、とても幸せな時間を送ってきたということでもあつた。



澪の舞台を浩平と一緒に見に行つた時には、まだはつきりとは感じていなかつたような
気がする。

不思議な演出の現代劇で、澪は劇中でも『言葉を話せない少女』の役柄だつた。澪の演
じる少女は主役でこそないものの、ある種のキーキャラクターで、出ずっぱりで長丁場を
こなさなければならぬシーンもある重要な役割だつた。

あの、恥ずかしがり屋の澪が堂々とした演技を見せられるように練習するのは、並大抵
のことではなかつただろう、と茜は思う。しかし、そんな考えなど失礼に当たるほど、舞
台の上の澪は輝いていた。

もちろん観客の拍手が割れるように響いたのは言うまでもなかった。

幕が下りてから、茜と浩平は一緒に舞台裏まで澪に逢いに行つた。

「澪、お前ほんとに名女優だな」

浩平の激励に澪が顔を真っ赤に染める。

「……とても、よかったです」

舞台で演技をするというのは、思ったよりも重労働なのだろう。澪の額に汗の珠が浮いていた。その上気した表情のまま、澪がスケッチブックにさらさらと書き付ける。

がんばったの

「えらいぞ、澪」

浩平が澪の頭をがしがし撫でた。髪をくちやくちやにされても、にこにことしている澪の姿が愛らしい。茜はまだ清新しく見える白い衣装をよく見てみた。きりりとした白いスリットと、中に着ているワインレッドのブラウスが、童顔の澪を大人っぽくみせている。

「その白い衣装、似合つてます」

澪が照れながらも、うんつ、とうなずいてくれた。

この学校で一番親しくしている女の子が、自分の目指していることの為に頑張っている姿はとても生彩に満ちていた。

茜も浩平も舞台を楽しんで見ることができた。

「すごかつたねえ、澪ちゃん」

「ゆつ、柚木どこから現れたっ！」

いつの間にか舞台裏にやつてきていた詩子が、嬉しそうに澪の頭を撫でる。

「その白いスース、すごく可愛いつ。澪ちゃん、よく似合うね。あたしもそういうの着てみたいなあ。あつ、そうだ。これから打ち上げにみんなで何か食べに行こうよ」

澪が申し訳なさそうに首を振る。

かたづけのあとで

部のうちあげがあるの

そう書いてみせる。

よく考えてみれば演劇シンクールと同じくらい、下手するとそれ以上の盛り上がりを見せる舞台だ。部員同士で互いの努力をねぎらおうというのは当然だろう。

「うーん、残念。じゃ、またそのうち打ち上げしちゃうね。それならさ、写真撮ろうよ。あたしカメラ持つて来たんだ」

詩子は制服のポケットから使い捨てカメラを取り出した。そして、当然のように浩平に渡す。

「はい、折原君。お願ひね」

「ちょっと待て。お前が撮るんじゃないのか」

「うん、撮るよ。でも、あたしも澪ちゃんと写りたいもん。そうだねえ。あの書き割りの前がいいかな。茜、どう思う?」

茜は舞台裏を見回した。

そこが一番三人が立つて写真を撮るのにいい場所だろうし、今のところ邪魔にもならなさそうだった。

「……そうですね。そこが一番いいみたいですね」

三人は書き割りの前に移動すると、澪を中心にして細かく立ち位置を決める。それから浩平が手馴れた様子でカメラを構えてレンズから覗いている。

「茜、もうちょっと澪の側寄つて……そう、そのへん。じゃあ、撮るぞ」
カシツと軽い音がしてフラッショナリが焚かれた。

「次は柚木、俺と代われ……って、もうフィルムがないぞ」

「あ、最後だつた?」

浩平ががっくりと肩を落とした。

コンビニでもうひとつカメラを買ってこようか、と話していると、結局大道具を片付けたような演劇部員達がやってきてしまったので、澪に手を振つて別れ茜達は外に出ることにしたのだつた。

やはり観客達がぞろぞろと歩く中、茜達も人波に逆らわず校門の方へ移動する。

「じゃあ、あたし達だけで何か食べに行こうか。そう言えば先月だつたつけ。山葉堂に新メニューが出たの。食べてみたいなあ。新しいメニューって何?」

「ストロベリーとココナッツと練乳蜂蜜です」

「茜のお勧めはどれ?」

「……練乳蜂蜜はおいしかつたです。まだ他のふたつは食べてませんが」

脇で浩平は顔をひきつらせたが、意図的にその様子を詩子に見せないようにしていた。やはり黙つていなくてはあのインパクトを味わうことはできまいという、実にろくでもない動機だが、茜には当然解らないし、あの破壊的なワッフルがどんな代物なのか知らない詩子もにつこりと笑つた。

「わあっ、じゃあそれにしよっ」

山葉堂で茜はストロベリー、浩平がココナッツ、詩子が練乳蜂蜜と、各自ばらばらのセレクトで頼む。それを温かくなつた公園のベンチで食べる。

「……うううっ！ 茜っ、これ甘過ぎるよっ」

浩平の陰謀通り素つ頓狂な声を上げて叫ぶ詩子に、ストロベリーワッフルをかじる茜が静かに言つた。

「詩子、甘くておいしいです」

「あつあつ、あたし駄目っ。パスっ。折原君そのココナッツと替えて」

珍しい詩子の動搖に、浩平は重厚に首を振つてみせた。

「駄目だ、一度口を付けたならちゃんと食い切れ。代わりにそこでお茶を買ってやる。烏龍茶でいいか？」

「うん」

浩平が茜の方に視線をやる。

「茜は、何が飲みたい？」

「……じゃあ、ミルクティを」

浩平がうなずいて公園の隅にある自動販売機の方へ歩いていった。

詩子がじいっと茜の食べかけのストロベリーをうらやましそうに見てゐる。

「茜、それおいしい？」

「……はい」

「あたしも、ストロベリーが食べたいなあ」

「じゃあ、替えますか？」

「うん、そうしよ」

詩子が素早くワッフルを押し付けて茜のワッフルをもぎ取ると、ぱくりとかじり付いてみせた。

「ストロベリーおいしいね。やっぱりこっちの方が好きだな。そう言えば茜って、時々すつごい味のものに凝ってるんだよねえ。前にもなかつたつけ？ 確か、謎の味のアイスクリーム……」

アイスクリームの一件は茜も憶えていた。

中学一年の時に新しくできたアイスクリーム屋で、茜が気に入ったコーヒーゼンざいアイスクリームを詩子と司に薦めたら、二人とも食べてのたうち回っていた記憶がある。

個人的には今でもあのアイスクリームはおいしいと思つてゐるのだが、どうにも詩子には受けが悪い。

「ひどい目に遭つたんだよねえ。おなかこわして。あたしと……あれ？ あの時、あたし達、二人でアイス食べに行つたんだつけ……」

詩子が声をひそめ、考え込んでいると浩平が缶を持って走ってきた。

「ああっ、柚木っ。茜のワッフル取つたな」

「茜がくれたんだよ。でも、お茶も飲もつと」

詩子は考え込むのをやめて、浩平から烏龍茶の缶を受け取つた。

茜も差し出される缶を、ありがとう、と言つて受け取つたのだった。



僕達は理想のトライアングルだつたはずだつた。

二人と一緒に子供みたいな日々を送つていれば、ぼくは確かにこんな辛い思いをしていなかつたかもしぬれない。

そんなことは解つていた。

そしてそれは詩子にも茜にも非は全くないことなんだ。

でも、僕は選んでしまった。

詩子も茜も存在しない、紗江子先生と僕だけの空間。

遠くにかすむ茜の泣き顔。

泣いた顔を見たのは初めてだつた。

それでも、僕は茜から視線をそらす。

紗江子先生と世界。片方を引き換えにしてもう片方が手に入るなら、僕は決して迷わない。選択肢なんか最初からひとつだ。

あの、雨の空き地が薄れてゆく。

そして、気が付くと雨は桜吹雪に変わつていた。

どれだけ吹き飛ばされても決して減らない桜の花びら。

僕はそれでも進む。

紗江子先生が笑顔で手を振る中学校の校庭に向かつて。

もう茜の姿は見えなかつた。

それは僕が世界を捨ててしまつたということと同じ意味だつた。



人間は無意識のうちに、自分に向けられている視線を認識しているものだ。

それが、だんだん減つてゆくのに茜は最初気付いていなかつた。

茜と浩平との間に流れるあたたかな時間は、他人の視線が減つたことにわざわざ構う気がなくなるほどに幸せだつたのだ。

「たまには中庭で弁当を食わないか?」

浩平が照れたように切り出してきた時、空は曇り、雨が降つてきそうな天氣だつた。おまけに天候が逆戻りしてとても初春とは思えなかつた。

「……嫌です」

「どうして?」

「寒いから嫌です。それに雨が降りそうですし」

「大丈夫だつて。きっとすぐに晴れるから。それに三月なんだから寒くないって」

力説する浩平に茜はかすかに笑んだ。

「性格が詩子に似てきました」

「あいつと一緒にされるのだけは嫌だっ」

「多分、詩子も同じことを言います」

茜はランチボックスを持って立ち上がった。

「……行こ」

茜はランチボックスを、浩平は相変わらず菓子パンをぶら下げ、下駄箱のところまで歩く。ますます雲の色は濃くなっているようだった。

「本当に寒くないですか？」

「本当だつて」

校庭に出ると季節外れの寒波は、茜の体をきしませた。

浩平がぼうっとした表情で、あさつての方を見ているのに茜は気付いた。特に強い感情が現れている訳でもないのに、ひどく悲しそうに見える表情。

茜が見上げているのにも気付かない。

「嘘つき」

びくり、と浩平の体が震えた。そして振り返る。

「……どうした？」

浩平が泣きそうに見えたのは茜の気のせいだろうか。

「寒いです。それに、雨が降ってきそうですね」

「そうだな」

浩平が空に眼をやる。一度だけ、軽い溜息をつく。

「降り始める前に食べるか」

「……はい」

どんよりと曇った空の下で、茜と浩平は昼食をとり始める。

ランチボックスを開けて鶏のハーブ焼きをつまんでいる茜のことを、浩平がじつと見ている。茜は顔を上げた。

「何?」

「久しぶりだな、と思つて」

中庭でやせ我慢をしながら中庭で浩平と弁当を食べた頃から、ふたりの関係はずいぶん変わった。

「去年ですから」

「そうだよなあ」

感慨深げに菓子パンをかじる浩平を見ていた茜は、自分の腕に鳥肌が立っているのに気が付いた。

「……浩平、やつぱり寒いです」

「食べればあつたかくなるつて」

「やつぱり詩子に……」

「ううう、縁起でもない」

「呼んだ？」

突然背後から詩子の声が響く。またスクーラーで昼だけ顔を出しに来たのだろう。しかし、それを抜きにしても神出鬼没である。

「ね、呼んだ？」

詩子がにつこりと害意のない笑みを浮かべる。

「安心しろ。誰も呼んでない」

「……え？」

詩子が不自然な形で黙り込む。

その、不思議そうな、いぶかしげな表情に茜は見憶えがあつた。

茜が体験した一番悲しい記憶の冒頭。

「どうした、柚木」

普段と応対の違う詩子に浩平が戸惑った声を出す。茜は見ていたれなかつた。

『それ』が何なのか詩子以上に知っていたからだ。

「この人、茜の……知り合い？」

それは司がかけられたのと全く同じ言葉だった。しかし、かけられた相手に与えた影響は正反対と言つてもよかつた。その瞬間、司はどこか安心したような、自嘲を感じる穏やかな笑みを浮かべたままだつたが、浩平のその顔は突き付けられたくなかつた一番辛いものを見たかのような、ひどく痛そうな顔になる。

「何ふざけてるんだつ、柚木つ！」

斬られた痛みに叫ぶように、浩平が詩子を責める。

そこで詩子は我に返つた。

「え……あ、お、折原君？」

「当たり前だろ！ 俺が他の誰に見える」

詩子は心細そうな声をたてる。

「そう、だよね……。どうしたんだろ、あたし……今、折原君のこと」

その後も口籠もつて何事かを呟いている。茜は詩子の唇の動きから眼をそらし、空を見

上げた。

「……雨」

アスファルトに小さなコイン大の黒い水玉が記される。

詩子も顔を上げて手をかざしている。その掌にぽつん、と雨粒が落ちる。それをきつか
けに乱れた水玉模様はたちまち増殖する。

「さつきまではいいお天気だったのに」

「仕方ない。校舎に戻るか」

詩子と浩平の足音が遠ざかってゆく。しかし茜はその場から離れられなかつた。

詩子の唇の動きがいつまでもいつまでも繰り返される。

『あたし……今、折原君のこと、誰でもない人みたいに思っちゃつた……』

その言葉があまりにも重い。

降ってきた雨が、茜の肌を突き刺してゆく。

「……どうした、茜」

多分茜が来ないので心配して戻ってきたのだろう浩平が、茜の側に立つ。

どうしても最愛の人の顔を見ることができなかつた。

浩平は司とは違う。茜を愛してくれているのだ。司の身に起こったことが自分に起こる
と知つたら、こちらの世界に何も残されていないと思つていた司よりも、ずっと引き裂か
れるような思いを味わうことになるはずだ。

詩子の言葉でショックを受けた様子から言つても、それは確實だろう。とても言えなかつた。

「……なんでも、ないです」

誰が聞いても嘘としか思えない言い逃れを口にするしかなかつた。

それから茜は浩平と自分にどれだけ、どんな視線が向けられているのか気にするようになつた。もちろん、注目のカップルになりたいなどという能天気な理由ではなく、浩平が学校の人間にどのくらい『痕跡』を残しているかを知りたかつたのだ。

少なくとも茜の方は浩平と同じ状態にはなつていないのでから、前から浩平とつきあつていた茜を憶えていれば、自ずとふたりの関係、浩平のことにつながつてゆく。

とりあえずふたりでいられる時にはふたりでいる。ただし、人前から決して姿を消さないよう努力した。

浩平をひとりにしないようにしなければならない。

しかし授業で浩平が当たられないようになり、特に浩平と親しくない生徒の視線が浩平にからまる時間が減つてゆく。そして、浩平が体育の授業をさぼるようになった。

時折、クラスメートが浩平と眼が合うと、ひどく不思議そうな顔になる。何故知らない

生徒が教室にいるのか。それをいぶかしむ表情だった。

多分浩平自身も薄れてゆく自分の気配が怖くて仕方がないのだ、というのが態度の端々に見えていた。それを茜に気取られないよう涙ぐましい努力をしている。

茜もまた、浩平のそんな態度に気付かないようにふるまつていた。

普段なら誰かにそのわざとらしい茶番を指摘されるだろう。しかし茜達の、正確に言えば浩平のことに対する人間は誰もいなくなつていつた。

世界の全てが朱色のゼリーに包まれたような夕焼けだった。

雲も、立ち並ぶビル群も、アスファルトも樹々も、歩く人々も全て、その巨大なゼリーの中の住人であるかのような錯覚さえ抱いてしまう。

茜と浩平もまたそのゼリーの中を歩く。

「綺麗な景色だなあ」

のどかな口調で浩平が感想を漏らす。

「綺麗なだけですか？」

あまりにも美しすぎる景色は、見てると悲しくなることがある。茜にはこの夕陽がひどく悲しいもののように感じた。

しかし浩平は別の感想を抱いたらしい。

「綺麗で、うまそうだ」

茜はにつこりと微笑む。

「綿菓子みたいだから？」

「……ああ」

わあん、と耳鳴りが響く。

浩平の声が遠くなつてゆく。

（……聴こえない）

浩平が何気なく喋つてゐる言葉が耳に届かない。視界が全て朱色を中心としたグラデー
ションに変わつてゆこうとする。

側にいるのに浩平が、うすつぺらなテレビの映像のよう見えてくる。
そして、浩平の眼に茜が映らなくなつた。

（嫌）

茜は見たような気がした。

浩平の体を後ろから抱く、小さな子供の手を。

どれだけ時間がたつたのだろう。

茜は浩平の側に普通に立っていたらしい。浩平が最初とは違う、やや低い声で問い合わせてくる。

「なあ、茜。俺がどこかへ行ってしまったらどうする?」

あの手の持ち主と一緒に? そう問い合わせたくなる自分を抑える。

「……嫌です」

「そうか」

「はい」

浩平はひどく疲れたように笑った。

道路の信号が点滅して人が歩き出した。茜達も歩道に足を進める。

「綺麗な夕焼けだよなあ」

「本当に綿飴みたい」

「綿飴か。懐かしいな」

「今度私が作りますよ」

確かに父が昔買つてきて、時々町内会の出し物に使つてゐる綿飴を作る機械がまだ物置にあつたはずだ。茜もふわふわ吹き出る砂糖の糸を巻く作業が楽しくて、何度もやらせてもらつたはずだ。

らったことがある。

「作れるのか？」

「見よう見まねですけど」

「そうか。ならできるだけ早い方がいいな」

浩平が空に浮かぶ朱鷺色の雲を見上げて立ち止まる。

「できるだけ早い方が……」

無表情な浩平の頬を光るものが濡らしてゆく。

それは多分手の主と関係のある話なのだ。茜は確信していた。浩平を『どこか』へ誘おうとしているのはその人物だ、と言えるかもしれない。

ただし、それは実際にその人物が浩平を『どこか』へ連れて行く、ということとは直結しないような気がした。浩平の言っている意味が、最後に司と別れた時に起こったことと一致するならだ。

まだ茜には解らないことだらけだった。

再び信号が点滅して、歩行者用の信号が赤に変わろうとする。

「……消えますよ」

びくん、と浩平の体が大きく揺れる。

「……ああ、そうだな」

浩平が笑いを作つてみせる。しかしそれはひどく痛々しい笑みだった。

数日後、とうとうその日が来てしまった。

担任が出席を取るときに浩平の名前を飛ばして呼んだ。それをクラスの誰も不思議に思つていなかつた。幼なじみの長森瑞佳や、仲良くつるんでいた住井護すみい まわるを含めてだ。浩平の前の席に座つている七瀬留美もプリントを配られた時に、空いた席の主の為に取つておかげで教壇まで返しに行く。

そして、浩平は登校していなかつた。

茜は不安なまま授業の間椅子に座り続ける拷問に耐えた。そして一時間目の休み時間が来ると、瑞佳の席まで走つた。

「どうしたの？ 里村さん」

普段特に親しくしていらない茜が血相を変えてやつてきたことに対し、不思議そうにしながらもにつこりと笑んでみせる。

浩平の、世話焼きの幼なじみ。

「……浩平はどうしたんですか？」

「え、つと……」

軽く眩暈をこらえるような表情を浮かべ、それから申し訳なさそうに口を開く。
「ごめんね。里村さん、わたしは浩平ってひとは知らないんだけど。あっ、でも、思い出
すかもしけないから詳しく述べてくれる?」

小学校からのつきあいの瑞佳にも浩平の記憶は残っていないのだ。

茜は悲しそうに首を振った。

「……ごめんなさい。長森さんの知り合いと間違えてました」

軽く会釈してから、茜は教室を飛び出した。

公衆電話は校内に二台ある。一台は購買の隅に、もう一台は職員の通用門の脇にあつた。
今の時間なら購買のところでかけていては目立ってしまう。

茜は通用門の方へ走った。

乱暴に浩平の家のナンバーを押す。10回コールしても浩平は出なかつた。

もう、司のようにいなくなつてゐるのではないかという恐怖が茜の心に湧いてくる。そ
れでも茜は受話器を置こうとはしなかつた。

50回を超えた頃、やつと受話器が上がる音がする。

「……はい」

どこか用心しているような低い声で浩平本人が出る。

「浩平、今日はどうしたんですか」

泣き笑いのような溜息が受話器の向こうから聴こえる。

『……なんだ、茜。わざわざ心配して電話してくれたのか?』

『はい』

『今、どこから電話してるんだ?』

『学校です。通用門のところの公衆電話』

『わざわざ電話してもらつて悪いけど、今日休んだのはただの風邪だから。熱もないし、咳も出ないし、食欲はちょっとないけど、大したことじゃないから心配しないで授業に戻つてくれ』

たたみかけるように浩平が言い訳を紡ぎ、急いで電話を切ろうとする。

『まだ用件があります』

『……何だ?』

浩平の声は明らかに脅えていた。

『デート、しませんか』

『茜から誘つてくれるとは珍しいな。解つた。じゃあ、次の日曜……』

「今からです」

さすがに浩平も驚いたらしい。

『今からって……茜は学校だろ?』

「早退します」

『それ以前に病人を誘うなよ』

「大丈夫です。仮病ですから」

浩平の言葉は途切れた。茜は尚も続ける。

「仮病なんでしょう?」

大きな溜息と共に言葉がこぼれ出る。

『よく解ったな』

「……はい」

その痛々しい声を聴いていれば、茜に逢いたくなかったのが別の理由だとすぐ解る。

『それで、本当に早退するつもりなのか?』

「はい」

『じゃあ、思う存分デートしよう。で、待ち合わせ場所だけど』

『あの公園がいいです』

『解った。じゃあ、今からあの公園で集合な』

「は……」

ぶつぶつと電話が切れた。硬貨が切れたのだ。入れ直そうと思ったが、財布には丁度細かいお金がなかつた。今から両替するよりそのまま直行した方が早い。

茜は鞄を取りに一度教室へ戻つた。

第8章 約束

『これから、デートしないか』

真剣な眼をして告げた浩平が雨に打たれてこの公園で待っていた時も、茜はこうしてピンクの傘を差してやつてきた。

しかし、前とは違ひ浩平は傘を差しているし、茜もずぶ濡れではない。互いが互いを思つていると知っている。それが違つていた。

茜は浩平の横顔を遠くから眺めていると、やがて浩平が茜に気付く。

「よお、さぼり」

「……仮病よりましです」

「似たようなものだろ？」

「……はい」

茜はうつむいた。

浩平の消耗した姿を見るのは辛かつた。しかし、ある意味で茜は嬉しかった。浩平が苦しんでいるのは、ひとえに茜がいる世界を大事にしてくれているからだ。あつさりと世界から消えてゆくことに同意して、自分の意志で茜を含む他の人間達を切り捨てていった司とは違う。

浩平にはこの世界に留まつてほしかつた。

「さて、どこへ行こうか」

「商店街がいいです」

「そうだな……あそだつたら店に入つて雨宿りもできるしな。何かうまいものでも食おうか」

「……はい」

もしかしたら自分は無駄な努力をしているのかもしれない。

あの時垣間見た気がした子供の腕に引かれて、浩平は今にも司と同じように消えてしまうのかもしれない。

それでも信じたかった。

浩平がいつまでも側にいてくれることを。

雨の商店街は、いつもとはうつて変わつて廃虚じみて見えた。

灰色の透明なフィルターがかかっているかのようにくすんで見える。

「何を食べたい？ ハンバーガーでも食おうか」

浩平は新しい春のメニューが貼り出してあるハンバーガーショップを指差した。しかし、この時間帯に制服のまま店内で食事をするのはまずいだろう。

「この格好ですから嫌です」

「じゃあ、俺が買つてくるから茜はどこかで待つてくれ」

「なら、山葉堂がいいです」

ハンバーガーショップとは反対の方向を指差してみせる。

「ワッフルだけだとお腹空くぞ。今日はこれから遊び倒す予定なんだから」

「……大丈夫です。ワッフルは好きですか？」

もともと茜の胃は小さい。それに今は胸がいっぱいとても一人前の食事はできなさそうだった。浩平は軽くうなずいた。

「じゃあ、茜は何にする？」

「浩平の家で食べたのと同じのがいいです」

初めて結ばれた時に食べた、甘くて幸せな記憶に繋がるワッフル。浩平にはどうやら不評だつたらしいが、茜はその思い出にしがみつきたかった。

茜の心をよそに浩平は一瞬ひきつった。

「またあれを食べるのか……？」

「おいしいです」

「じゃあ、俺はチョコレートにしとくよ」

「……おいしいんですけど」

やはり浩平にはおいしく感じなかつたのか。茜はうつむいた。

「あれはまた今度食べるから」

うろたえた浩平がそう言つた。

「はい、約束です」

浩平は茜を店のひとつ屋根の下で待たせて、走つて山葉堂まで向かつた。

思つたよりもずっと早く浩平が袋をぶら提げて走つてくる。

「ただいまっ。早かつただろ」

「……お帰りなさい」

軽く息をはずませ、浩平は山葉堂のロゴが入つたクラフト袋を見せた。

「誰も並んでなかつたよ」

浩平が指差した方向には誰一人歩いていなかつた。人気の山葉堂にひとりも客が並んでいないところを一度も見たことがなかつた。

「問題はどこで食べるかだけど」

「……このままでいいです」

商店街にはベンチもなく、他に座れるスペースが用意されている訳ではない。しかし、

どこかへ移動してしまうと、雨の中を商店街まで戻つてくるのも面倒だ。

それに、どこかへ一旦移動して落ち着いている余裕は茜にはなかつた。

「それなら、歩きながら食べようか」

「……はい」

浩平が自分のチョコレートワッフルを取り出してから、袋を茜に渡した。その中には練乳蜂蜜ワッフルが入つてゐる。

茜は何となく浩平を困らせてみたくなつた。

「どうした？ ちゃんと頼まれたやつだろ？」

「交換しませんか？」

につこり笑つてそう言つた瞬間、まるでぴきつゝ音をたてたような感じで浩平の動きが止まつた。

「おいしいから食べて下さい」

硬直している浩平からチョコレートワッフルを奪い取り、代わりに自分が持つてゐる袋を渡した。浩平はよほどショックなのか呆然と袋の中身を睨んでゐる。

「……嘘だろ」

「おいしいです」

「……確かに、まづくはないけど」

根負けした浩平が大きな溜息をついた。困った浩平の表情も好きだと思った。好かれている、と思える、ささやかなわがままを浩平が受け入れてくれる瞬間。そんなものにすがりたかった。

浩平はしばらく言い逃れを試みたが、結局はワッフルにかじりついた。一口食べて何とも言えない呻き声をあげている。

「これ、全部食わないと駄目か?」

「……はい」

「これひとつの方がそこのデコレーションケーキ一個より甘いんじゃない?」

ちょうど側を通りがかったケーキ屋の店頭に、キャンドルを飾り付けたデコレーションケーキが陳列してある。細かなデコレーションが花などをモチーフにした、大人っぽいと思えるデザインだが、花が上から散らされているようなデコレーションケーキはやはり愛らしく見える。

「いかにも誕生日用つて感じだな」

「可愛いです」

「でも、高いんだろうな。きっと」

例のブツは駄目でも基本的には甘党の浩平は、そのケーキを食べたそうな眼で見る。

「……浩平はいつですか？誕生日」

茜が訊くと、浩平が心許なさそうな声で返事をする。

「ええと、確か3月24日だったかな」

「すぐじゃないですか」

茜は責めるような口調になつた。

多分浩平はその誕生日が来るまでこの世界にはいてくれない。司が茜を除く全員に忘れられてからこの世界から消えてしまうまで、だいたい2日だった。

今日は3月20日。あと4日間、浩平はいてくれるのだろうか。

本当ならもつと前からプレゼントも用意したかった。浩平が好きなケーキを焼いて、誕生日を祝いたかった。しかしそれには時間が間に合わない。

希薄になつてゆく浩平の気配が茜をひどく絶望させた。

それ以上に、消えてゆくことを悲しんでいる浩平に何と言葉をかけたらいいのか解らなくなつてしまふ。

「ちょっと、ここで待つていて下さい。すぐに戻りますから」

「……ああ」

「その間に、全部食べていて下さい」

このままだと泣いてしまいそうだった。

茜は小走りで浩平の側を離れた。

自分が好きになつたひとは消えていってしまう。

司も、浩平も。

雨の中を立ち尽くしながら、茜は思つた。

いなくなつた司の影に呪縛されていた茜を助けてくれたはずの浩平が、何故司と同じよう

うに消えていってしまうのだろう。

司が消えてしまつた場所に、浩平も行くのだろうか。

二人は出逢うのだろうか。

(多分、逢わない……)

南条先生が原因で心を閉ざしていた司。多分、小さな頃に妹が死んだことが傷となつて
いるのだろう浩平。彼らの行くところが同じ場所だとは思えなかつた。

(みさおさん)

生きていれば溌くらゐの年齢だろうか。彼女の幻が今もまだ浩平のことを探らえている

のだろうか。

しかし茜はそこで違和感を抱いた。浩平の場合、司とは明らかに違う点がある。

浩平は茜を好きでいてくれるのだ。大切に思つていてくれるのだ。それだからこそ詩子が浩平を忘れかけた時に、あれほど傷付いたのだろうと思う。

司の時とは違う。違うはずだと信じたかった。

しかし、何がどう違うのか茜にはまだ解らなかつた。

不安そうな表情で、浩平の側にも戻れないまま、ただ立ち尽くして迷い続けていた。

どれだけの時間がたつたのか解らない。

遠くから水たまりを蹴りながら走つてくる足音が近付いてくる。茜は顔を上げるとその足音の主を見つめた。

最愛のひと。どこかへ消えてゆこうとするひとは何故か傘も持たず、ずぶ濡れになつて茜の名を叫んだ。

その気配は今にも消えてしまいそうに希薄だつた。

「……あか、ね……」

茜が黙つていると、もう一度、今度はひどく脅えたような声で呟く。

自分がどれだけ頑張つても、このひとをとどめておくことはできないのか。茜の眼に色濃い絶望が浮かぶ。

しかしそれは、浩平には違うものとして映つたらしい。浩平は後ろを向いて立ち去ろうとする。肩越しに消えそうな眩きが漏れた。

「……いや、悪い。人違いだった。知り合いと同じ傘だつたんだ。それで、間違えて……すまなかつた」

悲しすぎる言葉だつた。

何故、「俺が思い出せないのか茜っ！」と叫んでくれないのか。どうしてそんな簡単に諦めてしまえるのか。

自分勝手な考え方だと解つてゐる。それでもそう言つてほしかつた。

「合つてます」

浩平が振り返つた。

「茜、俺のこと……」

「折原浩平」

「……あ、ああ。正解だ」

泣き笑いに近い、独特の表情になる。

しばらくふたりは何も言えず、互いに見つめ合っていた。

「どうして、あんなこと言つたんですか」

「あんなこと」

「人違ひ」

茜は浩平を見つめた。

わずかに瞳の色がゆらぎ、浩平が口籠もる。

「いや、あれは……」

茜は悲しそうに眼を伏せた。

「……私が、あなたのことを忘れたと思つたから?」

浩平の眼が大きく見開かれた。

茜は黙つて浩平を見上げた。ただ、道路に雨が打ち付ける音だけが響き続ける。雨の向こうに脅えた眼をした浩平が立っている。

「……少し、歩きませんか?」

一言絞り出すと、茜は歩き出した。

そこは、かつて茜が待ち続けていた時とは微妙に変わっていた。

立ち枯れていた草の間から、やわらかな緑色が覗いている。雨でくすんだ視界からでもその命の色は窺い知れた。

しかし、茜には春の訪れを楽しんでいられる状態ではなかつた。
「もう、この場所に来ることはないと思っていたのに……」

濡れた草をかき分け、茜は空き地に入り込む。

司を待ち続けた場所。浩平と初めて出逢つた場所。司と同じように消えてゆこうとする浩平に茜は問いかけた。

「……この世界は嫌い？　この日常はあなたにとつて意味のないものなんですか？」

世界の何も、南条先生の不在を埋めることができなかつた司に問いかければ、必ず『そうだよ』と返つてくるだろう。

浩平からは否定の言葉は出なかつた。枯れたような声で一言呟く。

「……どうして」

「あなたも、同じだから。この場所で私を置いて消えた司と一緒になんですね」

「消えた、つて……」

その言葉が意味するところを知つて浩平は愕然とした。茜はそれに構わず言葉を続けてゆく。

「私は幸せでした。退屈で変わり映えしなくて、穏やかな日常が幸せだった。側にはいつも幼なじみがいたから。私と詩子と司。いつも口喧嘩して、クリスマスパーティを三人で開いて……一緒にいることが当たり前で、それがずっと続していくんだと思つています」

「……俺と長森みたいなもんだな」

茜はわずかにうなずいてみせた。

「私は幸せだったから、だから……一緒にいる司も幸せなんだとばかり思つてた。永遠にこの幸せが続くんだと」

一緒に騒いでいた時、司は確かに楽しそうに見えたのだ。

「最初に詩子が司のことを忘れて、クラスメートがあの人を憶えていなくなつて、気が付いたら司を憶えていたのは私だけでした」

今の浩平と全く同じ道を辿った司。

雨の中を空気に溶けるように消えていった司。

「今日と同じ雨の日、今日と同じ場所で……私の眼の前で司は消えたんです。私は消えてゆく司に何もできなかつた。ただ呆然と立つてゐるだけ。何が起こったのかも解らないまま、泣くことしかできなかつた」

「……」

浩平は茜をただ、見つめていた。何かを言つてくれることもなく、食い入るように茜の言葉に耳を傾けていた。

「司が消えると同時に、私の中からも司の存在が薄らいでゆくのが解るんです。あの人を繋ぎ止めたくて、司の思い出を何度も繰り返し思い出して。誰よりも近くにいたのに、ずっと一緒に時間を過ごしてきたのに……つ、その人の顔が思い出せなくなる」

消えてゆこうとする記憶にしがみついていた頃、茜は眠る前に司のことと思い出して夢に見ようと、何度も読んだ絵本をひも解くように司のいる記憶を回想し続けた。

「朝起きると司のことを忘れていそうで、忘れたことさえ忘れていそうで、それが怖くて。私が憶えてさえいればきっと司は帰つて来ると信じて……それで、私は憶えていることができた。今だつて司の思い出をあなたに話せます」

幼稚園児の頃のささやかな思い出も、初めて手作りのクリスマスケーキを作つてあげたことも、何もかもが胸の奥に残っている。

「なのに、司は帰つて来なかつた」

憶えていようということ自体が無駄だったのだ。

どれだけ茜が思つても司は姿を現すこともなく、茜以外の誰も司を思い出さない。帰つ

てこない人を待ち続けて、茜は閉ざされていたのだ。

浩平が救つてくれるまで。

その浩平もまた、消えてゆこうとしている。まるで茜の思いが全て無益だつたんだよ、と囁かれているように。

茜は白く冷たい息と一緒に言葉をつなげた。

「だから……!! あなたを忘れます。名前も、顔も、声も、温もりも……思い出も、全部、忘れます」

浩平は痛ましそうに茜を見た。茜はその表情を決して視界に入れないようにきつく瞼を閉じた。

「そうすれば、こんなところで馬鹿みたいに突つ立つていることもないだろうから。わずかな希望にすがることも、また……悲しい出逢いをすることもないだろうから」

涙のせいで声がまともに通らない。

「……さようなら、本当に……本当に好きだった人」

頬を伝う涙を浩平に見られたくなかつた。

忘れてしまわなければいけないのだ。茜は浩平の脇を通り過ぎて小走りに空き地を抜け出した。後ろで浩平が草を踏む音が聴こえる。

しかし、その足音は茜から遠ざかっていった。

雨音に紛れて消えてゆく足音の向こうに、聴こえるか聴こえないかの声が耳に届く。

「……ごめんな」

それが謝罪の言葉だということにさえ、茜は傷付いていた。

角を曲がり、浩平の気配が途絶えてから、茜は立ち止ると、溢れてくる涙を遮ろうと瞼をきつく閉じて、雨の降る空を仰いだ。

雨に打たれてしまえば涙がこぼれていることなど誰にも解りはしない。
きっと、茜自身もいつかは解らなくなる。そう思いたかった。

忘れてしまおう。

浩平にもそう告げた。

記憶を分かち合う相手も存在しない。茜が忘れてしまいさえすれば、誰も茜に浩平のこと話を題に出しはしないのだ。

簡単なことのはずだ。

(なのに、どうして……)

浩平のことが心の一番やわらかな場所から消えてゆかない。

司のことで充分苦しんできたはずだった。もう一度同じことを繰り返すほど自分は愚かなのか。

心の中で自分を詰問する。

司のことを吹つ切るまで、自分がどれだけ苦しんだのか自分がよく知っている。心の痛みの記憶を明確に再現できるほどだ。

それなのに。

(……浩平)

食べられなかつた鯛焼き。クリスマス前に高くて買えなかつたぬいぐるみ。綿菓子を作つてあげる約束。誕生日のケーキ。プレゼント。

そんなことばかりが頭の中を繰り返し流れてゆく。

(浩平……)

浩平の姿が思い浮かぶのを消そと、激しく首を振つた。

忘れよう。

忘れられなくても、いつか司の時と同じように吹つ切れる。それまで、涙をこらえて忘れた振りをし続けよう。

その努力がいつ実るか解りはしないけれども。

皮肉なことにその日もまた雨が降っていた。

浩平の、17歳の誕生日。

ベッドから起き、茜は憂鬱そうに窓を見る。激しくなつたりはしない、ずっと同じ音を奏で続ける雨。茜は溜息をついた。

サイドテーブルには、丁寧にラッピングされた箱がひとつ乗っている。
誰にも渡す予定のないプレゼント。

(もう、この世界にはいないかも知れない)

浩平と最後に別れてから、茜は商店街で見かけたシンプルな目覚まし時計を買ってしまつた。もちろん、自分の部屋の目覚し時計はどこも故障していない。

『プレゼントですから、包装をお願いします』

そう付け加えてしまつていた。

服を着て、髪を整えると、その箱だけを持つて部屋を出た。

身支度だけすると、茜は朝食をとらないで家を出て行つた。

(忘れたはずでしょう?)

何度も自分自身に言い聞かせる。それでも、歩くスピードは変わらなかつた。

第一、もう既に浩平がいなくなつてゐる可能性の方が大きいのだ。それなら茜はあの空き地で自分の恋に決着を付ける為に、馬鹿な真似でもいいから立ち尽くしていればいい。その馬鹿馬鹿しさを自分で痛感すれば、忘れることにためらいはなくなるはずだ。

きつと辛くはない。

そう信じようとしていたのに。

空き地に立つ茜が見たのは、泥だらけで雨に打たれる浩平がやつてくるところだったのだ。

「……こんなところで何やつてるんだ？」

「……誰？」

茜は顔をそむけた。

知らない人のはずだつた。なのに、どうして涙が出てくるのだろう。

「クラスメートの名前くらい憶えとけよ。同じクラスの折原だ」

初めて逢つた時とは違う、ひどくやさしい声で浩平は囁いた。

そうしておずおずと近付いてくる。

「知らないっ！」

茜は浩平の全てをはねのけるように叫んだ。

「私に、何の用ですか……用がないのなら……」

顔から表情を消そうとし、感情を押し殺そうと必死で努力する。ボロが出ないうちに自分が前から立ち去つてほしかった。

泣いてしまつたら、もうおしまいなのだ。溢れ出た感情は心の堰を切り、茜の心を壊してゆくのだから。

浩平は痛々しくてたまらない最愛の少女の為に自分も他人の振りをしようとする。

「解つた……また人違ひだつたみたいだ。たまたま知つてゐる奴と似てたんだ。悪かつた……じゃあな」

浩平が茜の側から離れ、歩き去ろうとする。

もう二度と会うことのない浩平の草を踏む足音がひどく大きく感じる。

「……待つて」

浩平は立ち止まつた。決して振り返つてはくれない。茜の為に、あえて自分の顔を見せないようにしているのだと痛いほど解る。

「……話、しませんか」

「……話？」

背中越しに、低く問い合わせられる。

「もし、時間があるのなら……ほんの少しでも時間があるのなら、私の話に……つきあつていただけませんか」

いなくなるまでに、この世界から消えるまでに一分でも残つてはいるのなら。側にいれば辛くなるだけなのに、茜はそう切り出していた。

「見ず知らずの俺でいいのか？」

「……はい」

「いついなくなるか解らないけど、それでもいいのなら」

浩平は茜の側に戻つてくれた。

茜は浩平にピンクの傘を差し出す。やはり身長差があるので背伸びして迎えようとすると茜から、浩平は俺が持とうか、と傘を受け取つた。

空き地の真ん中で、背中合わせのふたりは、わずかな衣擦れと伝わつてくる体温から、互いのことを感じていた。

「ありがとうございます。私のわがままにつきあつていただいて」

形だけは他人の振りをしながら話す。

「それで、何の話をしようか」

「……クラスメートの話です。大嫌いな、クラスメートの」

「そうか……」

「わがままで、嘘つきで……自分勝手で子供っぽくて、人の気持ちなんて何も考えなくて……それなのに、どうして好きになっちゃったんでしょうね」

浩平の呼吸する気配がする。

「でも、もうその人はいません。二度と逢えません……解つてると、理解しきっているはずなのに、それでも大好きで……どうしようもなく好きで、それで、こんなところに立つてて。余計に悲しくなつて」

濡れた布地から浩平の温かさが、触感が伝わってくる。

このまま浩平に何も考えずにもたれかかっていける頃に戻りたかった。

「渡したいものもあつたんですけど」

「渡したい物？」

「今日、その人の誕生日なんです」

「……そうなのか」

その相槌に軽い驚きが混ざっている。どうやら自分の誕生日も失念していたらしい。

「ちゃんと、プレゼントも用意したんです」

「……それは、いつもきっと喜ぶな」

「……はい。でも、渡せなかつた」

茜の声が落ちた。

「気持ちだけでも嬉しいもんだ」

「でも、せつからく買ったのにもつたひないです……だから、これ。あなたにあげます」

浩平が息を呑んだ。

「……いいのか、俺で」

「はい、話を聴いてもらつたお礼です」

しばらく浩平が沈黙していた。

「そういうことなら、遠慮なくもらうよ」

茜は後ろ手に雨でぐしょぐしょになつたプレゼントの箱を渡した。それを受け取つてくれた時に傘がずれ、少しの間雨が茜を濡らす。

「今、開けてもいいのか……？」

「……はい」

後ろからリボンをほどくしゆるつという音や、濡れた紙をはがしてゆくぐもつた音が響いた。

「できれば食ひ物だといいな。実はここ数日ろくに食つてないんだ」

つまりそれは、あの家に住む由起子の記憶からも浩平が消えたということだ。食べ物も食べられない状態であるというのが、ひどく哀れだった。

「……食べられないこともないです。ちょっと硬いですけど」

「まあ、歯は丈夫な方だと思うけど」

ボール紙の箱を開けているらしい。そして目標物を手に取った気配がした。

「確かにこれはちょっと硬いかもしれないな。これ、本当に食べられるのか？」

「……無理すれば」

「超人的に無理をしないと駄目だな。食べていいのか？」

「できれば、食べないで下さい」

目覚まし時計が壊れた浩平の為に、茜が選んだ時計。浩平と一緒に時を刻んでいきたい
と思いながら選んだのだ。

「こんないい物をもらつたんだから、何かお返しをしないとなあ」

「お返しなんかいいです」

物をもらいたい訳ではなかった。それでも、その為にもう一度浩平が自分の許に現れる
約束を交わしてくれようとするのが嬉しかった。

それが叶わない約束だととしても。

「……でも、どうしてもと言うなら受け取ります」

「解った。それなら君の誕生日に何かプレゼントする。誕生日、いつだ？」

「私の誕生日は……」

その時。

背中の、温もりが消えた。

「……浩平？」

風に煽られてピンクの傘がふわりと落ちる。

草叢にボール箱が落ち、中で金属質な音をたてる。

「……いや、どうして……どうしてつ……!! どうして私を置いてゆくんですか……どうして、ひとりぼっちにするんですか」

途中まで交わされた約束の温かさが、浩平の不在を余計に辛く感じる。あの遠い雨の日も、こうして泣いた。前と変わらないはずだった。

しかし、そうではなかつた。

欲しくてたまらなかつた言葉を交わした分だけ。

愛する人の温もりを感じた分だけ。

そして、その人が自分を愛している分だけ。

涙は、ただ、とめどなく流れ続けた。

『それなら君の誕生日に何かプレゼントする。誕生日、いつだ?』

甘やかな約束の日まで、それが叶わぬ夢であつたとしても、茜は待ち続ける。泣きながらも、茜は自分がそうすることを知っていた。

エピローグ

雨が降るたびに、茜は空き地に立ち尽くす。

この場所の、幼なじみの呪縛から茜を救ってくれた浩平を待ち続ける為に。それしか茜にできることはないと思つていた。

しかし、空き地は永遠に空き地のままでいるはずもなかつた。

大きな家を建てる為に、誰かがその土地を買ったのだ。迷惑そうな作業員に出て行つてくれと言われた茜は、浩平を待ち続ける場所さえなくなつたことで、世界もまた浩平の記憶を押し流そうとしているように思えた。

茜が、浩平を置いて茜だけが三年に進級して、ゴールデンウイークの前くらいに、詩子が写真を持ってきてくれた。

「すっかり現像するの忘れてたんだよねえ。ごめんね、茜」

全く悪びれない調子で渡された写真の中に、澪を中心として茜、詩子と3人で並んで写つていた。まだ舞台が終わつた後で頬の紅潮している衣装のままの澪。おどけたポーズをとる詩子。静かに立つ茜。

この写真を撮つた浩平だけがいなかつた。

「そう言えば、あたし誰にこの写真撮つてつて頼んだんだっけ」
軽く首を傾げる詩子に、茜は答えを返さなかつた。



『大丈夫だつて。絶対売れ残つて値下がりするから』

あの、50万円もする巨大な可愛いぬいぐるみは、浩平の予言通り反比例のグラフを見る
かのような値下がりを見せていた。

現在の値段は20万円。半分以下になつていた。

かなり安くなつたとは言え、まだまだ茜の手の届く値段ではない。

一度溜息をついてショーワインドウから立ち去ろうとした時。

「えーと、あなた……里村茜さん？」

商店街を歩いている時に、茜の側で車が停まり、誰かに声をかけられた。

ベリーショートに近いショートヘアに、かつちりとしたスースを着た女性だ。

「……あの、すみません。どなたでした？」

30代半ばくらいに見えるその女性に、全く心当たりがなかつた。

その女性はあはは、と軽く笑つた。

「よく考えればあなたは寝てたのよね。ごめんなさい。私、小坂由起子です。あなたが倒

れた時にちょっとお世話したのだけど

「……あつ、あなたが。その節はいろいろお世話をかけました」

言われてみるとくつきりとした眼や、顎のラインに浩平の面影がある。

「忙しくなければそのへんでお茶しない？」

「……はい」

誘われるままに浩平につながる人の車に乗った。

幹線道路に出て少し行つたところに、洒落た感じのティールームがある。その前に由起子の車は停まつた。

店にふたりで入り、窓際の、景色のいい場所に座つて、ゆっくりメニューを決める。

「あれからお礼に伺おうとは思つていたんですが、結局ご無沙汰してしまつて」

「いいのよ。具合の悪い時に、そんな気を回そうなんてしなくて」

そう言つた時に、由起子の表情が曇つた。

「……あの」

「ああ、ごめんなさいね。昔死んだ姪もね、そうやつてこらえちゃう子だつた。助からない病氣で手術して、それでも弱音を吐かない子だつた。遠くに住んでたけど、私が喪主をしたのよ。あの子の母……まあ、私の姉だけど、変な宗教団体に入つたまま戻つて来なか

つたから。旦那が死んだ後で娘が不治の病っていうんで、辛かつたんだろうけど」

そんな状況で浩平がどれだけ健気な妹を大事にしてきたかよく解る。

多分、それこそ死にも狂いで守ってきたのだ。死んでしまった父の代わりに、やさしい腕を祈りと引き換えてしまった母の代わりに、孤軍奮闘してきたのだ。

それだけの努力が妹の死で終わるのだとしたら、本人もまた幼い兄の心はそんな結末を認めようとはしないかもしれない。

妹がいない世界を認めなくとも不思議はなかつた。

子供が受け入れるにはあまりにも痛々しい事実だからだ。

丁寧に入れられ甘やかに香る紅茶と手の込んだケーキがふたりの前に置かれる。由起子は一口紅茶を含んだ。

「茜さん、高校3年生だつたつけ。みさおも……生きていれば高校2年になっていたのね……全然想像がつかないんだけど」

「お亡くなりになつた時、どなたが看取つていたんですか。お母さんがそんな状態だと、きっと最期についていたとは思えないんですけど」

ひとつつの仮説の下に、茜は訊いてみた。

「それは……あら？ 変ね、私……憶えてないわ。誰もついてないとか、医者に任せつ

きりだつた訳なんかないはずなのに……どうして」

浩平なのだ。

小さな妹を看取つたのは、子供の頃の浩平なのだ。

おいしいケーキを食べ、由起子との話は何となく世間話に流れた。

別れ際、名刺を渡される。

「よかつたらまた、ケーキでも食べに行きましょ。本当はお菓子を作るのって好きなんだけど、仕事が忙しくてね、どうしてもお店のケーキに頼っちゃうせいで詳しくなっちゃつたのよ」

「……はい」

自宅まで送つてもらい、由起子の車を見送つたまま立ち尽くす。

(みさおさんとふたりだけの世界)

茜は沈んだ様子で考え込んだ。

その幼い時ではなくこの年になつてから浩平が向こう側へ消えてしまつた理由は何なのだろうか。

司が南条先生の死から消えたのは彼女の死後数ヶ月。その間ずっと神経をすり減らし続けて、彼女が本当にいなくなつたということを思い知らされ、それを拒否したのだ。

浩平の場合はどうなのか。

その始まりは茜と一緒にいるようになつてからだと思う。しかし別に茜は大病を患つた訳でもなく、ましてや死んでもいない。それと、茜との関係を浩平も幸せに思つていたようだった。

もしかしたら幸せを根こそぎ奪われた経験を持つ浩平は、幸せだからこそ、来るとは限らない崩壊の音を聴いていたのかもしれない。この幸せをとどめておきたいという思いが、痛みを抱く前の世界を招き寄せたのかもしれない。しかし全ては想像でしかない。

季節は巡った。

浩平と初めて出逢つたのと同じ晩秋から、雪が乱れ吹き積もる冬へ。

そうして、卒業を間近に控えた初春。茜の誕生日。

茜は詩子と一緒に、定番の散歩コースとなつた公園でジュースを飲みながら語り合う。茜の手には詩子からもらつたプレゼントの包みがあつた。

「もうすぐ卒業だね。何だか茜のクラスって自分のクラスみたいで親近感があるから、別れるのが寂しいな。そう言えば澪ちゃん、元気にしてる?」

「……はい。詩子に逢えなくて寂しがつっていました」

「嘘でもそう言つてくれると嬉しいなあ」

「本当です。詩子にも舞台を見に来てほしいそうです」

今年もまた、澪は3月の舞台に立つ。今度は前回見たのと毛色が違う、せつない感じのSF仕立てのものらしい。

『見にきてね』とスケッチブックに書いてみせてくれた。

卒業式の後、その舞台に送られて高校を去る。浩平がいません。

詩子は感慨深そうに息をついた。

「そう言えばあいつも一緒に舞台を見たんだよね。ずいぶん長いこと顔を見てない気もするんだけど、どうしたのかな？」

「……あいつ？」

詩子が口に出すはずのない相手。

「初めて澪ちゃんの舞台を見た時に写真を撮ったよね。その時結局あいつの写真って撮れなくて、すっごく悔しがつてた。あいつ、いつもあたしに文句ばっか言ってたけど、あんな奴でもいないと寂しいもんだよね」

「……いないと、寂しい？」

浩平と子供じみた言い合いをしていた詩子は、につこり笑つて首を振つた。

「あたしは全然寂しくない」

「……私は、寂し」

そこで茜の言葉が不自然な形で途切れてしまう。

詩子は茜の顔を見てひどく狼狽した。

「ど、どうしたの茜っ」

茜の頬を止まらない涙が伝っていた。

でも泣きながらも、茜は微笑んでいた。

「……嬉しいから……約束を、守つてくれたから」

軽い足音がたつたつと近付いてくる。

「やつぱりねえ、あいつは噂をすれば現れるようなタイプだと思つてたのよ」

眼を丸くしながら詩子が自分にも当てはまりそうな感想を述べる。しかし茜には全くそれへ聽こえていなかつた。

側まで駆け寄ってきた浩平が、照れたような笑みを浮かべて口を開いた。

「……ただいま、茜」

「おかえりなさい」

茜は晴れやかな笑顔で浩平を迎えた。

ふたりですることはたくさんあつた。

しかし焦つて手を付ける必要など、どこにもない。ゆつくり、ひとつずつ頑張つていけばいいのだから。

雲ひとつない快晴の空の下、詩子と別れた後の茜と浩平は一緒に歩いていた。

「……確か、誕生日にお返しをもらえるんですね」

「そう言えばいつなんだ、茜の誕生日」

「今日です。これが詩子からもらったプレゼントです」

詩子にもらつた水玉のラッピングをした包みを見せる。

浩平は頭を抱えた。

「うわっ、何も用意してないぞ」

「大丈夫です。これからふたりで買いに行くんですから。欲しい物も決まつてます」

あのファンシーショップの店頭で店ざらし状態のまま、一年以上が過ぎたぬいぐるみは、とうとう最初の一割以下の値段、4万円に落ちていた。

大好きな人と一緒に歩いていられることが、待ち遠しかつた浩平の側を歩いていられることが、嬉しくてたまらなかつた。辛い思い出という名の鍵をかけられた世界から、茜の為に戻つてきてくれた浩平のことが愛しかつた。

隣に浩平がいてくれる幸せを育んで行けるように、ずっと一緒にいよう。
最愛の人と、どこまでも一緒に。

了

あとがき

こんばんは。

お元気ですか、館山緑です。

この2巻はちょうど『ONE～輝く季節へ～』のゲーム時間に入つてから発売されることになりました。ワタシも時々、今日は浩平君は誰と逢つてゐるのかなあ、なんて考えたりすることもあります。

今頃もう一度プレイしている人も多いのではないでしょうか。

今回の主人公は里村茜ちゃんです。

とっても、とっても難しい女の子でした。

ちょっと冷たそうに見えて、言葉少なくてつづけんどんなところもあって、でも、とっても素敵な女の子です。彼女の視点を本当にリアルな位置で捕らえようと試みが、『ONE』を大切に思う皆さんにとって正しい選択なのか、今でも五分五分だと思います。

ワタシも考えに考えて七転八倒しました。

茜ちゃんに血肉を与えることは、『ONE』ファンの皆さんにとって、本当に望ましいことなのか。向こう側の彼女でいてほしいのではないか、と。下手すると1巻で『えいえんの世界』を書いてしまったこと以上に大博打かも知れません。

でも、その判断は読者の皆さんにお任せしたいと思います。

この『ONE～輝く季節へ～』のシリーズでは、前の巻で書いたシーンがまるごと禁じ手になってしまふ、というとんでもない状況になつています。ゲームでは必ず起こる、浩平君のえいえんの世界へ消えてゆくことを、それぞれ違う形で書かなければなりません。

茜ちゃんが辿り着いた『えいえんの世界』の推測と、1巻で浩平君が見たものは明らかに違う形です。次に書く時にもまた、別の形で書かれることになると思います。
少なくともワタシにとっては、『えいえんの世界』はそう書かれなければならないものに思えます。これもまた大博打です。

1巻、2巻と読んでみて、あることに疑問を持った方がいると思います。たつたひとり、2巻までに一度も登場しなかつたあの彼女。
なるべく早く続きをお届けすることができるといいなあと思います。
それでは、また。

星凍る十二月

館山 緑

ONE～輝く季節へ～②

1998年12月31日 初版発行

原 作 Tactics

著 者 館山 緑

発 行 者 高橋 豊

発 行 所 株式会社ムービック

〒173-8558 東京都板橋区弥生町 77-3

Tel. 03-3972-1992

編集装丁 柏木秀博

黒木三郎（デザインワーク）

©Tactics 1998

本作品はフィクションであり、人物、団体などは全て架空のものです。

本作品の一部、或いは全部を無断で複写、転載することを禁じます。

落丁、乱丁につきましてはお取り替え致します。

Printed in Japan

郵便はがき

お手数ですが
50円切手を
貼って下さい。

173-8558

東京都板橋区弥生町 77-3 第一ビル

株式会社

ムービック 行

(小説ONE
～輝く季節へ～ ②)

ご住所	郵便番号()	都道府県
電話番号	()	
氏名	性別	男・女
年令	歳	職業・学年
お買い上げ 書店名	都道府県	市
	書店	

ムービックゲームコレクションシリーズ 小説 ONE～輝く季節へ～② アンケートハガキ

あなたのご意見を貴重な資料として、今後の編集に役立たせて頂きます。お手数ですが、下記アンケートにお答え下さい。

	この本を最初に知ったのは何によってですか？		
①	Ⓐ雑誌広告（雑誌名／ Ⓑ雑誌の紹介記事を読んで（雑誌名／ Ⓒ書店で見て Ⓓ人にすすめられて Ⓔその他（	） ） ） ）	
②	この本の購入方法は？ Ⓐ書店で予約して Ⓑ発売日以降書店で Ⓒその他（		
③	この本の価格について Ⓐ 高い Ⓑ 普通 Ⓒ 安い		
④	この本のページ数について Ⓐ 多い Ⓑ 普通 Ⓒ 少ない		
⑤	カバーデザインについて Ⓐ 良い Ⓑ 普通 Ⓒ 悪い		
⑥	この本の内容について Ⓐ 良い Ⓑ 普通 Ⓒ 悪い		
⑦	あなたの好きな本、アニメ、コミック、ゲームソフト等を教えて下さい。		
⑧	あなたはインターネットに月にどの位接続しますか？		
⑨	この本に対するご意見、ご感想をご自由にお書き下さい。		

ご協力ありがとうございました。アンケートに答えて頂いた方の中から、抽選で100名の方にテレホンカードを送らせて頂きます。抽選発表については商品発送をもってかえさせて頂きます。



9784896014204



1920293008578

ISBN4-89601-420-0

C0293 ¥857E

定価／[本体価格857円+税]

発行／株式会社 ムービック

8320-0331-WA02

ONE

～燃く季節へ～

©Tactics 1998

